# 護国の剣

ごこくのけん

六道慧（りくどうけい）

御算用日記

文庫書下ろし
長編時代小説




光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

# 護国の剣

御算用日記

六道慧（りくどうけい）




光文社

光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説

# 護国の剣
## 御算用日記

六道慧（りくどうけい）




光文社

この作品は光文社文庫のために書下ろされました。

# 目次


序　章　7
第一章　男心と梅雨（つゆ）の空　12
第二章　芸目付　60
第三章　義腹（ぎばら）・論腹（ろんばら）・商腹（あきないばら）　118
第四章　変化朝顔　176
第五章　交ざり者　227
第六章　幻の花　278
第七章　善く游（およ）ぐ者は　327
解　説　細谷正充（ほそやまさみつ）　380

御算用日記

# 護国の剣

# 序章

「殉死でござる」

若者は言った。

「我が友は、先月、みまかられた殿の後を追い申した。それがしが介錯つかまつりました次第」

夜明けを迎えた藩邸は、異様な静けさに包まれている。騒ぎを聞きつけた藩士が、廊下や中庭に飛び出して来たのだが、だれひとりとして声を発しない。その目は、血に染まった中奥の御座所に向けられていた。

「……あとの二人はどこにいる」

問いかけを発したのは、若者の父である江戸家老だった。若者は『人見の四天王』と謳われる遣い手のひとり。殉死したのもそのひとりとなれば、あとの二人という問いかけは、四天王の二人を指していることになる。

「国許にて、殿の亡骸に付き添うておりまするが、そろそろ出立した頃やもしれませぬ。江戸からおいでになられた役人の検使は、すでに終えましたゆえ」

若者は落ち着き払っていた。背後には血まみれの座敷があるというのに、常と変わらぬ表情をしている。凄惨きわまりない場と、平静きわまりない若者。それがよけい不安を与えた。

「殉死ではのうて、乱心であろう」

家老は、懸命に事の収拾をはかろうとする。殉死は御法度、幕府に知られれば御家断絶は免れない。なんとかして、息子の口から乱心の二文字を引き出そうとしたが、

「殉死でござる」

若者は同じ答えを繰り返した。

「追い腹を切り申した」

「いや、それは」

さらに説得しようとした家老のもとに、ひとりの藩士が駆けつける。袴がこすれ合う衣ずれの音が、静まり返った藩邸の廊下にやけに大きく響いていた。居並ぶ藩士は、じっと黙りこみ、家老のもとに向かった藩士を目で追いかけている。

「なに？」

耳打ちされたとたん、家老は顔色を変えた。

「両目付が、なぜ、こんなに早く」

はっとして言葉を切る。ふだんであれば聞こえなかったであろう小さな呟き。息を呑んだその驚きまでもが、ひしひしと伝わってくる。家老の厳しい目は、嫡男に向けられていた。

「知らせたのか」

「は」

それだけしか答えない。あらかじめ両目付への手配りをしていたのは確かだろうが、すでに到着している以上、追い返すことはできなかった。

「乱心として届け出る」

家老の言葉に、猛然と反撥する。

「それはなりませぬ。侍として腹を切った我が友の心を踏みにじるおつもりか。もし、御家老がどうしてもと仰せになるのであれば」

若者はおもむろに袴をさげた。

「それがしも、この場で腹を切る所存。覚悟は決めておりまする」

着物も袴も返り血で濡れている。加えて、父であるにもかかわらず、敢えて御家老と告げたところに、父子の確執が見え隠れしていた。鬼気迫る訴えに、ふだんはあまり表情を動かさない家老も狼狽える。

「待て、わかった。とにかく両目付を案内しようではないか。話はそれからじゃ」

忙しげに言い、踵を返して、表玄関の方に向かった。相変わらず藩邸内には、息苦しいほどの静寂が満ちている。みな彫りものの像のごとく立ちつくし、端然と座している若者を凝視めていた。

と、不意にひとりの藩士が、よろめくようにして御座所に歩み寄る。一歩、二歩と近づいて行ったが、妙にぎこちない動きだった。動転のあまり、身体が強張ってしまったのかもしれない。

「なぜ？」

ようやく出た声は掠れていた。

「なぜでござる、なぜ？」

「民のため、藩士のため、そして、藩のため」

若者は答えたが、得心できなかったのだろう、男はふたたび口を開きかけた。

「されど」

「我が命、天に在り」

朗々とした声が響きわたる。

「肥後もっこすの気骨を取り戻せ！」

文化八年（一八一一）四月。
鳥の囀（さえず）りすら聞こえない。
藩邸はまた不気味な静けさに覆われていった。

# 第一章　男心と梅雨の空

## 一

静かだった。

六月朔日。

本材木町にある姉たちの家は、気詰まりな静寂に包まれていた。一畳程度の土間と手前に三畳、奥に六畳という造りの家は、九尺二間の裏店よりはましであるものの、梅雨の最中とあって、むっとするような湿気がこもっている。

にもかかわらず、生田数之進は強い寒気を覚えていた。ともすれば逃げ出したくなる気持ちを抑えながら、目を逸らしてはなるまいと、懸命に己を叱りつけている。

怖れてはならぬ、ここで折れるわけにはいかぬ。

額に滲む冷や汗を拭いもせず、二女の冨美と三女の三紗を見つめている。冨美は大年増の

三十、三紗は数之進より一つ年上の二十七。それぞれに縫い物や料理の腕前を活かし、長屋暮らしにも馴染んできていたはずなのだが……。

「そういえば」

後ろに控えていた盟友の早乙女一角が、こほんと空咳をして、静寂を破った。

「数之進。姉君たちの借財は、あと幾ら残っているのじゃ」

と、まさに怖れを知らぬ問いかけを発する。年は二十五、歌舞伎役者と見まごうばかりの色男は、数之進が断りやすい方向に話を持っていこうとしていた。友の心遣いは痛いほどわかっているのだが、哀しいかな、口がからからに渇いてしまい、答えるのにいささか時を要した。

「ひ、百二十五両」

ようやく発した声は、なさけないほどに上擦っている。それでも一角はこの機をのがすまいと芝居気たっぷりに応じた。

「なんと」

大仰に目を丸くして、続ける。

「はてさて、百二十五両とは、驚いたものでござるな。さりながら、当初は確か三百五両あったはずゆえ、よくぞここまで減らしたものよ。ひとえに数之進の働きのお陰、よう頑張っ

たものでござる。それがしが知る限り、姉君たちは一銭も、よろしいか、一銭も出してはおられぬ。冨美殿は前掛作り、三紗殿は総菜売りがうまくいき、儲けているにもかかわらず、だ」

じろりと二人の姉を睨みつけた。数之進も視線で「そのとおりだ」と訴えようとしたが、三紗に凍りつくような眼差しを返されて、気弱げに目を逸らした。この二人を前にして反論できるのは故郷の長女と一角のみ。

「見世を構えたいのです」

三紗がきつい目と声音で告げた。

「伊兵衛さんが、世話をしてくださるとのこと。一階に見世と四畳半の座敷、二階に六畳が二間という二階家です。そなたの助けは要りません。伊兵衛さんから借りる形になりますが、月々、わずかずつでも支払いをして、わたくしが返します」

「まずは百二十五両でござろう」

一角は一歩も引かず、膝で前に出る。

「姉君たちが作った借財でござるぞ、それを返しもせずに、また借りるなど言語道断。生田家を継いでおられるお国許の伊智殿とて、とうていお許しになりますまい」

友にちらりと視線で促されて、数之進も勇気を奮い起こした。

「い、いかにも、一角の申すとおり、姉上様はお怒りになられましょう。再三再四、姉様がこの話をされておりましたので、先日、文をしたため、姉上様のもとに送った次第にございます。その返事が来た後、今一度、こういう場を持つのが宜しかろうと思う次第」

語尾が弱々しく消えたものの、なんとか最後まで言い終えられた。数之進はごくりと唾を呑み、二人の姉を盗み見る。

「そうですねえ」

黙りこんでいた冨美が、おっとりと口を開いた。

「無理に事を運んでも、あとで色々と差し障りが出るかもしれませぬ。ここは数之進の言うとおり、姉上様の文を待つのがよいのではありませんか」

あたりさわりのない意見が出るのは、鳥海左門という後ろ盾がいるせいか。冨美は数之進の上役の左門と相愛の仲であるため、どこか余裕が感じられる。三紗の形相が般若のごとく変貌した。

「姉上は気楽なものですね。いずれは大身の御旗本の奥方にと、内心、思うておられるのかもしれませんが、男心と梅雨の空。いつ何時、心変わりなされるか知れたものではありませぬ。そんなあてのないものを信じるよりも、立派に自立することこそが女子の生きる道。そのためにも、いえ、だからこそ、わたくしたちの家が必要なのですよ」

「男心と梅雨の空」

とたんに、冨美は不安な表情を見せる。左門とは、はっきりした約定をかわしたわけではない。しかし、愛刀を預けられたそれが、男の誠と真の証。言うなれば、結納代わりであるものを、いつまでも話が進まないのはすなわち他に女ができたからではないのか。揺れ動いた心を見て、小鬼がにんまりほくそ笑む。

「男など信じられませぬ」

三紗は躊躇いなく言い切った。

「姉上とて、辛い想いを味わわされたではありませんか。子無し女は去れとばかりに、婚家を追い出されたのをお忘れになりましたか。姉上様はお心の寛いお方でございますゆえ、あたたかく迎えてくださいましたけれど、肩身が狭い思いをしたのもまた事実。二度とあのような思いを味わわぬためにも」

そっと冨美の手を握りしめる。

「この江戸で華を咲かせようではありませんか」

「華を」

おだてにのせられやすい二女は、頬を上気させていた。派手好き、小判好きなのは、三紗と同じだが、どこか抜けたところがある。左門はそこがいいのかもしれないが、数之進にと

っては厄介な二人といえた。

ちなみに生田家では、婿を取って故郷の生田家を継いでいる長女の伊智を姉上様、出戻りの冨美を姉上、したたかな女策士の三紗を姉様と呼び分けている。二人とも人目を引く美人であるのが、いいのか悪いのか。

「今こそが好機」

女策士が話を戻した。

「そなたが入れあげている総菜屋には、絶対に負けたくないのです。菜(おかず)を売り始めたのは、わたくしの方が先であるものを、あの女子は横から割りこんできて」

ふたたび睨みつけられて、数之進は慄(ふる)えあがる。

「い、入れあげてなどは」

かろうじてあげた声に、すぐさま反論が返った。

「あれこれと世話をしているではありませんか、献立を教えているではありませんか。あちらは見世を構えておりますゆえ、だれが見ても有利。そこにそなたが智恵を貸せば、鬼に金棒ですよ。近頃では、わたくしのお客様がずいぶん〈おかめ〉に流れております」

総菜屋〈おかめ〉の女主、世津(せつ)は、かつて数之進が想いを寄せた女子に似ており、二人の間にはふんわりとした悪くない空気が生まれている。水茶屋で働いていた世津が、多少こみ

いった経緯を経て見世を得た後、楽しげに商いをしているのが腹立たしくてならないのだろう。

「許せませぬ」

怨念のこもった三紗の言葉に、何度目かの悪寒を覚えた。が、ここで言い負かされては、大変なことになる。がんばれ、というように、一角が脇腹を突いた。

「ですが、姉様。お世津さんのことと、姉様が見世を構える話は、また別ではないかと」

「同じです」

きっぱりと言い切られて、あとが続かなくなる。おれにまかせろとばかりに、一角が代役を買って出た。

「とにかく、伊智殿の文を待つのが得策であろうと思う次第」

「されど、江戸における生田家の主は」

三紗の反論を早口で遮る。

「さよう、数之進でござる。その主が待てと言うているのでござる。従うのが女子の務め。そうではござらぬか、ええ、冨美殿、いかがでござるか、三紗殿」

今のうちに早く外に出ろと、手で合図していた。数之進は公方様の御前から辞するときのように、膝行しながら、土間に降りる。その間、もちろん姉たちの顔は見ない。草履を履い

て外に出、向かいの上役の家に飛びこんだ。
「ふう」
「大丈夫か」
すぐに一角が追いかけて来る。
「いや、膝行しているとき、軽い目眩を覚えた。気を失いかけたのやもしれぬ。姉様の目つきが、あまりにも怖ろしかったゆえ」
「ものの本によれば、外国では、邪眼、あるいは邪視というものがあるとか。い、いーぐる、いや、『いーぢるあい』であったか。まさにあれこそが、それやもしれぬ」
「うむ。今、思い出しただけでも」
数之進はぶるるっと震えた。
「このとおりだ。今宵は悪夢にうなされるやもしれぬな」
「邪気を祓うには、茶が一番よ。待て、おれが旨いのを淹れてやる」
「すまぬ」
戦い疲れて、這うように、座敷にあがる。時刻はそろそろ八つ（午後二時）になろうという頃か。三紗の手伝いをしている多恵の可愛らしい声が聞こえた。菜を売り歩いて、戻って来たに違いない。

「あの」

不意に戸が開き、大屋の彦右衛門が顔を覗かせた。四十前後のつるりとした顔の男で、大屋という煩瑣な役目をこなしながら、絵双紙屋〈にしき屋〉を営んでいる。断りもなく厄介な頼み事を引き受けるのが玉に瑕。それを察したのだろう。

「駄目だ」

一角がぴしゃりと言った。

「まだなにも申しあげておりません」

「聞くまでもない、ひょうたんなまずのようなその顔が、すべてを語っておるわ。どうせまた数之進の千両智恵をあてにしているのであろう。『てまえにおまかせください』とばかりに、胸を叩くおまえの姿が、おれの脳裏に浮かんでおる。よいか、彦右衛門。前にも言うたと思うが、千両智恵は安売りはせぬ、と、おお、そうじゃ。おれの五両智恵であれば、貸さぬでもないがな」

「五両智恵は要りません。ひとつは、てまえのご相談でございまして」

そう言いつつ、彦右衛門は土間に入って来ていた。大屋の相談となれば、冷たく断るわけにもいかない。

「なにかあったのか」

仕方なく数之進は訊いた。

「はい。道に置かれている天水桶のことでございますが、ボウフラが湧いてしまい、困っております。今年は暑いせいでしょうか。蚊がすごいんでございますよ。もとを絶たなければ駄目だと思いまして、ご相談申しあげる次第です」

「山椒を撒けば、ボウフラは退治できるが、町内全部の天水桶となると、さすがに山椒がもったいない。そうだな。子らにメダカを捕ってこさせるがよい。お多恵にでも頼めば、弟たちが喜んでやってくれよう」

「なるほど、それは妙案」

彦右衛門はぽんと手を叩いた。

「メダカにボウフラを食わせて、蚊を少なくしようということでございますな。流石は生田様。千両智恵は本日も冴えわたっておいでのようで」

「と持ちあげる裏には、さらに厄介事あり、ではないのか」

数之進の言葉に、彦右衛門は苦笑を返した。

「はい。噂を聞いた者たちが、日に日に増えるばかり。お忙しいから駄目だと言いましても、この始末でございまして」

開け放った戸の向こうは、門前列をなすといった状態になっている。数之進が答える前に、

一角が声を張りあげた。
「なにをしているのじゃ、ここは相談所ではないぞ。帰れ、帰れ。彦右衛門、さっさと追い返さぬか」
「待て、一角」
素早く制して、彦右衛門に目を向ける。
「すまぬが、相談の内容を聞き取ったうえで、今日はお引き取り願えぬか。われらも暇ではない。それに路地を埋めつくされては、長屋の方々の迷惑になる」
「わかったな、彦右衛門。そういうことだ」
「畏(かしこ)まりました。仰せのとおりにいたします」
「おっと、待てまて。そこにいるのは、お世津ではないか」
一角が列に並んでいた世津を見つけた。彦右衛門に引き連れられて行く者たちを押しのけて、数之進の前に連れて来る。

## 二

年は二十二、目元が数之進の想い人によく似ていた。左門の仇敵である『さるお方』の指図により、数之進を陥(お)とすつもりが本気になって、というやつだ。きらいではないが、男女

の仲になるところまではいっていない。

「生真面目に並ぶあたりが、我が友に似ておるような気がしなくもない。して、お世津よ。今日は何用じゃ」

一角がまたまた数之進の代弁者となって問いかけた。

「はい。これを」

世津は小鉢に被せていた布巾を取る。

「先日、生田様に教えていただいた葛(くず)たたきを、烏賊(いか)で作ってみました。お味見をしていただこうと思いまして」

「そうか。すまぬな」

小鉢を受け取ったはいいが、気が気ではない。向かいの家では三紗が凄い目を向けている。世津に被害が及んではなるまいと、早く帰そうとしたが、

「そうそう、数之進。本所(ほんじょ)一ツ目弁天前の猫茶屋でしたか。そなたは早乙女殿と、四、五日前にも行ったようですが、馴染みの女子がよほど気に入った様子。故郷の姉上様には、さて、どのようにお知らせしたものでしょうか」

意地悪く三紗が睨(ね)めつけた。見世の件の意趣返しであるのはあきらか。

「……」

数之進は青ざめ、そして、世津も別の意味で青ざめる。

「猫茶屋」

そう言ったきり、二の句が継げなくなっていた。伊達に水茶屋勤めをしていたわけではない。本所一ツ目弁天前と聞けば、どんな場所であるのかはわかっている。

「い、いや、お世津さん。確かに行ったことはあるが、四、五日前ではない、かれこれ十日ほどにはなろうかと……」

「馬鹿正直に言うでない」

一角の制止は間に合わない。世津はくるりと踵を返し、木戸を走り出て行った。勝ち誇ったような顔の三紗を、盟友が睨みつけたが、身から出た錆と諦める。

「行こう」

力なく言った。

「そうだ、すぐに行け、追いかけろ。なあに、お世津も馬鹿ではない。本気と遊びの違いぐらいはわかるさ」

「いや、行くのは、伊兵衛さんの家だ」

「親父殿の家？」

一角は一瞬、首をひねったが、

「そうか。これ以上、姫君ならぬ『ひね君』の我儘を聞いてはならぬと、諫めに行くのだな。よし、おれも同道しよう」

わざとらしく大声で言い、数之進の肩を抱いた。目に見えない戦いが、今このときも繰り広げられている。隙を見せれば三紗は、強引に家を借りかねない。まずは面倒なことを片づけてからと、数之進は必死に気持ちを切り替える。

「失礼でございますが」

木戸を出ようとしたとき、男に声を掛けられた。

「千両智恵のお侍様でございますか」

小柄で、年は二十二、三といったところだろう。陽に焼けた顔には誠実そうな人柄が滲み出ているように見えた。大工や振り売りといった身体を使う職に就いているのかもしれない。一瞬、間を置いて、数之進は答えた。

「いや、そうではない」

「われらも千両智恵を借りに来たのだがな、忙しいと断られてしもうたわ。取り付く島もない冷ややかな男よ。噂は噂にすぎぬのであろうさ」

一角が言葉を継ぐ。忙しくなりすぎた千両智恵を、案じるがゆえの労りに満ちていた。心で友と男に詫びつつ、話を合わせる。

「日を改めた方がよかろうな。今日はことさら虫の居所が悪いようだった」
「さようでございますか。それでは別の日にいたします」
頭をさげた男に、数之進たちも頭をさげて、別れた。数歩、歩いたときである。
「ときに、生田様」
いきなり呼び掛けられて、思わず振り向いた。にこっと男が笑いかける。つられて、数之進と一角も笑った。
「見破られていたか」
「さいぜんも言うたではないか。おまえが馬鹿正直すぎるのじゃ」
「いや、うまくかわしたつもりなのだが……なぜ、わかった？」
「お訊ねいたしました折、わずかでございましたが、お答えが返るまで間が空きました。噂によると、生田様は真っ直ぐなご気性の方であるとか。嘘をつくことに躊躇いが出たため、微妙な間が空いたのだと思いまして」
男の答えに、心からの言葉が出る。
「ふむ、なかなか鋭い」
「それだけの智恵があれば、千両智恵の出番はなかろう。われらが忙しいのは事実じゃ。特に数之進は、人が好いゆえ、大屋の彦右衛門にいいように使われておるからな。おれが仕切

らねば、次から次へと厄介事が持ちこまれるは必至。言うておくが千両智恵は無料ではないぞ、わかっておるか」

聞こえよがしの大声は、彦右衛門への忠告。

「気にするな。大屋に言うているのだ」

囁き声を、一角が不満げに受ける。

「おれは、その男にも言うている。前から言うているように、おまえは千両智恵を安売りしすぎるのじゃ。たやすく浮かぶものであれば、無料働きもかまわぬがな。頭の隅に引っかけて、苦しむこと数か月」

「そんなにかかるのですか」

目を剝いた男に、数之進は苦笑を返した。

「まあ、ときによりけりだが」

「数か月じゃ」

一角は強い口調で告げる。〈にしき屋〉から顔を突き出した彦右衛門や、相談に訪れた者たちに、冷ややかな眼差しをくれた。

「相談すれば、即座に千両智恵が得られるわけではない。さらに、我が友はこれで生計を立てているわけでもない。あくまでも人助けのため、困っている者のためよ。その善意につけ

こみ……」

「お願いいたします！」

〈にしき屋〉にいた相談者のひとりが飛び出して来た。地面に平伏して、一角に負けないほどの大声を張りあげる。

「わたしは、亀戸村で百姓をしている者でございます。平助と申します。竹林になっている場所を畑に変えたいと思っているのですが、竹は伸びるのが早くて、思うようになりません。生田様のお噂を耳にして、お助けいただけないかと思い、参りました。どうかお願いでございます。よい智恵をお授けください」

「言うているそばから、これだ。いけしゃあしゃあと善意につけこみおって」

忌々しげに睨みつけた一角を、数之進は、仕草と表情で宥めた。その場に屈みこんで、百姓と言った男の顔をあげさせる。

「竹林は、いかようにも利用できるではないか。籠や笊、竿、竹皮の草鞋と、伐って売れば、そこそこ銭になる。無理に畑にしなくともよいのではないか」

「わたしは親不孝をして、しばらく家を出ておりまして」

男は躊躇いがちに訴えた。年は三十、博奕に手を出して、お定まりの転落劇。家に戻ろうかどうしようかと悩んでいたとき、父親が病に倒れたと聞いた。家に戻ってみれば、宝であ

るはずの田畑は荒れ放題。いっそ売っ払ってしまおうかと思ったが、実りのない地では、買い手もつかずに四苦八苦している。

「おとっつぁんも、先祖代々の土地を売るのはいやだと泣きますもので、それじゃあ、と、わたしも頑張りました。ですが」

「竹は言うことを聞いてくれぬか」

数之進は立ちあがり、〈にしき屋〉に居並ぶ者たちを見やった。どの目も次はおれの番だと言わんばかりである。一角もそれを察して、彦右衛門に繰り返した。

「同じことを何度も言わせるな。名前と在所、そして、頼み事を記しておけ。おい、その土下座している『つけこみ男』もじゃ。彦右衛門を通さねば、千両智恵は動かぬ。よいな」

「彦右衛門さん、これを」

数之進は持っていた小鉢から、烏賊の葛たたきをひとつ取って口に放りこむ。世津の気持ちを無にせぬよう、味見をしたうえで彦右衛門に渡した。侍が小鉢を抱えたまま、歩くわけにはいかない。渡されたはいいが、さて、どうしたものかと思ったのだろう。

「生田様？」

怪訝そうな彦右衛門に、早口で答える。

「残りは食べてよい。小鉢は鳥海様の家に戻しておいてくれ」

「さあ、どけどけ。われらは先を急いでおる」

一角に背中を押されて、数之進はその場を離れた。様子を見ていた職人ふうの男には、付いて来るよう、視線でさりげなく促している。曇った空からは今にも雨が落ちてきそうだった。

男心と梅雨の空か。

世津の後ろ姿が、瞼の裏に焼きついている。中途半端な己の心を示しているかのような空模様。三紗の皮肉が心に痛い。ともすれば、世津の見世に駆けつけたくなる気持ちを抑えて、一角の実家――室町二丁目の〈北川〉に向かった。

## 三

〈北川〉は畳や蚊帳を商う大店で、一角はこの家の四男として生まれている。早乙女家の養子となった後も、実父の伊兵衛は金銭面の助力を惜しまず、生田姉妹にも格別の心遣いを見せていた。もっとも三紗に対する好色心が働いているのは否定できない。近頃、とみに色艶のよくなった隠居とは、総菜屋の出店について、よく話をしなければならないが、まずは相談事と思い、〈北川〉の奥座敷に腰を落ち着けた。

「わたしは、雑司ヶ谷で〈岩田屋〉という植木屋を営んでおります。名は清治郎で、年は二

十二。植木屋にもそれぞれに得意な花木がありまして、わたしの場合は朝顔を売りにしているのです」

「ほう、朝顔か。まさに今が盛りの花だな」

数之進の答えに、一角が続いた。

「朝顔と言うても普通の朝顔ではあるまい。変化朝顔か」

障子を開け放した奥座敷は、涼しい風が通りぬけ、こもりがちな湿気をうまく追いやっている。手入れの行き届いた庭から流れて来る木々の匂いが気持ちよかった。座敷にいるのは、数之進と一角、清治郎の三人だけである。伊兵衛は気を利かせたのか、同席していない。

「さようで」

と、清治郎は頷いた。変化朝顔は突然変異によって誕生する朝顔のことで、一代限りしかその変わった花を咲かせないとされている。江戸では珍木、珍花がもてはやされて、高値で取り引きされることも少なくない。

「相談事というのは、どうやったら珍しい朝顔を代々生み出せるのか、ということか。そうだとすれば、わたしにはわからぬぞ。朝顔については、清治郎さんの方が詳しいのは間違いない。出番はないように思うがな」

早々と牽制する。畑違いの相談事を持ちこまれて頭を悩ませるのも、それなりに面白いが、

数之進と一角には人には言えない御役目がある。いつ命がくだるかわからないため、あれもこれもと抱えこむのだけは避けたいというのが本音だった。

「いえ、栽培のことではありません。振り売りが苗を売るときに、咲いた朝顔を客に見せたいのですが、ご存じのように朝顔は名前どおりの花。咲いているのはほんの一時なのです。苗を売りに出る頃には、萎んでしまいます。これを……」

「待て」

数之進は素早く遮る。

「まさか、朝顔を美しく咲いた状態で、客に見せられないかという相談ではあるまいな」

先んじて言った。

「はあ。その『まさか』でして」

陽に焼けた顔に、窺うようないろが浮かぶ。さしもの千両智恵も無理か。相談に来たのは無駄足だったか。そんな表情を見ると、逆になんとかしてやれないだろうかと思ったりもする。一角が言うところの、苦労性と貧乏性の業が疼いた。

「難題だ」

ぽつりと出た呟きを、一角が受ける。

「そういうわけだ、清治郎とやら。朝顔は朝、咲いて、枯れるからこそ朝顔と言うのであろ

う。ずっと咲いているとなれば、それはもう朝顔ではない、一日顔じゃ」

「ははは、いつもながら、おぬしはうまいことを言うな。そうか、一日顔か。朝顔と昼顔と夕顔、三つ併せて一日顔か」

笑いながら、閃きが訪れないかと、忙しく考えていた。花はほんの一時、咲き誇るからこそ刹那の美しさが輝く。その美しさをそこなわずに、苗を売るときの花の見本として、客に見せることはできないものか。

「お手あげだ、清治郎さん。すぐには浮かばぬ。されど、なにか、こう、もやもやしているゆえ、いずれ浮かぶやもしれぬ。思いつき次第、知らせるということで、今日は得心してはもらえまいか」

「それは、もう、おまかせいたします。ですが、花の時期はわずか。朝顔の苗を売るのは、せいぜいあとひと月がいいところでございますので」

「そのときは、来年に持ち越しじゃ」

一角が答える。

「千両智恵は女子のように気紛れでな。急かされても、怒鳴られても、浮かばぬときは浮かばぬのじゃ」

「許せ」

「謝ることはない、すぐに謝るのは、おまえの悪い癖よ」
視線を清治郎に戻して、一角は告げた。
「雑司ヶ谷の〈岩田屋〉であったな。千両智恵が閃き次第、使いを出すゆえ、楽しみに待つがよい。今日、相談して、今日、答えが得られるとは、思うておらなんだであろうが、ええ、清治郎よ。それとも期待していたか」
「期待しておりました。ですが、安請け合いなさらぬお方であることも、耳にいたしております。だからこそ、信じられるお方なのだと」
「いかにも、我が友は信じるに足る男よ。ゆえに、本日はこれまでじゃ」
「わかりました。宜しくお願いいたします」
頭をさげて出て行こうとした清治郎に、数之進は慌てて声を掛けた。
「ひとつ、頼みがある」
「はい？」
「清治郎さんが育てた朝顔を見てみたいのだ。見ているうちに、なにか閃くやもしれぬ。一度、雑司ヶ谷の家を訪ねてもよいか」
「もちろんでございます。いつでも、おいでください」
清治郎はもう一度、深々と頭をさげ、座敷をあとにする。吹きぬける風の涼しさに、数之

進は目を細めた。

「よい風だ」

「と、おまえはさも風流を楽しむような顔をしておるが、その実、頭の中はいっぱいであろう。伸び放題の竹林はどうすればよいのか、並んでいた者たちの相談事はどのようなことであろうか、とな。はてさて、困ったことよ。清治郎であったか。彼の者の頼み事はまことに厄介じゃ。朝顔を枯れさせぬ策があるのかどうか。年老いた女子を美しく見せるよりも、むずかしいやもしれぬ」

「今のひと言で、よけい気が重くなった」

「お、それはすまぬ。おれはおまえの気持ちを言葉にしただけなのだがな。もやもやしているのであれば、そのうち、閃くであろうさ。閃かなければ、それだけのことよ。必要がないゆえ、千両智恵の神が閃きを与えなかったのだと考えるがよい」

「必要がない、か」

「さよう。そもそも花は枯れるからこそ、美しいのではないか。枯れぬ花など気持ちが悪いだけだ。枯れぬ爺もそうだがな」

辛辣な物言いは、姿を見せた伊兵衛に向けられたもの。後ろに下女を従えて、膳を運んで来る。若い頃はさぞかし女を泣かせたであろうと思われる色男も、来年、七十を迎えるとな

れば、品の良さを漂わせた大店の隠居らしい面差しに変わっていた。
「枯れぬのが、いけないのですか。てまえがよぼよぼになって、大小便を垂れ流すような有様の方が、一角殿は嬉しいと仰せになりますか」
「ふん、相変わらず口の減らぬ爺じゃ」
一角は、膳から銚子を取り、そのまま飲み始める。
「行儀の悪いところは、だれに似たのやらでございますな。ささ、生田様も遠慮なさらずにどうぞ」
「いつもすまぬな。馳走になる」
杯で受け、さっそく切り出した。
「姉様のことだが、今しばらく、総菜屋を出すのは控えさせたい。江戸に来て、まだせいぜい一年と四か月ほどだ。四兵衛店で暮らしながら、菜売りをするのが分相応よ。借財を返し終えた時点で、あらためて考えたいと思うておる」
「承知いたしました。てまえがよけいなことを申しましたようで」
「わかっておるなら、はじめから言うでない。しつこく働きかければ、数之進が折れると思うておるのやもしれぬがな。事はそう簡単ではないのじゃ。三紗殿は般若のような顔をしておったわ。あれは数之進ならずとも怖い。おれも悪夢にうなされるやもしれぬ」

「生田様。先程、ちらりと小耳に挟んだのでございますが、冨美様と三紗様を入谷にお連れしてはいかがでしょうか」

「狸爺（たぬきじじい）。おれの話を聞いておらぬのか、ええ、急に耳が遠くなったか」

一角が語気荒く迫っても、伊兵衛は馬耳東風、涼しい顔で話を続けた。

「暑気払いと花見を兼ねれば、ご機嫌も直りましょう。ついでに夜は大川で舟遊山（ふなゆさん）の花火見物と洒落（しゃれ）れば、なお宜しいのではないかと」

「そういえば、両国の川開きが行われたばかりだったな」

数之進は独り言のように呟いた。

## 四

川開きが行われるのは五月二十八日である。

この日から丸三か月間、八月二十八日までが、夜空を彩る花火の競演となるのだ。二十八日も大名家の肝煎（きもい）りで、派手やかに花火が打ちあげられていた。冨美と三紗も連日のように出歩くのが常。数之進の脳裏にふと、世津の白い貌（かお）が浮かんだ。

「お世津さんもお呼びいたしましょうか」

伊兵衛の、まるで心を読んだような言葉にぎょっとする。

「な、なぜ、お世津さんのことを考えているのが」

自分の言葉に、自分で赤くなった。言わずもがなであろう、表情に出ていたに違いない。父子は顔を見合わせて、にんまりと笑った。その顔がまたよく似ている。

「まことに数之進は正直者よ」

「はい。一角殿とは違いますな」

「そのひと言が、よけいだというに。それはそれとして、親父殿にしては、よい考えかもしれぬぞ。お世津は見事に三紗殿の奸計、すなわち『男心と梅雨の空』という策に陥ち、帰ってしもうたのじゃ。もとをただせば、そう、親父殿にも関わりがなくもない」

「はて、てまえに、でございますか」

「さよう。三紗殿が策を弄したのは、総菜屋を出せないがためのいやがらせ。健気に烏賊の葛たたきを持って来たお世津に、腹立ちまぎれの言葉を叩きつけたのよ。まあ、馬鹿正直に答えてしもうた数之進も数之進だがな。総菜屋の話を持ちかけた親父殿も無関係とは言えまいさ」

「ははあ、なるほど。さようでございましたか。そうとなれば、一肌、脱ぐしかありませんな」

「もう、よい」

延々と続きそうな父子の会話を終わらせる。

「お世津さんとは、別に付き合うているわけではない。わたしが岡場所に行こうが、猫茶屋に馴染みの女子がいようが、どうでもいいことではないか。あれこれ気にする方がおかしいのだ、なんでもないものを。さよう、お世津さんとわたしの間には、特別な感情はない。単なる知り合いにすぎぬ」

「なるほど」

と、父子は同時に頷き返して、じっと見つめた。物言いたげな表情もそっくりなだけに二倍の効果がある。数之進は白旗をあげた。

「言いたいことがあるなら……」

「おお、あるとも。お世津はおまえに惚れておる」

「はい。よき女子でございます。水茶屋に奉公しておりましたときも、素直で控えめな心映えの美しさに惚れて、通いつめる男が多かったとか。情が深いのでございますよ」

「調べたのか」

数之進は驚いて、伊兵衛を見る。

「あたりまえではありませんか。生田様の嫁女になるかもしれない女子。氏素性がわからぬことには、てまえも枕を高くして眠れません」

「親父殿が眠れようが眠れまいが、どうでもいいことだがな。調べたことについては、おれも悪いこととは思うておらぬ。ヒモでもいた日には、目もあてられぬわ。強請り、たかりと今より面倒なことが起こるは必定。戦う相手は三紗殿だけで充分じゃ」

「然り」

即座に同意した数之進に、伊兵衛は複雑な表情を向ける。

「三紗様は」

「他にもなにかあるのか」

と口にしただけで、心ノ臓がどきどきし始めた。すわ、これはあらたな騒動か。いつも以上に底意地が悪かったのは、裏に厄介事が隠れているからか。

「落ち着け」

一角が軽く肩を叩いた。

「大きく息を吸って、吐いて、もう一度、吸って、吐いて。よし、大丈夫だな。親父殿、さも深刻そうな顔をするでない。どうせ、たいしたことではなかろうが、数之進の友はおれだけではないのだ。苦労性と貧乏性という、面白い友も身裡に飼うているゆえ、人よりも考えすぎるきらいがなきにしも非ず。もったいをつけずに、さっさと言え」

「では、申しあげます。三紗様のご不興の原因は、想いを寄せている殿方が、近頃、姿を見

せないためではないかと」

「想いを寄せている殿方、とな」

色事に疎い数之進はぴんとこない。が、一角の口からは、すぐにその名が出た。

「杉崎春馬か」

得心したように何度も頷いている。

杉崎春馬は、尾張柳生家の家臣だが、表向きは脱藩して、関わりはないという形を取っていた。だが、実際は藩命を受け、数之進の命を隙あらばと狙っている。『柳生五人組』に属する刺客のひとりなのだが、命を助けられたことに恩義を感じたのか。借りを返すためと称して、数之進を助けたりもしていた。

「ははあ、親父殿の顔色が冴えぬのはそのためか」

一角はさらに深読みする。

「三紗殿にしては、まともな相手よの。数之進の命を狙うておるのが、ちと厄介ではあるものの、千両智恵にいたく心を動かされた様子。尾張柳生家を脱藩しただけでなく、『柳生五人組』も脱けるのではあるまいか。浪人になって、三紗殿のもとに駆けつけ、二人は永遠に添い遂げましたとさ、で、めでたし、めでたしだ」

「そのようなことにはなりません」

伊兵衛は言い返したが、心なし、声が小さかった。

「人の恋路を邪魔するやつは、と言うではないか。三紗殿に相応しい相手が現れたときには、潔く身を引くのが、七十を迎えた翁の最後の仕事であろう」

「七十は来年でございます。てまえはまだ六十九でございますれば」

しっかりと言い直した後、伊兵衛は小さな吐息をついた。

「杉崎様の方も満更ではないご様子。ですが、なんと申しましても、お立場がよくありません。もとは尾張柳生家の家臣、いえ、門弟と言った方が正しいでしょうな。訳あって、生田様のお命を狙うことになったと、申されておりましたが」

「な、なんだと、まさか」

腰を浮かせた数之進の隣で、一角もさっと顔色を変える。

「親父殿、杉崎春馬に会うたのか」

「はい」

伊兵衛は平然としていた。二人は顔を見合わせずにいられない。世津の身辺を調べたときと、同じ気持ちなのだろうが、相手は刺客。豪胆なのか、一途なのか。無知とは思えない老爺だけに、さまざまな思いが湧いてくる。

「やつはどこに住んでいるのじゃ」

一角は、いかにもらしい問いかけを発した。春馬の気持ち云々よりも、どこに潜んでいるのかを知りたい。

「尾張家の下屋敷でございます。なんと申しましても、御三家のひとつ。若い者が四、五人、転がりこんだところで、藩の台所に支障は出ますまい。柳生家の世話にならないのが、いささか気になりはしましたが」

「江戸柳生と尾張柳生は仲が悪いのじゃ。二家はそれぞれ仕える家も違うておる。江戸柳生は将軍家の剣術指南役を務める一万石の大名、尾張柳生は尾張家より五百石を賜る家臣よ。将軍家には、あまりよい感情は持っておるまいさ」

一角の答えを聞き、伊兵衛の浮かない顔が、さらに不安げないろを増した。

「色々と込み入った事情があるようで」

「さよう。ゆえに、親父殿もこれ以上、首を突っ込まぬ方がよい。畳の上で極楽往生したいと思うのであれば、嗅ぎまわらぬことだ」

「わたしも同じ考えだ。伊兵衛さんが、姉様のことを案じてくれるのはありがたいがな。深入りしてはならぬ」

「承知いたしました」

伊兵衛は深く追及しない。数之進と一角の御役目について、知っているはずだが、そうい

う話は決して口にしなかった。

「ですが、生田様。お世津さんのことだけは、言わせていただきたく思います。明日にでも花火見物をいたしましょう。それとも雑司ヶ谷においでになりますか。段取りはてまえにおまかせください。生田様が所帯をお持ちになれば、鳥海様と冨美様のご縁談もすぐにまとまります」

終わることなく、縁談話が続いている。雑司ヶ谷の朝顔、両国の花火、ゆったりと舟遊山。数之進の気持ちは晴れない。

どうしようもなく、気が重かった。

## 五

翌日。

「数之進。ひとつ、訊いてもよいか」

一角の問いかけに頷き返した。

「むろんだ。なんでも訊いてくれ」

「今日は、まず雑司ヶ谷に足を運び、植木屋の清治郎を訪ねて、朝顔を見ながら千両智恵が閃くのを待ち、それが叶わぬときには、中食（ちゅうじき）を親父殿の奢（おご）りで馳走になり、舟遊山をしな

がら色鮮やかな夜の華、つまりは花火だが、これを見物するはずであった」
「うむ」
「それなのに、だ」
と、一角は屈めていた腰を伸ばして、荒れ放題の竹林を見まわした。
「なぜ、われらは亀戸村の竹林で、竹を伐っているのであろうな」
梅雨の晴れ間が覗いた空は、どこまでも青く澄みわたっている。照りつける陽射しは強く、二人は笠を被り、首には手拭いを巻いていた。もちろん襷掛けをして、袴の裾もからげている。鍛錬をするときの稽古着に着替えているため、さほど気にしなくてもいいのだが、すでに汗まみれになっていた。
「朝顔の件は、まだなにも閃かぬ。雑司ヶ谷に行くのは、もう少し手応えらしきものをつかんでからにしたいのだ。花火見物に関しては、これから、いくらでもできるゆえ」
数之進は、ひたすら篠竹を抜くことに気持ちを向けている。身体を動かす方を選んだのは、よけいなことを考えずに済むからだが……一角も篠竹を抜きながら、なにげない口調で継いだ。
「女子はすぐに機嫌をそこねるが、もとに戻るのも早い。甘いものでも手土産にして見世を訪ねれば、すぐに今までどおりよ。お世津も今頃は後悔しておるやもしれぬ。あまり時を置

かぬ方がよいぞ」
「そうだな。ところで、一角。わたしもひとつだけ訊ねたいことがある」
「おお、なんでも訊け。遠慮は無用だ」
「刀は外した方が、楽に作業できるのではないか。わたしは、そら、大小ともに外して、あそこに置いてある」
目で道端を指して、一角に視線を戻した。野良仕事に刀は無用と思うのだが、友の腰にはしっかり刀と脇差が携えられている。不審な眼差しをどう受け取ったのか。
「鍛錬のひとつよ」
一角はあっさりと言った。
「おまえも知ってのとおり、刀と脇差はけっこうな重さがある。外さずにいるのは、足腰の鍛錬のためじゃ。かつまた侍はいざというときのために備えなければならぬ。それに、おれは刀を腰から外すと、落ち着かない気分になるのでな。ま、心を平らかにさせるための呪(まじな)いとでも思うてくれ」
「呪いとはまた、おぬしらしくもない」
「三紗殿のあの憎々しげな眼(め)が、瞼に焼きついてしもうてな。目を閉じる度、おお、これじゃ」

ぶるるっと、昨日の数之進を真似て、大仰に身震いした。

「瘧にでもなってはいかんと思い、肌身離さず愛刀を携えているというわけよ。言うなれば守り刀じゃ、気にするな。それはそうと、今朝、彦右衛門に聞いたのだが、浅草の薬研淵で、泳ぎの大会が開かれるとか」

「ほう、それは初耳だ」

手を止めて、数之進は腰を伸ばした。真竹はすでに伐り終えていたので、鬱蒼としていた竹林も、かなり視界が拓けている。離れた場所では、持ち主の平助夫婦が、黙々と竹を抜く作業をこなしていた。その向こうには藁葺き屋根の家がぽつんと建っている。

夫婦の家があるのは、五百羅漢で有名な羅漢寺の近くで、北には竪川、南には小名木川が流れている。小名木川沿いには町屋もあるが、竪川に近いこの区域に広がるのは田圃と畑ばかり。その一郭に伸び放題の竹林という図は、相当、目立つ景色といえた。持ち主ならずとも恥ずかしくなるだろう。黄金色に輝く稲や、野菜が育つさまを想像して、数之進は苦行のような人助けに耐えていた。

「彦右衛門によると、五日に一度ぐらいの割合で開かれるとか。腕に覚えならぬ泳ぎに覚えのある者は、だれでも参加できるそうじゃ。おれも出てみようかと思うておる」

「泳げるのか」

「あたりまえではないか。水練も武芸のひとつよ。かの家康公も奨励しておられた。戦時には、川で戦うこともある。あるいは泳いで逃げねばならぬときもある。泳げぬ侍は、溺れる魚と同じじゃ」

暗に笑い者だと言っていた。

「では、わたしはまさにその魚だ。泳ぐのはなにより苦手でな。歩いて川を渡るぐらいはできるが、足のつかぬところは怖くてたまらぬ」

「及ばずながら、この早乙女一角が、指南して進ぜようではないか。その前に、人が泳ぐのを見るのが得策。帰りに薬研淵に寄って行かぬか」

「ここからだと、けっこう歩くぞ」

「年寄りくさいことを言うでない。親父殿に笑われるぞ」

「それはそうだが」

「生田様、早乙女様。お疲れ様でございます。お昼にいたしましょう」

平助に呼ばれたが、逆に数之進は手招きした。伐った真竹の葉や篠竹は一か所にまとめて、積みあげてある。生白い顔をした平助は、怪訝そうに、積みあげられた葉を見やった。

「燃やすのですか」

「いや、伐った竹は、あますところなく使うゆえ、たとえ葉と雖も捨ててはならぬ。積み

重ねて腐らせたものを肥料として用いるのだ。畑でも田圃でも、よい肥料となる」

「肥料は鶏糞を使うのだとばかり思いましたが」

平助は家に視線を移した。早朝、数之進たちはここに来たのだが、着いてすぐ近隣の農家に声をかけてもらい、鶏糞を集めさせている。平助は当然、肥料に使うものだと考えていたに違いない。

「鶏糞は、竹の根を腐らせるための策よ。と同時に肥料にもなるがな。竹の葉が腐るまでの繋ぎの肥料と考えるがよい。他にも竹の葉は、さまざまな効用があるのだ。小豆を煮るときに葉を入れれば、小豆が早く煮えるうえ、傷むのが遅くなる」

「へええ、小豆を煮るときに」

平助は汗を拭きふき、耳を傾けている。

「小豆だけではない。沢庵漬けや糠漬けにも小さく刻んで入れるとよい。腐りにくくなるばかりでなく、葉の風味が移って、味がいっそうよくなるのだ」

「漬け物にもですか。いやはや、生田様はよくご存じですねえ。千両智恵の意味が、よくわかりました」

「どうでもいいが、数之進。北に広がる竹林もやるのか」

一角はうんざりしたように顎で北側を指した。南側はだいたい片づけたが、北側はまだ手

つかずの状態なのである。無料働きであることがわかっているだけに、よけい気が萎えてしまうのかもしれない。数之進も流石に疲れを覚えていた。

「竹を枯らすには、十二月から二月に伐るのが得策よ。地面から三尺（九十センチ）ほどのところで竹を伐ると、自然に枯れていく」

「まことでございますか」

平助の問いかけに、大きく頷き返した。

「竹は三月から四月にかけて、根から盛んに水を吸いあげるのだが、早めに竹を伐っておくと、切り口からすべて流れ出てしまうらしい。水分が行き渡らねば花木は枯れる。一年後に竹の先端を持って左右に揺さぶると、根がボロッと綺麗に取れるのだ。一年かかってしまうが、このやり方であれば間違いない」

北側は十二月頃にやった方が楽にできるだろうと、暗にほのめかした。手本を示してくれただけでも、ありがたいと思ったのかもしれない。

「あとは女房といたします。それにしても、まさか、お侍様に手伝ってもらえるとは思いませなんだ。もったいないことでございます」

平助は深々と頭をさげた。

「『只百姓は百姓の道を一筋にして守る』という言葉がある。百姓の部分を他の言葉に変え

れば、だれにとっても戒めとなる言葉だ。たとえば、侍に変えると」

只侍は侍の道を一筋にして守る。

「となるな。侍は、民の手本とならねばならぬ。金は貸せぬゆえ、智恵とわれらの手を貸したまでのことよ。これを機に、平助さんたちには百姓道を一筋に突き進んでもらいたいのだ。それがわれらにとっても励みとなるゆえ」

「ありがたいお言葉、肝に銘じます。握り飯と冷や汁ぐらいしかありませんが、どうぞ、あちらへ」

家の前に立っていた女房も、ぺこりと頭をさげる。色白で、妙に垢抜けた風情なのが目を引いた。遊女あがりなのかもしれないが、よけいなことは言わない。

「ひと休みするか」

歩き出した数之進に、一角が刀と脇差を渡した。道端に置いたまま、迂闊にも忘れ去っていたのである。

「すまぬ」

「忘れるのは、いやなことだけにしろ」

「そうしよう」

笑って、藁葺き屋根の農家に歩いて行った。近くに巣があるのか、頭上には、二羽の燕

が飛び交っている。眩しげにそれを眺めながら、井戸で水を汲み上げ、手や足を洗い始めたとき、農家から五、六人の男が飛び出して来た。

六

「な、なんだ？」

「訊く前に、刀を抜け」

一角は早くも刀を抜き放ち、襲いかかって来たひとりに真っ向斬りを叩きつける。被っていた頭巾もろとも顔面が裂けた。血飛沫をあげながら、男は膝から崩れ落ちる。遅ればせながら数之進も刀を抜いた。

「平助さん、逃げろ」

大声で叫び、振り降ろされた刀を受け止める。素早く目を走らせたが、平助夫婦の姿はない。逃げたのか、斬られてしまったのか。突き出された刀を弾き返しざま、真横に薙ぎ払った。男が怯み、後ろにさがったその一瞬を、一角はのがさない。深く踏みこみ、思いきり突いた。

「うぐぅっ」

呻き声をあげて、二人目が地面に沈む。続けざまに繰り出される刃を、数之進が受け、一

角が攻めた。阿吽の呼吸に思えたが、残る四人は手練れ揃い。巧みにかわして、斬り返して来る。

「隙を見て、逃げろ」

一角の言葉は聞こえないふりをした。執拗に伸びて来る刀を、数之進は死に物狂いで避ける。受け、弾き返しては、また受けた。攻めこむ隙など、とても見出せない。激しい攻めに、思わず足を滑らせる。

「うわっ」

尻餅をついたところに、ひとりが躍りかかって来た。振りあげた刀が、まさに振り降ろされようとした刹那、

「数之進！」

一角が脇差を抜き、投げる。それは刺客の背中を深々とつらぬいた。剣先が胸から飛び出した姿で、男は全身を硬直させる。倒れかかって来たそれから、数之進は慌てて、逃げた。

「後ろだ」

友の警告で、とっさに敵の刃を受け止める。歯を食いしばり、刃越しに睨み合った。真っ直ぐ刀を構えたまま、微動もできない。頭巾から覗いた刺客の目は、感情がないかのように凍りついている。

「御算用者は死ね」

くぐもった声の後、爆ぜるような衝撃に襲われた。勢いよく弾き返されて、数之進は後ろによろめく。体勢が崩れた隙を衝き、刺客の刀が胸もとに伸びた。

がつっと鈍い音が響きわたる。

間一髪、一角の刀が刺客の刀を押さえつけていた。残る二人がこのときとばかりに、一角の背後から迫る。数之進は素早く背後にまわり、男たちを斬りつけた。型などない素人剣法だったが、運良く掠ったのかもしれない、ひとりの手から刀が落ちる。目にも止まらぬ早業で、それを蹴り飛ばした一角と背中合わせになった。

「鳥海様」

と友が叫んだのは、刺客を揺さぶる策か。はっとしたように後ろを見たひとりに、一角は袈裟斬りをお見舞いする。四人目が倒れるやいなや、畦道を走って来た一群が、残る二人を取り囲んだ。

「ああ、鳥海様」

数之進は緊張がゆるみ、腰が抜けるような感じになっていた。鳥海左門は村上左兵衛をはじめとする手下を五人、従えている。数之進と一角に危険ありと思えば、自ら出張るのがこの上役の信条。刺客の二人はそれでも怯まない。

「はぁっ」

躍りかかったひとりを、左門は軽く足を送って、かわした。もうひとりは手下が迎え撃ち、下から斜めに斬りあげる。今度は刺客の二人が背中合わせになり、攻撃を防いだ。捕まるぐらいなら死を選べと命じられているのか、徹底抗戦の構えを見せている。

「だれに命じられた」

左門の問いかけに答える声はない。二人同時に動いた。突き出された刀を弾き返して、左門はひとりの横にまわる。通り過ぎざま、斬りつけたようだが、数之進には刀がどう動いたのかよくわからない。残ったひとりも二人の手下によって、斃された。

「鳥海様」

駆け寄って、跪いた数之進に、一角も倣った。

「怪我はないか」

「はい」

引き攣るような笑みを返し、友をちらりと見やる。

「どうも此度は、わたしひとりだけ蚊帳の外だったようで」

おそらく一角は事前に、左門からなんらかの通達を受けていたに違いない。ゆえに、刀を腰から外すことなく、万が一の事態にそなえた。多少、皮肉めいた言葉を聞き、一角は猛然

と反論する。

「おれはいつもその思いを味わわされておるわ。たまにはよいではないか。おまえは芝居が下手ゆえ、鳥海様は言わぬ方がよかろうと思われたのよ。うまうまと誘い出されて、まさに飛んで火にいる夏の虫じゃ」

「あまりにも見晴らしのよい場所ゆえ、隠れることができずに、駆けつけるのにいささか時がかかってしもうた。ここを選んだのも、そういったことを考えたうえやもしれぬ」

左門の言葉には、罠を仕掛けた連中の狡賢さが表れている。厳しい現実を突きつけられて、数之進は訊きたくないと思いつつ、問いかけを発していた。

「では……平助夫婦も彼の者たちの手下であると？」

「さあて、どうであろうか」

左門が視線で示した先には、手下によって捕らえられた平助夫婦がいた。縄を打たれて、こちらに近づいて来る。一角が血に染まった刀を、平助の鼻面に突き出した。

「う！」

ぺたりとその場に座りこむ。

「数之進の善意を徒にするとは許せぬ。おまえには人の心がないのか、平助よ。蒸し暑い中、無心に竹を抜き、荒れた竹林をなんとかして田畑に戻してやろうという数之進の気持ちを無

にしおって。そこへ直れ、おれが成敗してくれるわ」
「お、お許しください。生田様をここに連れて来れば、金をやると言われまして」
「仲間ではないのか」
「そんなやつの言うことなど信じてはならぬ、数之進。人助けしようとしたおまえを、あろうことか殺そうとしたのだぞ。地獄の閻魔も呆れて、追い返すであろうよ。ゆえに、このおれが」
「よせ」
一角を制して、数之進は左門に問いかけの眼差しを投げた。なぜ、襲われることがわかったのか。平助の言葉は真実なのか。
「連れて行け。あとで念入りに詮議する」
左門は手下に命じて、平助夫婦を連れて行かせた。血腥い現場を見た女は、真っ青になっている。歩くのもままならぬ様子だったが、平助に呼び掛けられて、よろよろと歩を進めて行った。
「平助の言葉に偽りはない」
左門は言った。
「若い頃に家を飛び出して、博奕に酒、女と、やくざな暮らしをしていたようじゃ。女房は

お千代船に乗っていた女でな。どういう経緯かは知らぬが、ヒモ暮らしをするようになっていたらしい」

お千代船は、言うなれば売春船。夜鷹よりは多少ましだが、後ろに男がいて、ときには厄介なことにもなる。そんな暮らしに嫌気がさして、平助は真面目に働こうとしたのだろうか。

「調べたが、怪しいところはなかった。この土地と家は、平助が親から引き継いだもの。特におかしくはなかったのだが」

「にもかかわらず、鳥海様は護衛の目を厳しくなされた」

数之進は言葉を継ぎ、先を促した。

「なぜでございますか」

「屋敷に投げ文があったのじゃ」

お助け侍の善意につけこみ、始末しようとする輩あり。此度の潜入は危険。待ち受けるのは虎と狼なり。

「念のためと思い、護衛の数を増やしたが」

左門は、手下たちが並べた亡骸に視線を落とした。警告どおりのことが起きたのは、潜入先が危険だという証でもある。上役の躊躇いを見て取り、数之進は訴えた。

「ご命令を」

どれほど危険であろうとも、逃げるわけにはいかない。
幕府御算用者。
苦しむ藩士たちを救うため、数之進と一角は、虎と狼が待ち受ける穴に飛びこんで行く。

# 第二章　芸目付

## 一

「潜入する藩は、肥後国人見藩（ひごのくにひとみ）」

左門は言った。

「前藩主、長良志摩守（ながらしまのかみ）は、三月上旬、領地において、みまかられておる。御年、二十二歳。参勤交代で江戸に向かわれる直前だったらしゅうてな。公儀の検使役人が、急ぎお国許に向かい、亡骸を改めた。暗殺の疑いがなきにしも非ずだが、そのあたりのことはまるでわからぬ」

「次期藩主はどなたが？」

数之進の問いかけに、上役は答えた。

「弟君の頼之（よりゆき）殿と伺うておる。志摩守は亡くなる前も具合が悪かったらしゅうてな。頼之殿

は、見舞いのため、昨年、国許に行った由。届けが出されておる」

「では、今はまだお国許におられるのですか」

「さよう。国許においても葬儀を執り行ったのであろう、体調をくずされたと聞いた。志摩守のご遺骸だけ先に江戸へ戻り、先月の末に無事、葬儀は執り行われておる。頼之様もようやくご恢復なされて、近々、江戸にお戻りなされるようじゃ。跡継ぎ問題に関しては、特に問題はないように思うのだが」

本当に問題がなければ、幕府御算用者が潜入する必要はない。左門はいっそう声をひそめた。

「人見藩の江戸屋敷において、志摩守の近習と思われる若い藩士が、たて続けに二人、死んでおるのじゃ。むろん、病死という届けが出されておるがな。鵜呑みにすることはできまい」

どこか浮かぬ顔のまま目をあげた。

「どうもご老中は、目をつけたいくつかの藩に、『仕込み』をしていたふしがある。かなりの数の配下が潜りこんでいるのは間違いなかろう」

老中とは、左門の宿敵、松平信明のことである。妖怪のような老中首座は、幕府のためと称して、その実、私腹を肥やすために日夜、画策していた。

「油断するな」

と告げて、さらに続ける。

「人見藩は尚武の気風が強うての。武芸、それも剣術にことのほか力を入れておる様子。他にも槍や弓、騎馬訓練、そして、水練と、藩士たちは遊びに行く暇もないほどに稽古をしているとか。数之進にとっては、いささかやりにくい藩やもしれぬ」

潜入前に刺客を送られたことが、気になっていたのか。上役は最後まで浮かぬ表情をしていたが……。

五日後。

「そら、打ちこんで来い。まだまだじゃ、そんなへっぴり腰では、いざというとき役に立たぬぞ」

藩邸の武道場では、早朝から激しい稽古が行われている。奉公し始めたのは、昨日からなのだが、挨拶もそこそこに連れて来られたのがここだった。数之進は昨夜、打たれた腕や足、腰といった箇所が熱を帯びてしまい、ほとんど眠れないまま朝を迎えている。早くも身体中、痣だらけになっていた。

「次。勘定方の新参者、生田数之進、前へ出よ」

よくとおる声が響いた。猛虎という異名を持つ片桐主膳が、仁王立ちになって、睨みをき

かせている。異名どおり、昔ながらの武者といった風貌の持ち主で、南の生まれを表すかのように髭が相当、濃い。年は四十なかば、背は五尺六寸（百六十八センチ）ほどだが、がっちりと引き締まり、まるで筋肉そのものが鎧のように見えた。

「はは っ」

数之進は、竹刀を持って、立ちあがる。防具を着けているのは、数之進を含めて数人しかいない。すでに稽古を終えて、片隅に控えている一角が、不安げな眼差しを向けていた。

「あらためて言わずとも、わかっていようがな。我が人見藩は、南方に薩摩藩、北方に熊本藩という大藩を従えておる。いつ攻めこまれるかわからぬ位置にあるゆえ、いやでも武術を真剣に学ばざるをえない気風が育った。これは幸いなことである。ろくに剣を操れぬ者は、我が藩には不要。さあ、来い」

主膳は竹刀を下げて、呼び掛けた。勘定頭の役目に就いているのだが、芸目付という人見藩独特の役職も兼ねている。これは藩士が武芸に励んでいるかどうか、監視する役目らしく、初日から数之進は手荒い歓迎を受けていた。

「宜しくお願いいたします」

ひと声、告げて、打ちこんだが、たやすく弾き返される。二打目は打ちこむように見せかけて横にまわったところを素早く打たれた。防具を着けた胴を思いきり打ちつけられて、よ

ろめく。

「その足」

鋭い一撃が数之進の臑に伸びた。

「うっ」

呻いて、動けなくなったが、目だけは主膳から離さない。昨日、さんざん叱りつけられたからだ。痛みをこらえて踏ん張り、竹刀を握りしめる。

「それでよい。相手から目を離してはならぬ。さあ、打て、わしを打て」

がらあきに見える主膳に、数之進は竹刀を振り降ろした。が、いち早く撥ねのけられて、ふたたび胴に重い衝撃が走る。主膳は構えを取らないため、竹刀がどう動くのか予測しにくかった。

「これで、そなたは今日、二度、死んだの」

髭面に笑いが浮かび、つられて笑いそうになったが、すかさず数之進は打ちこんだ。笑うと主膳は思いのほか人懐こい顔になる。それに気を許して、昨日は肩口を激しく打たれている。同じ過ちは繰り返さないというのが信条、踏みこんで打ちつけたが、主膳はわずかにさがり、軽く撥ねのけた。

「昨日よりはずっとよい。言われたことを肝に銘じて、実践する点は立派なものよ。いかん

せん、動きが頭について行かぬ」

行かぬ、の部分で、またもや胴に一撃をくらった。あまりにも打つ力が強すぎて、数之進は床に叩きつけられる。

「数之進」

一角が耐えきれないといった様子で腰を浮かせた。奉公する際、幼なじみの盟友であると、偽りを交えて告げている。怪しまれはしないだろうが、よけいな手助けは無用と目で示した。ひとりで立ちあがろうとしたものの、腰が痛くて、すぐには立ちあがれない。

「そちらで少し休むがよい。次」

主膳は、もう次の藩士に気持ちを向けている。もたもたしていると、巻き添えをくらって、一撃を浴びせられかねない。数之進は這うようにして、隅の方に移動した。

「大丈夫か」

一角が隣に来て、囁いた。

「大事ない」

痛くてたまらなかったが、二日目で弱音は吐けない。主膳は若い藩士を相手に、軽やかな足さばきを見せている。わずかに片足を動かす程度なのだが、その動きだけで巧みに攻撃をかわしていた。次々に呼ばれる藩士たちも、汗みずくになって、果敢に挑んでいる。

志摩守様がみまかられたばかりだというのに、いや、だからこそか。

数之進は汗を拭き、痛みをこらえて正座する。常と変わらぬ稽古をすることによって、家臣たちは己を保とうとしているのかもしれない。一見、なにもないように思える人見藩の日常風景。だが、この武道場の中にも、いささか不審な点があった。

あの藩士はだれなのだろう。

と、片隅にひっそりと座している若い藩士に目を走らせる。昨日もまるで影のように、男は座り続けていた。他の藩士たちは、徹底的に無視している。目も向けなければ、もちろん話しかけようともしない。そこにいないかのごとく振る舞っていた。いったい、なぜ、彼の者はあそこに座っているのか。

殿のご勘気を蒙ったのだろうか。

数之進は目の端に、座り続ける男をとらえていた。年は二十七、八ぐらいだろうか。色が浅黒く、端正な顔立ちをしているうえ、品卑しからぬ雰囲気を持っている。下級藩士ではなく、上級藩士の家柄という印象を受けた。亡き藩主の怒りを買い、稽古に参加できないのだとしても、逝去した今となっては、許されるように思えなくもなかったが……。

いまだに許されぬのは、よほどの不始末をしでかしたからか。

姓名だけでも知りたいと思った。おそらくは毎日、ここに来て、座り続けているのだろう。

そこに藩の秘密を解く鍵が隠されているかもしれない。一角も当然、気がついている。数之進の視線に気づき、わかっているというように頷き返した。

そのやりとりが目についたのか。

「生田数之進、今一度じゃ」

主膳に呼ばれて、勢いよく立ちあがる。

「は」

勘定方ということで、頭役の主膳は、いっそう気合いが入るのか。痛ましげな目を向けた一角に苦笑を返して、数之進は前に進み出る。礼もそこそこに身構えたが、主膳は相変わらず構えようとしない。全身の力を抜き、ごく自然な感じでそこに立っていた。

「さあ、打て」

と言われても隙が見出せない。数之進は竹刀を青眼（せいがん）に構えたまま、右から行こうか、左から攻めるか、と、悩んでいる。右と思い、動こうとした刹那、主膳の身体が緊張したのを感じた。

打ちこんで来る。

数之進は反射的に半歩、さがる。

「なぜ、今、打ちこまなんだのじゃ」

主膳の問いかけに、構えをくずさず答えた。
「打ちこまれると思いまして」
「ふむ、殺気を読まれたか。剣術の腕前は初心者だが、人の気配を読む技には長けていると見ゆる」
「臆病でございますゆえ」
「まあ、自分で臆病だなどと」
「しっ、声が大きゅうございます」
女の話し声で、藩士たちの目が北側の戸口に向いた。この武道場は、他藩とは多少、変わった位置、つまり、中奥と奥御殿の間に建てられている。驚いたことに人見藩では、奥女中たちも剣術や槍の稽古をしているのだった。そのため、北側の出入り口は、奥御殿の庭に続いている。北側を女門、南側を男門と呼んでいるようだが、わずかに開けた女門の戸の隙間から、奥女中たちが覗いていた。
「気を取られてはならぬ」
主膳に軽く額を打たれて、数之進は心を戻した。刹那、右肩を強く一撃される。集中しようとしたのだが間に合わず、隙を衝かれた形になった。
「女子はいつも男を惑わせるの」

ははは、と豪快に笑ったそれが、朝稽古終了の合図。一同、立ちあがって並び、深々と一礼する。張り詰めていた空気がゆるんだ。とはいえ、新参者には武道場の掃除という役目が残っている。数之進と一角は、外に走り出て、井戸に向かった。

「どけどけ」

「わしが先じゃ」

藩士たちは我先にと井戸に殺到している。外も暑かったが、汗と熱気がこもった武道場に比べれば、雲泥の差がある。頭から水を被る者、喉を鳴らして渇きを潤す者と、井戸の前は混雑していた。

「まさか女子に覗き見られるとはな」

列の最後尾に並びながら、数之進は囁き声で言った。新参者は控え目な行動を取るのが世の習い、他藩もその傾向が強いが、人見藩は特に厳しい言動を取るような感じを受けている。一角も小声で答えた。

「同役の者に聞いたのだが、奥女中の指南役として、別式女も抱えているとか。小太刀の遣い手という話じゃ。槍も相当な腕前らしいが、乱世であればいざ知らず。女子の身でなにもそこまでと思わなくもない」

女の剣術指南役を別式女と称するが、今、そういう役目を設けている藩が、はたして他に

もあるだろうか。物珍しさも手伝い、先刻の出来事とつい結びつけている。

「別式女か。覗いていたうちのひとりは、その別式女やもしれぬ。臆病という言葉に、いささか辛辣な呟きを返された」

「『奥御殿の蛙、大海を知らず』よ。気にすることはない。そんなことよりも」

「あの影侍であろう」

数之進は素早く継いだが、

「いや、あの者ではない、と、いやいや、おれも気になってはいるがな。なにをするでもなく、じっと座していられるのは気持ちが悪いゆえ」

一角は曖昧に言葉を濁して、さらに続けた。

「影侍とは、うまい呼び名をつけたものよ。異名を考えるのは、おれの十八番であったが、近頃はうかうかしていられぬ。おまえに十八番を奪われそうじゃ」

藩士たちがいなくなったのを見て、二人はようやく顔を洗い、喉の渇きを癒した。青痣だらけの身体を見て、友は眉をひそめる。

「ひどい有様だな。額にも痣ができておるぞ」

「うむ。鳥海様が申されたとおりよ。わたしにとっては、いささかやりにくい藩と言えなくもない。夜明け前から剣術の稽古というのは流石に堪える。算術問答であれば、いくらでも

受けて立つものを」

「これでは、御役目もままならぬのではないか」

労りに満ちた言葉に、思わず本音が出た。

「痛くて昨夜はろくに寝ておらぬ。気をつけぬと、居眠りするやもしれぬな」

「影侍については、おれが引き受けた。もしかすると、彼の者が騒動の鍵を握っておるやもしれぬ。調べておくゆえ、おまえは勘定方のことだけに気持ちを向けろ」

「すまぬが、そうさせてもらうとしよう」

「おまえとおれの間で遠慮は無用。痛いときは痛いと言え。辛いときは辛いと泣け。しかし、まるで戦時のごとき気風よの。別式女にも驚いたが、芸目付という役目があることにも驚いたわ。八代将軍、吉宗公に倣ったのであろうか」

ご政道や台所事情、特産品といった事柄については、数之進の方が詳しいが、こと武道に関しては一角の方が精通している。

「芸目付というのは、吉宗公がもうけられた役職なのか」

軽い驚きを覚えて訊き返した。

「という話だ。いかにも、ありそうではないか。吉宗公は鷹狩りを復活させ、さまざまな武芸を奨励した。ろくに馬にも乗れぬ侍が増えたことをお嘆きあそばされていたとも聞く。そ

れらを監視するための芸目付だったのであろう」

「文武両道か」

「噂では、前藩主の弟君、頼之様も、みまかられた殿に勝るとも劣らない腕前の持ち主であるとか。とはいえ、江戸においでになるのは、今少し時がかかるご様子。主なき藩邸で、いったい、なにが起きているのか」

活気にあふれる人見藩の裏に隠されているのはなんなのか。

待ち受けるのは虎と狼なり。

数之進は、左門の屋敷に投げこまれた文の一部を思い出していた。

## 二

虎というのは、もしや、片桐主膳のことではないのか。

猛虎の異名を持つ男は、勘定頭としても能吏のようだった。中老や用人、留守居といった藩の重臣が、ひっきりなしに訪ねて来る。主膳は勘定方の部屋と書院を、忙(せわ)しげに行き来していた。

「さようか。頼之様は、肥後をお発(た)ちになられたか」

書院から、ひときわ大きな声が響いた。勘定方の部屋は、安堵(あんど)したような空気に包まれる。

風に乗って流れて来た朗報に、だれもが胸を撫でおろしていた。主膳はわざと聞こえるように声をあげたとも考えられる。その後はなにも聞こえなくなったので、数之進は情報収集に努めた。

人見藩は小藩ながらも、鎌倉時代より五百年も続く名門だ。

先程、渡された勘定方の帳簿と、各村の万留帳や村明細帳に目を通している。藩の禄高は二万二千石。しかし、暴れ川の球磨川を苦労して開削したことにより、新田が倍に増えて、実益は四万石以上とも言われていた。

暴れ川の球磨川か。

開削の成功によって、山越えの苦労と手間と時が省かれたのは言うまでもない。これにより藩は、五倍の収益をあげられるようになっていた。さらに球磨川を塞き止めて、確固たる井堰が作りあげられるようになったことも、増収を後押ししている。

主だった特産品は、米や小麦、大豆、野菜の他、球磨焼酎、竹の団扇、蚊帳、肥後表、養蚕によって得られる絹、櫨栽培によって得られる蠟燭など、多岐にわたっていた。ほとんどの品を自給自足できる点は、他藩も見習うべきだろう。借財はないに等しく、文句のつけようがない。

だからこそ、狙われたのやもしれぬ。

数之進は左門の宿敵を思い浮かべずにいられない。老中首座、松平信明は、諸藩改革を掲げつつ、御家乗っ取りやお取り潰しを画策している。主膳も言っていたが、人見藩は南方を薩摩藩、北方を熊本藩という大藩に挟まれており、九州の臍とも思える場所に位置していた。緩衝地の役目もはたしているが、薩摩藩と熊本藩に隣接している分、なにかと有利に動けるのは事実。

〝どうもご老中は、目をつけたいくつかの藩に、『仕込み』をしていたふしがある〟

過日の左門の言葉が浮かんでいた。手下をあらかじめ潜入させ、裡側から藩を喰い荒らして、乗っ取りや改易をやりやすくする。

確かに、ご老中ならずとも、目をつける藩であろうな。

ほとんど借財もないとなれば、企みは速やかに実行されるのが常。数之進は前回、潜入したとき、信明に会っていたが、妖怪が人の皮を被っているような印象を受けた。子供が飴をほしがるように、

〝人見藩がほしい〟

と九州の地図の一か所に、あの骨ばった指を置いたのではないだろうか。その結果、人見藩はいやおうなく騒動に巻きこまれた――。

「痛むか、生田殿。また顔の痣が増えたな」

隣席の同役が、話しかけてくる。名前は村井嘉津次、年は三十と聞いていた。数之進同様、一度や二度、会っただけでは、すぐには顔を憶えてもらえそうもない凡庸な容姿の持ち主である。そういう意味では、親近感が湧いていた。嘉津次もそう思ったに違いない。奉公して日は浅いものの、畏まった口調は無用と言われている。

「顔はまだましな方です」

明るく告げ、笑おうとしたが、引き攣ったようにしか見えなかったかもしれない。勘定頭が書院にいるのをこれ幸いとばかりに、嘉津次は塗り薬を差し出した。

「よう効く薬じゃ。使え」

「いえ、薬は持っておりますので、ご厚意だけいただいておきます」

「新参者は素直に従うがよし、見返りは期待せぬゆえ、安心せよ」

二度目の厚意を無にするのは、却って非礼になるかもしれないと判断した。一礼して、受け取る。

「それでは、使わせていただきます」

「早う治さねば、水練の際、物笑いの種ぞ。褌姿になるゆえ、青痣だらけでは、どうにも格好がつかぬ。なさけないやつと、嘲笑されるは必至じゃ」

「水練」

今度は痛みのためではなく、本当に頬が引き攣る。
「もしや、この川方師役という御役目は」
帳簿に記されている部分を指さした。
「おう、泳ぎの指南役のことだ。我が藩は、小堀流踏水術じゃ。熊本藩の初代師範となられた小堀長順様は、『踏水訣』という書を記されておるがの。我が藩もかつては長順様の門弟をお招きしてご指南いただいた由」
「さようでございますか」
げんなりしていたが、訊かなければならない。
「水練の稽古も、芸目付であるお頭様が取り仕切っておられるのですか」
「いや、泳ぎの方は、御家老の伊沢様じゃ。むろん、お頭も巧みな泳ぎをご披露なされるがな。御家老にはちとかなわぬ。さよう、まるで魚のように泳ぐのじゃ。するり、するりと、柳のようなしなやかさで、と、噂をすればよ」
嘉津次は顎で向かい側の廊下を指した。江戸家老の伊沢仁左衛門が、座敷から姿を見せて、書院の方に歩いて行く。ひょろりとした体軀と、優しげな面差しを持つ男で、年は四十前後。猛虎と呼ばれる片桐主膳とは、まさに好対照をなしていた。主膳が剛であれば、仁左衛門は柔。捕まえたつもりなのに、気がついたときには、手の隙間から逃げている。そんなとらえ

どころのなさが感じられた。

「御家老とお頭様の仲は、いかがなのですか」

廊下を歩く仁左衛門を目で追いつつ、数之進は訊いた。

「特に悪くもなければ、よくもない。あたりさわりない程度の付き合いよ。互いに一目、置いておろうがな。御家老の方が年下であるのと、そら、お頭はなんと言うても我が藩の名物家臣じゃ。御城でもその名を知らぬ者がいないほどの剛(ごう)の者。肥後もっこすを絵で描いたようなお方ゆえ、御家老も遠慮があるのやもしれぬ。お頭の顔を潰さぬよう、気をつけておられるのが見て取れるな」

肥後もっこすは、物事に一途で、飾り気のない肥後人の気質を表す言葉だ。数之進から見ると、嘉津次もそのひとりであるように思えた。が、気質云々よりも、知りたいことは他にある。

「藩の作物や特産品についてでございますが」

数之進は文机(ふづくえ)に、帳簿や各村の明細帳を広げた。若い藩士が二人、謎の死を遂げているのだ。もたもたしていると、あらたな犠牲者が出てしまうかもしれない。

「我が藩の畑では、どのようなものを作っているのですか」

真剣な目を向けた。

「そうよな、米はむろん作っておるが、八月の盆の頃までは、粟、小黍、稗。一霜、来た後に小豆や大豆といったところよ。山の恵みも豊富じゃ。春の山菜、初夏の筍、夏の山女魚、初秋の蜂の子、冬の狩猟といった具合に、旨いもの尽くしよ。また春のアマナ、夏のウバユリ、秋の山芋や葛など、土中の根も馳走になる。ああ、思い出してしもうたわ。早う帰りたいものじゃ」

嘉津次は、しみじみ呟いた。藩士にも生涯、江戸詰めだけで終わる者、江戸と領地を行き来する者、領地だけでその生涯を終える者と、大きく分けて三とおりの生き方がある。嘉津次は国許に妻子を置き、領地と江戸を行き来しているのだろう。

「江戸はなにかと物入りでの。金がかかってならぬ。わしは酒、それも焼酎に目がないのじゃが、故郷にいれば焼酎などは飲み放題よ。自分の家で作るゆえ」

その焼酎を味わっているかのように、目を細めて、舌なめずりする。素朴で真っ直ぐな肥後もっこすの人柄を垣間見たように思い、数之進も思わず微笑んだが、確かめるのも忘れない。

「領地では、自分の家で飲むための酒を作ることが許されているのですか」

諸藩それぞれ定めは異なるが、自家用の酒作りは禁じている藩が多かった。酒の話ならまかせろとばかりに、嘉津次は身を乗り出してくる。

「酒なくして、なんの人生ぞ。我が藩では、自家用や神社の祭典用であれば、醸造高に制限はない。むろん、運上金といった不粋なものもかけられぬ。自由に作り、自由に飲めということじゃ。されど」

ゆるんでいた顔を急に引き締める。

「売るとなれば話は別よ。醸造株を持った者でなければ、売ることはできぬ。ま、このような話、わざわざ言うまでもなかろうがな」

「特産品については、いかがでございますか。どのような品が我が藩の売りなのでしょうか」

「まずは、これよ」

嘉津次は文机の下から、竹製の団扇を取り出した。

「団扇は熊本藩の特産品。そのため鹿本より職人を招いて、作り方を指南してもろうたのじゃ。熊本藩では『来民うちわ』の名で売っておるが、我が藩においては『肥後うちわ』よ。なにより強いこと、つまり、丈夫なのが取り柄じゃ。柿渋を二度塗って強度を高めておるゆえ、他の団扇よりも色が茶色くなる」

「なるほど。竹はどんなものを使うのですか」

竹林を伐ったことが甦り、あれを役立てられないかと、思ったりする。千両智恵が疼い

たが、今は御役目のことに集中した。

「真竹じゃ。四年ものの、ねばりのある竹が材料として選ばれる。団扇を長持ちさせるためにだな、竹は十月から十二月にかけて伐ったものを横にして積み、木の葉を被せて、虫がつかぬようにするのじゃ」

「新月のときに伐れば、まず虫は出ないと聞いたことがあります。それとも置いておくうちには、やはり、虫がついてしまうのでしょうか」

「なに？」

嘉津次は一瞬、言葉を失い、数之進を見つめた。新月に伐るという話は初めて聞いたのかもしれない。疑問を問いかけにしただけなのだが、よけいなことを言ったのではないだろうか。

「他には、どのような特産品がありますか」

数之進は急いで話を変えた。

「蚊帳、畳表といったところだが……ちと変わった特産品もある」

顎をあげ、胸を反らすようにして告げる。小鼻をふくらませて、さも得意げな様子だった。

数之進も興味をそそられている。

「どのようなものでございますか」

期待に満ちた目で促した。

「肥後六花よ」

嘉津次の声が大きくなる。椿、芍薬、菖蒲、朝顔、山茶花、菊の六花を、『肥後六花』と称していた。生まれた名花は数知れず、珍しい変化を見せた花も少なくない。『来民うちわ』と同じく、熊本藩がこれを奨励して、肥後国全体に花を愛でる気風が広がっていた。

「花も植木職人を招いて、教えを請うたのですか」

まずはこちらが知りたいことを問いかけに変える。嘉津次が話したくて、うずうずしているのがわかっていた。

「いや、苗を仕入れての。花作りの得意な藩士に、それを育てさせたのじゃ」

胸を張って答えたそれには、いくつかの重要な事柄が含まれている。人見藩は肥後団扇に代表されるように、臨機応変、貪欲に大藩の策を取り入れて、新しい特産品を増やしていた。それが結果的に借財を作らないという良い流れを生んでいる。相当、目端の利く者がいるという証だった。

「新しい特産品を取り入れるべく、積極的に動いたのはどなたですか」

「決まっておるではないか、我が藩の名物家臣よ。留守居役に細かく指図してだな、熊本藩に渡りをつけたのじゃ。吉原で何度、接待したことか。球磨川を鎮めるのと同じほどに大変

だったと言うておられたわ」

なるほど、と、数之進は得心する。江戸家老が一歩、控えるのも道理。智恵者の主膳は藩の宝と思い、対立しないよう心がけているに違いない。

案外、御家老の方が、一枚、上手やもしれぬ。

そう思いながら話を進めた。

## 三

「花の栽培は、この屋敷で行っているのですか」

「いや、そうではない。奥御殿の一郭に、花畑をしつらえているが、それはあくまでも奥方様たちをお慰めするためのものでな。花の栽培は、本所の抱屋敷で行っておる。我が藩では、特に朝顔の栽培が盛んでの。今は花盛りよ。本所の抱屋敷は、朝顔、昼顔、夕顔と、賑わっておるわ。朝顔作りの名人がおるのじゃ」

「本所に抱屋敷があるのですか」

村上杢兵衛から渡された郷帳を、頭に広げてみたが、本所の抱屋敷については、記載されていた憶えがない。郷帳は幕府が持つ帳簿で、ある程度は信頼できるが、潜入しなければわからないこともある。

「さよう。われらは朝顔屋敷と呼んでおる。お頭に伺い、近々、案内して進ぜよう。見事なものぞ」

朝顔と聞けば、今度は雑司ヶ谷の植木職人、清治郎のことが浮かんだ。朝顔の苗を売るために、見本として咲いた花を客に見せたい。朝、咲いた朝顔を長持ちさせる策はないものか。もしかしたら、朝顔屋敷で答えが見つかるかもしれなかった。

「是非、案内していただきたく思います」

心からの言葉が出る。しかし、頭の中には、知りたいことが山積みになっていた。朝顔談義で終わるわけにはいかない。

「領地のことに話を戻しますが」

数之進は手元に明細帳を引き寄せた。

「農民の様子を教えていただきたく思います。各村の明細帳には、『御初穂米』という書きこみが多々、見られます。いささか多すぎる気がしなくもありませぬ。年貢を納めた後にも記述がありました。『御初穂米』は名目にすぎぬのではございませぬか」

率直すぎる問いかけだったかもしれないが、統治者はよくこういう策を取る。名目上は『御初穂米』だが、実際は米を多く納めさせんがための口実にすぎないのではないか。借財がないのは、さまざまな努力を重ねた結果だろうが、数之進は裏を読まずにいられないのだ

った。国許において相当、民を厳しく締めあげているということも考えられる。帳簿や万留帳、明細帳といった文書の端々に、汗と涙が滲んでいるように思えなくもない。

「うむ。名目と言われれば、ま、そう言えなくもないな」

ぼりぼりと頭を掻き、嘉津次は言い訳を口にする。

「百姓の立場を主張すべき惣庄屋や庄屋どもがだな、役人の顔色を窺うことに、汲々としておるのじゃ。さらにその上に立つ役人も贅沢に慣れてしもうての。袖の下や付け届けを喜んで受け取る有様よ。何度も通達を出したが、従うのは通達の直後だけ。すぐに元の木阿弥じゃ。なんとかならぬものかと、われらも頭を痛めておる」

正直な告白に、ある程度、信頼できる男だとふんだ。嘉津次は少なくとも民の立場になって考えている。数之進は一歩、踏みこんで訊いた。

「惣庄屋の借り換えなども行われているのですか」

これは百姓に年貢を完納させるため、惣庄屋が金を貸し付けることだが、いったんその金子を借りたが最後、金利に追われて、ついには潰れ百姓になる。嘉津次は渋面のままだった。

「行われておるようじゃ。近頃では潰れ百姓が増えておる。よいことではない、わかっておる、わかっておるのだが」

数之進の表情を読み、片手をあげて、制した。

「われらをそう責めるな。田畑も『作りまわし』という方法に変えて、少しでも収穫高があがるよう、農民たちにやり方を教えておるのじゃ。やれることはやっておるつもりだがの。役人や庄屋の心構えまでは、たやすく変えられぬ」

「作りまわし、でございますか」

思わず首を傾げた。『作りまわし』は色々な作物を工夫して、順番に作っていくやり方で、輪作のことである。雨が極端に少ない大和（やまと）地方――奈良盆地などで育まれた在地農法であった。限られた水をいかに有効に用いるか。それを課題にして、生まれた方法といえる。李兵衛から渡された郷帳には、国許における『作りまわし』のことは記されていなかった。

「確かお国では、焼畑が主体と聞いた覚えがございます。いつから『作りまわし』に変えたのでございますか」

三年から五年ほど使った土地は、地力が落ちるため、いったん放棄する。十五年以上、経って雑木林になり、落ち葉が降り積もって地力が回復した頃にまた伐って、焼いて田畑に用いるというのが焼畑農業だ。郷帳に記されていたのは、肥後独特の方法だったと、数之進は記憶している。

「え」

そう言ったきり、嘉津次は次の言葉が出ない。焦りを含んだ目が、宙を泳いでいた。今ま

で二人の会話を聞くとはなしに聞いていた同役たちも急に黙りこんでしまい、部屋の中は異様な静けさに包まれる。互いに窺うような視線を交わし合っていた。

口にしてはならぬ事柄だったのだろうか。

数之進もまた狼狽えていた。従来、肥後地方で行われていた焼畑農業を、雨の少ない大和地方の『作りまわし』に変えた件を話題にするのは、御法度なのか。素性を怪しまれてはならぬと、急いで言葉を探したが見つからない。

気まずい空気が広がる中、

「『作りまわし』に変えたのは、二年ほど前からよ」

不意にだれかが答えた。振り返るまでもない、腹にずしんと響く声の持ち主は、御城でも話題にのぼるほどの名物家臣。

「お頭」

嘉津次の表情が、ほっとしたようにやわらいだ。張り詰めていた場の空気もゆるみ、数之進は止めていた息を吐き出した。主膳は部屋を見まわした後、自分の席がある方に歩いて行く。

「我が藩は、わずか二万二千石の小藩。知ってのとおり、領地が狭い。焼畑では十年以上、使えぬ土地ができてしまうゆえ、『使いまわし』を取り入れたのじゃ」

話しながら文机の前に座り、手で指し示した。
「生田数之進、これへ。そのほうの相手は、不束ながら、わしが務めて進ぜよう」
「ははっ」
数之進は畏まり、帳簿や明細帳を手に、主膳の前に移動する。いつから聞いていたのだろう。嘉津次とのやりとりで御算用者だと確信したのではないだろうか。いったん場の空気がゆるんだように思えたが、それは他の藩士たちの話である。数之進はにわかに緊張感が高まるのを感じていた。
「新月のときに竹を伐れば、虫が出にくいという話は、興味深く聞かせてもろうた。面白いことを存じよるの」
主膳が口火を切る。あの話が出たあたりから、そっと息をひそめて、話を聞いていたわけだ。飾り気のない真っ直ぐなだけの肥後もっこすではないと、あらためて気を引き締める。
「お褒めにあずかりまして恐悦至極に存じます。新月のことでございますが、逆に、接ぎ木をするときは、新月期は避けるべきであるとか。海に棲む生き物も、満月時に産卵したりするようでございますゆえ、作物を育てるうえでは、月の満ち欠けが重要なのではないかと考えます次第」
一礼して、続けた。

「お頭様にいくつかお訊ねいたしたき儀がございます。宜しゅうございますか」

たとえ怪しまれていようとも、早急に騒動の火種を探らなければならない。遅くなればなるほど、危険が高まるうえ、あらたな犠牲者が出ることも考えられた。潜入してから十日が勝負、その気迫をとらえたのか。

「申せ」

主膳の目にも鋭さが加わる。

「は」

剣術や水練よりは、ましであろうと、肚をくくる。なかば開き直って、帳簿の一部を指した。

「ここに延畝と記されておりますが、他の丁にも多々、この記載が見受けられます。領地ではいまだにこのようなやり方を用いているのでございましょうか」

延畝とは、帳面に記載されている面積より実際の方が大きい田畑のことで、当然のことながら、記載されている面積以上の収穫高をあげる。役人はこれを基準にして、年貢を決めようとするのだが、農民泣かせの悪政であるのは言うまでもない。数之進は「いまだに」の部分にわざとらしく力をこめたものの、実際は他藩でも多く利用されている策であった。

「記されているのであれば、行われているのであろう」

主膳は悪びれたふうもなく認めて、問いかける。
「反対か」
「は。『民富めば国富む、民知れば国栄える』と申します。近頃は潰れ百姓が増えているとも聞きました。こういった策をゆるめ、民がやりやすい形を作るのが、為政者たる者の務めではないかと」
「では、どのような形で年貢を定めるのがよいと申すのじゃ」
「お叱りを受けるやもしれませぬが」
前置きして、告げた。
「常々、それがしは、撫し免がよいのではないかと思うております。定免法に似ておりますが、凶作の年は年貢高を見直すという一文を加えるのが宜しかろうと思います次第」
過去、十年ほどの生産高を撫して——平均して、年貢高を決める。凶作の年はもちろん見直して年貢高を改める。これが数之進流の撫し免だが、領主はやりたがらない策であろう。すぐに実現するのが、むずかしい策であることは、数之進もよくわかっている。
が、声をあげ続けるのが自分の役目ではないのかと、近頃、それをとみに感じるようになっていた。藩主はもちろんだが、藩士の意識をも変えなければ、領地の民の暮らしを変えることはできない。藩と領民がともに手を携えて、成果をあげられる生活。自分よし、相手よ

し、世間よしの『三方よし』となる方向に進めたい。

「ふむ」

考えるような素振りを見せた主膳に、数之進は言った。

「この方法にすれば、毎年、田畑を調べなくても済むのではないかと。お頭様もご存じのように、調査にかかる費用も百姓たちが払います。相当な負担になるのはあきらか。毎年、調べると言うのであれば、せめて、その費用は藩がもつというようにしなければ、民は合力いたしませぬ。潰れ百姓や走り者が増え続けるは必至。そうなる前に、なんとか手を打たねばなりませぬ」

おそれるふうもなく、主膳の鋭い目に目をあてる。

「焼畑から『作りまわし』に変えたのは、得策であったとそれがしも思います次第。焼畑では、土地が十年以上、放置されたままになりますゆえ、なにも作物が実りませぬ。稲を二年、作り、綿を一年、または稲を一年、作って、翌年は菜種を作るというように、田畑を無駄にせず、利用すれば、収穫高が増えるのは間違いありませぬ。僭越ながら、今のまま『作りまわし』を奨励するのが、宜しかろうと思いまする」

「本田に綿を作ることは、お上が禁じておる」

試すように、主膳は言い、意味ありげな笑みを浮かべた。さて、お上のまわし者は、どの

ような返答をするのか。探りを入れているように思ったが、数之進は動じない。

「仰せのとおり、公儀においては禁止されております。されど、米の代わりにそれ相応の銀納をすることによって、黙認されておりますのもまた事実。抜け道はいくらでもありますゆえ」

「ほう。堅物だとばかり思うていたが、意外に頭はやわらかいの。そうか。抜け道はいくらでもあるか」

よけいなひと言だったかもしれない。慌て気味に言い添えた。

「それがしは、裏作として、菜種を作るのがよいのではないかと思います。菜種は、まったく無駄になる部分がありませぬゆえ」

「『まわし』か」

と、主膳は唇をゆがめた。数之進は力をこめて、答える。

「はい。太陽の恵みを受けて、大地で菜種が育つ。その菜種から作られた種油は、陽が沈んだ後の夜の世界を明るく照らします。そして、種油を搾った後の油粕は、肥料として、ふたたび大地に戻されて作物に力を与える」

巡り巡って、大地に還ることをすなわち『まわし』と称した。『作りまわし』は無駄のない田畑の利用法、『まわし』は無駄のない作物の利用法。焼畑をやめて、大和農法に変えた

のは二年ほど前のこと。それを口にしたとき、勘定方の部屋が静まり返ったのはなぜなのか。

「そちの考えは、ようわかった。役目に戻るがよい」

「は」

頭をさげて、席に戻りながら、心の中で呟いている。

おかしい。

一角であれば、数之進の十八番が出たと言って笑ったかもしれない。疑問を胸に秘めて、帳簿や明細帳にふたたび目をとおし始めた。

## 四

同じ頃、一角は、武道場の南側の戸口――通称、男門で、同役の寅田藤之助（とらだふじのすけ）とともに、見張り役を務めている。

おかしい。

と、一角もあることが気になっていた。

数之進の十八番を奪うようだが、おれも病やもしれぬ。おかしいと思う度に、わくわくしてくるのだから困ったものよ。

数之進は自他ともに認める苦労性と貧乏性、騒動の気配を感じた方が、逆に落ち着くとい

う厄介な気質の持ち主だ。しかし、その様子を見て楽しくなる自分も、すでに病の域に達していると考えるべきなのかもしれない。

「女子ながら、なかなかに激しい稽古ぶりよ」

藤之助は武道場が気になるらしく、先刻から何度も同じような台詞を繰り返している。こういった手合いの侵入を防ぐためだろう。二つの入り口を持つ武道場は、内からも外からも錠が降ろせるようになっていた。つまり、女たちはだれにも邪魔されることなく、稽古に専念できるわけだが、

「おお、だれかが壁に身体を打ちつけたようじゃ。凄い音がしたぞ」

目を閉じて、藤之助は想像している。年は二十歳、奉公し始めて丸二年と聞いていた。小姓方に奉公するだけあって、色男なのだが、それが癖なのだろうか。いつもぽかんとだらしなく口を開けている。一角は顎を下から突きあげたくなる衝動を抑えながら、話を変えた。

「我が藩の流派は、タイ捨流であると聞いたが」

「さよう、タイ捨流よ。かつて新陰流四天王のひとりと謳われた丸目蔵人佐様が始祖と言われておる流派じゃ。新陰流は柳生が有名ゆえ、タイ捨流は割をくった感がいなめぬ。蔵人佐様とて、勝るとも劣らぬ兵法者であったものを」

顔はどこかゆるんだ間抜け面だが、頭はそこそこ働くようだ。一角は昨日、稽古をしたと

き以来、消えない疑問をぶつける。

「そうであるならば、なぜ、稽古を始める前に摩利支天経を唱えぬのであろうな。それがしもタイ捨流を学んだ身ゆえ、いささか疑念が湧いておるのじゃ」

「え？」

藤之助はまたしても、ぽかんと口を開けた。しばし無言で見つめていたが、急に作り笑いを押しあげる。

「すまぬ。ちと考え事をしていた。なんの話であったかな」

とぼけているのか、本当に聞きのがしたのか。一角は前者と判断し、別の話題を振る。

「稽古のとき、片隅に座している男がおろう。あれはだれなのじゃ」

「気になるか」

にやにや笑いかけられて、こやつ、と、小さな怒りが湧いた。馬鹿にしているのではないのだろうか。どういうわけか小姓方には、この藤之助しかいないため、気に食わなくても我慢しなければならない。そのあたりにも、騒動の鍵が隠されているように思い、二度目の怒りもこらえた。

「うむ、気になる」

素直な新参者を装うことにする。

「では教えて進ぜよう。あれは、伊沢喜内よ。くくくく、驚いたか。さよう、御家老のご嫡男じゃ。剣術、馬術、弓、槍、水練と、なんでもござれの遣い手よ。ここも優れておるらしゅうてな」

頭を指して、続けた。

「みまかられた殿のご寵愛をほしいままにしておったわ。あんな不始末をしでかしたというに、伊沢家が改易にならなんだのは、やはり、とな、みな噂しておる」

だらしのない顔に、淫靡ないろがあふれた。やはり、の後には、衆道の関係だったのやもしれぬ、という言葉が続くに違いない。家老の跡継ぎに対する激しい嫉みが、整った顔を醜くゆがめている。正視に耐えず、さりげなく目を逸らした。

「なるほど。しかし、改易とは穏やかではないな」

「理由を知りたいか、ええ、知りたかろう、どうじゃ」

藤之助は焦らして、楽しんでいる。こんな男と小姓方の役目を務めなければならないのは、苦痛だったが、数之進の苦労を思えば、どうということもない。痣だらけの姿を思い浮かべて、相手が望む態度を取ることにした。

「知りたい。教えてくれ」

「溺れたのよ、水練の最中にな。三年前の夏であったわ。大川の薬研淵で泳いでいたときに、

殿ともども流されてしもうたらしゅうてな。溺れたらしい。殿に助けられて事無きを得たとか。以来、喜内は『河童侍』と呼ばれておる。どうしようもない腰抜けじゃ」

河童侍は痛烈な侮蔑と皮肉をこめて、与えられた異名に違いない。

「『善く游ぐ者は溺る』か」

独り言のように呟き、一角は訊いた。

「貴公はその場にいなかったのか」

「残念なことにな」

「されど、薬研淵の遊泳場は、堰でしっかりと囲ってあるはず。流されたというのは合点がいかぬ」

話を鵜呑みにするのは愚かだと、心の中で警鐘が鳴っていた。一角の頭にも投げ文に記されていた『待ち受けるのは虎と狼なり』という言葉が焼きついている。あれは藤之助の名字、寅田を指しているのではないだろうか。ただの若気ではあるまいと、油断なく様子を見ていた。

「薬研淵は前日の嵐で、堰の一部が壊れていたとか。『河童侍』は足が攣ったと言い訳していたようだがな。我が藩においては、水練で溺れた者の家はお取り潰しと定められておる。処分が甘いと、みな憤っておったわ」

お取り潰しを免れたのは、藩主と喜内が、常とは異なる主従関係にあったから。藤之助は三年経った今も許せないようだったが、あるいは家老職に就いている伊沢家の功績を、藩主が慮ったとも考えられる。

「もうひとつ、訊いてもよいか」

遠慮がちに、いや、それを装って、切り出した。藤之助は下手に出た方が話を得やすい。案の定、またにやりとした。

「わかることであれば答えて進ぜよう」

「いつのことかはわからぬが、若い藩士が二人、死んだと聞いた。病死という届けは、まことか否か。さらにその二人は、どのような御役目に就いていたのか。もしや、と、それがしは……」

「さよう、小姓方であった」

藤之助は覆い被せるように言った。ふれてほしくない話なのか、ちらりと冷ややかな目を投げる。

「小姓方はわたしを含めて、四人、いたのじゃ。そのうちのひとりが麻疹に罹っての。残る二人にも伝染った」

「つまり、三人が麻疹に罹ったわけか」

「いかにも。そのうちの二人が死に、ひとりは療養のため、実家に戻ったという経緯じゃ。御家騒動があるわけでも、藩内の争いに巻きこまれたわけでもない。向かうところ敵なしと言われた『人見の四天王』の息の根を止めたのは、麻疹だったということよ」

「はて、四天王とは？」

「噂の『河童侍』を筆頭に、死んだ二人と、実家に戻ったひとりを合わせて、四天王と言われていた」

「伊沢喜内様は、お幾つになられるのだ」

「十九じゃ」

「ほう、それは」

褒め言葉は心に秘めた。家老の嫡男ゆえ、若くても他の者たちは従っていたのか。それとも相応しい器量をそなえているのか。『河童侍』というそしりを受けながらも、武道場に端然と座している姿が甦っていた。

「それにしても、寅田殿は、運が強いと見ゆる。よく麻疹に罹らなかったものよ」

さりげなく持ちあげるのも忘れない。本当は「悪運が」と言いたかったが、怒らせるとやりにくくなる。なんといっても小姓方は二人しかいないのだ。おだてて、必要な話を得るのが得策。藤之助は満足げに頷き返した。

「さよう。自分で言うのもなんだが、わたしは運が強い。どうじゃ、早乙女殿。運試しというこうではないか」

なにを思ったか、そろそろと武道場の格子窓の方に向かった。色恋に通じている一角は、すぐにぴんとくる。追いかけて、素早く腕を摑んだ。

「やめておいた方がよい、見つかったときにはなんとする。御役御免になるやもしれぬぞ」

「だから運試しと言うたではないか。見つかるか、はたまた、うまくいくか。道はいつでも二つにひとつじゃ」

「それは確かにそうだが」

馬鹿な真似をしないという、三つ目の選択もあるではないか。調べが終わっていない今、御役御免は困る。一角は三つ目を選びたかったが、愚かな覗き男は、「早く来い」としきりに手招きしていた。

「女子の汗の匂いじゃ」

格子窓の下に屈みこみ、うっとりしている。よほど飢えているのか。岡場所にでも行って股間の倅を鎮めろと、怒鳴りつけてやりたかったが、またまたこらえた。藤之助の隣に行き、見張り役に戻ろうと口を開きかけたとき、

「よいか。一、二の三じゃ」

腕を摑まれて、なかば強引に立たされる。格子窓越しに、いやでも稽古の風景が飛びこんで来た。

「はぁっ」

耳をつんざくような気合いとともに、奥女中らしき女が竹刀を構えて突進する。待ち受けているのは、長い髪を後ろに束ねた女だった。かなりの美人といえるだろう。切れ長の目元は涼やかだったが、繰り出した竹刀は敏捷で、無駄がない。素早く一撃をかわして、擦れ違いざま、奥女中の胴を打った。

「あれが人見藩の鬼百合よ」

藤之助は涎を垂らさんばかりに、にやにやしている。だが、一角は女たちの素早い動きや、隙のない構えに目が向いていた。

「タイ捨流の動きじゃ」

「そんなことよりも、あの女子のことが知りたかろう。あれが噂の別式女でな。名は片桐百合」

「なに？」

「しっ、声が大きい」

今度は無理やり座らされた。気づかれたかと思ったが、格子窓から叱責は降ってこない。

一角は小声で訊ねる。
「とうてい信じられぬが、猛虎の女か」
「そうじゃ。年は十八、凛としたあの風情がたまらぬ。殿の奥方候補にもあがっていたほどよ。他藩から良い縁組みがあったため、流れたがの」
「良い縁組みとは？」
「さあて、そこまでは知らぬ」
話が肝心なところに及ぶと、藤之助は無知な小姓の真似をする。不審死を遂げたのは、小姓方の若い藩士。勘定頭で芸目付の猛虎には、似ても似つかぬ女がいる。そして、奥女中たちが指南されているのは、間違いなくタイ捨流。この三つがわかっただけでも、よしとするしかあるまい。
「ついでに、もうひとつ、訊ねたい。奥御殿を纏めているのはどなたなのか」
最後の問いかけを発した。
「亡き大殿の奥方であり、亡き殿の母君であらせられる光徳院様じゃ」
「大殿も亡くなられたのか」
「さよう、昨年、みまかられておる。ご夫君を失われたばかりだというに、さらにまたご嫡男までもとは……おいたわしいことよ」

このときだけ、藤之助は本当に哀しげな顔をした。昨年から今年にかけて、葬式続きという裏には、なにが隠れているのか。一角は忘れないよう、聞いた事柄を頭の中で繰り返している。

さて、数之進の方は、どんな話が得られたか。

照りつける陽射しが、じりじりと焼けつくように暑い。今日のような日は、水練も悪くないと思っていた。

## 五

「我が藩においては、剣術と同じほどに水練が重要じゃ。泳げぬやつは、即、辞めさせられる。国許の郷義館でも、剣術、弓術、馬術、体術に加えて、水練の稽古があるのじゃ。それぞれ日にちを定めて稽古が行われておる」

その夜、藩士たちは庭の一郭で、球磨焼酎を楽しんでいた。夕顔の鉢が十鉢ほど並べられた場所に、縁台を出して、花見と洒落込んでいる。じきに大川で花火もあがり始めるだろう。上級藩士はひとりもいないが、その分、気楽に飲んでいた。

「それでは、わたしは明日にも、辞めさせられるかもしれませぬ」

数之進は湯飲みに注がれた焼酎を、ちびちびと舐めていた。強すぎて、とてもごくりとは

飲めない。対する嘉津次は、すでに何杯も空けていた。本人も言っていたとおり、呆れるほどに焼酎が好きで、強い。

「案ずることはない」

陽気になる酒らしく、嘉津次は朗らかに笑った。

「ちと脅かしただけじゃ。泳ぎが不得手な者には、浮き欅や浮帯といったものがある。瓢箪を帯状に繋げたものでな。これを用いれば、だれでも浮くゆえ、怖れることはない」

「それを聞いて、安堵いたしました」

団扇で嘉津次に風を送りながら、それとなく一角の姿を探している。三十人ほどの藩士が集まった中庭は、昼間の暑さが去り、蚊取り線香の匂いを含んだ風が吹いていた。湿気はまだ残っているものの、不快というほどではない。

「水練の稽古はどこで行うのですか」

さして興味はないが、あたりさわりのない話をしているうちに、思いもかけない話が聞けることもある。藩主派と逆意方に分かれているのか、そもそも対立はあるのか、対立しているとすれば、だれとだれが頭格なのか。まずは藩内の動きが知りたかった。

「西側の一郭よ。御堀の水を引きこんでおるのじゃ。見に行くか」

「いえ、今宵は遠慮いたしたく思います。蚊にくわれそうですので」

この藩邸は、増上寺の北に位置しており、溜池と堀に面していた。敷地の広さは三千五百坪足らずで広いとはいえない。にもかかわらず、遊泳場を設けているあたりにも、泳ぎに対する藩の意気込みが窺えた。

「さあ、飲め、おそがおそがやらんと一気にいきゃあ。これはおぬしの歓迎会も兼ねておるのじゃ。昨日は、殿の月命日であったゆえ、われらも飲むのを控えたがの」

「おそがおそがやらんと一気にいきゃあ？」

数之進は思わず首をひねったが、焼酎を注ごうとした嘉津次から徳利を取り、注ぎ役にまわる。昨日が月命日ということは、志摩守が逝去したのは三月六日ということだ。それを頭に刻み、問いかけた。

「大殿、つまり、みまかられた殿の父君は、下屋敷におられるのですか」

左門の話や李兵衛の調書は完璧とはいえない。短い間に調べるのは限界があるからだ。抜け落ちている部分を補うため、夕涼みを兼ねた問答を始める。

「大殿は、昨年、ご逝去あそばされた。されど、殿が跡を継がれたのは、二年も前のこと。すでにそういった面倒な問題は片付いていたゆえ、後顧に憂いは残されなんだであろうがの。まさか、殿までもがと、われらも驚いておる。いまだに信じられぬわ」

嘉津次はぐっと一気に焼酎をあおる。暗くなりかけた気持ちを、だれかが察したわけでは

ないだろうが、
「おお、花火じゃ」
「始まったぞ」
口々に声があがった。大川は目と鼻の先、次々に打ちあげられる花火に、藩士たちの目が向けられる。当初は大名家が金主だったが、商人が力を持つにつれて、彼の者たちも金主として、花火をあげるようになっていた。連日、夜空を彩るのだから、やはり、江戸は凄い町といえる。
「殿には、奥方様はおられなかったのですか」
数之進も花火を楽しみつつ、調べを遂行した。
「参勤交代で四月にお戻りあそばされた後、祝言をおあげになる予定であった。殿も心待ちにしておられたであろうがの。縁がなかったということであろう。かえすがえすも無念でならぬわ」
「奥方様となられるはずだったお方は、どちらの大名家の方なのですか」
「大名家ではない、お頭のご息女よ。相愛での。殿が元服なされた折に、ご結納をかわされたのじゃ。似合いの夫婦になられるであろうさ」
今も生きているかのような言い方になったのは、酔いがまわっているからだろう。言葉尻

をとらえるような真似は避けた。

「さようでございましたか」

小藩の立場からすれば、有力な大名家との縁組みを考えるようにも思えたが、ほとんど借財がないため、権力や小判よりも、互いの気持ちを重んじることができたのかもしれない。相愛でありながら、身分の違いにより、別れを告げなければならなかった数之進は、つい我が身と重ね合わせている。

「さいぜんは、『肥後六花』と言うたが、正しくは百合殿を加えて、『肥後七花』じゃ。人見藩が誇る艶(あで)やかな鬼百合を忘れてはならぬ」

「鬼百合でございますか。それはまた」

「美人の異名らしくないか？」

「はい」

「百合殿は、小太刀や槍の遣い手ゆえ、いつの間にか、鬼百合などと呼ばれるようになったのじゃ。男勝りではあるものの、袴を着けた姿などは、惚れぼれするほどに美しい。ま、多少、おおちゃきい面はあるがの。まぎれもなく名花のひとつよ」

「おおちゃきい？」

ふたたび数之進は首をひねったが、周囲では、「ほかっとけ」だの「むりこむしょうに飲

ませたらいかん」だのという、耳慣れない言葉が飛び交っていた。

肥後の方言だろうか。

それにしては、響きが少し違うように思える。肥後弁は「じゃっどん」や「元気でごわすか」というように、濁音含みのように感じられたが……。

「嘉津次、もうやめとけ。顔がまっかしけじゃ」

他の藩士が、二人の間に座る。

「なにぬかしよる。このぐらいで酔うものか。生田殿、飲め、一気にいけ」

「いただいております」

「花火というのはだな、熊本藩細川家の家臣だった稲富伊賀守直家と申す砲術家が、遡ること約二百年前に、創始したとされておるのじゃ」

「出たな、嘉津次の蘊蓄が。たるくてかなわんの。酔うと始まるのじゃ。おぬしも適当に聞き流せ」

「ええい、うるさい。向こうに行っとれ。稲富直家は、細川家を追放された後、家康公に仕えた由。昔は戦に使われていた砲術が、そら、今ではあれじゃ」

嘉津次が目で指した夜空に、鮮やかな華が開いた。平和の象徴と言えるかもしれない。戦のない太平の世なればこそ、花火という娯楽が生まれたのである。

「花火も見事でございますが、ここに並べられた夕顔も」

と、数之進は鉢植えに視線を落とした。

「大輪でございますね。ただ先程から見ているのですが、変化朝顔はない様子。朝顔は変わり種が出やすいと聞いた憶えがございます。変化した花は出物と呼ばれるとか。ここにはないようですが、夕顔という種自体、変化がでにくい花なのでしょうか」

「う、いや、それは」

嘉津次はとたんに口ごもる。ついさっきまで得々と蘊蓄を語っていたのが、嘘のような様子は、まさに変化だった。変化朝顔はないものの、この二度目の狼狽えぶりを興味深く感じたのは数之進だけではないようだ。

またか。

訪れた奇妙な静寂を、今度は比較的、冷静に受け止めている。領地の焼畑農法と、『使いまわし』の大和農法。あの話が出たときも、同役たちは急に黙りこんだ。決まって嘉津次が狼狽し、その後、沈黙に覆われる。

「変化朝顔は、育てるのがむずかしゅうての。去年はうまく育たなんだと聞いている。親株の種も取れなかったとか」

ひとりの言い訳めいた言葉に、別の藩士の声が重なる。

「殿の喪中だというのに酒盛りか」
「ふん、いい気なものよ」
どの部屋の者かはわからない。六人の若い藩士が、挑むように睨みつけていた。少し離れた場所には、例の影侍が佇んでいる。一触即発、危険な空気が高まった瞬間、
「なにをしておるのじゃ」
勘定頭、片桐主膳の一喝が轟きわたる。それとなく、目配りしていたに違いない。着流し姿で、近づいて来た。
「夕涼みの場が、争いの場になるようでは、亡き殿もお嘆きあそばされよう。各々部屋に引き取るがよい。今宵はこれまでじゃ」
「ははっ」
頭をさげた藩士に、数之進も倣い、その場をあとにする。中奥の方から、ちょうど一角が現れた。目で誘われて、厠近くの密談となる。

## 六

「おかしい」
二人同時に言い、同時に笑っていた。

「顔に出ていたか。先読みして、言ったのであろう」
数之進の言葉に、一角は苦笑する。
「それもあるが、おれも『おかしい』と思うことがあったのじゃ。まずはおまえから話すがよい。童顔ゆえ、とてもおれより年上には見えぬが、いちおう顔を立ててやる」
「ありがたいことよ。話をする前に、まずは今のあわやの事態だ。見ていたか」
「むろんじゃ。おまえを呼ぶ機会を見ていたのだが、危ないところであったわ。猛虎が止めなければ、騒ぎになったであろうな。凄い殺気だった」
「あとから来た六人について、調べてくれぬか」
「おう、まかせろ」
「わたしの『おかしい』はこういうことよ」
領地の焼畑農法と、『使いまわし』の大和農法。その話が出たとき、黙りこんだ藩士たち。訊いてはならないことだったのか。主膳が代わりに答えたものの、どうも腑に落ちない。
「そして、つい今し方のことだ。並んでいた夕顔を眺めながら、変化朝顔のことを訊いたのだが、またしても、奇妙なだんまりよ。どちらも別にさほど問題がある事柄とは思えぬ。普通に答えれば済むことであるのに、なぜ、とな。疑問が湧いた」
「二つの農法と、変化朝顔か。ああ、そうじゃ。おまえが影侍と言うた藩士は、御家老のご

嫡男、伊沢喜内である由」

一角は手短に、『河童侍』と痛烈な侮蔑と皮肉をこめて呼ばれるようになった理由を話した。大川に流された主従、喜内は逝去した志摩守に助けられた。伊沢喜内を筆頭に『人見の四天王』と呼ばれていた若者たち。喜内以外の三人は、二人が死に、ひとりが療養のため実家に戻った。

「まだ十九なのか」

数之進は驚きを禁じえない。

「落ち着いておられるゆえ、わたしと同い年ぐらいかと思うたが……騒ぎの気配を察して、仲裁役を買って出るおつもりだったのやもしれぬ」

「『河童侍』がか？」

「そう呼んでいるのは、一部の者たちだけではあるまいか。さいぜんの六人などは、四天王のひとりだった喜内様を、心の奥では敬うておるような気がしなくもない」

「おまえはああいう手合いに、肩入れするきらいがある。そうあってほしいという気持ちが、先走っているだけではないのか」

「手厳しいな」

苦笑いしたが、忌憚ない意見を言ってくれるのはありがたい。

「それで、おぬしの『おかしい』はどのようなことだ」
と、促した。
「剣術の流派のことよ。人見藩はタイ捨流だと、おれは覚えていた。ところが、稽古を始める前に、摩利支天経も唱えなければ、激しく攻めたてるような動きも見せない。片桐様や指南役の動きが、今ひとつしっくりこないのじゃ」
「タイ捨流というのは、そんなに激しい動きをするのか」
「うむ。ときには跳躍したり、突進したりして、間合いを詰めたりもする。ひとつひとつの動きがはっきりとしているのじゃ。敏捷に攻め、すかさず相手の隙を見て、打つ」
打つ真似をして、さらに言った。
「されど、片桐様はろくに構えようともせなんだ。他の指南役たちも似たような動きをしておったわ。昨日、今日と、二日、見ただけゆえ、断定はできぬが、おれはタイ捨流ではないような気がしておる」
「別のなにかが交ざっている、ように思うたか？」
微妙な言いまわしに気づかぬ友ではない。
「そんなところよ」
おまえの方はどんな話じゃ。目で促されて、答えた。

「方言のことよ。先程、夕涼みをしていたのは、勘定方の者が多いのだがな。酔って出たのだろう、『おそがおそがやらんと一気にいきゃあ』とか、『むりこむしょうに飲ませたらいかん』などと、舌を噛みそうな方言を使うていた。肥後の方言ではないように感じたのだが」

「今の話、急いで文にしたためろ。おれがひとっ走りして、鳥海様のお屋敷に届ける。わけのわからない者が『交ざっている』のは気分が悪い。早く相手の正体をつかまぬことには、寝首を掻かれかねぬわ」

「わかった。剣の流派も、いささか不審の儀あり、ということだな」

「そうなのだが……不思議なことに、鬼百合はタイ捨流のように見えた」

「鬼百合？」

数之進は訊き返した。

「どこで見たのだ」

「午過ぎに武道場の見張りを仰せつかったゆえ、と、誤解がないように言うておくがな。おれは止めたのじゃ。ところが、同役の寅田は聞く耳持たずよ。まあ、どうせなら覗いてみるかと、思うたのも事実だが」

一角にしては珍しく、最後の方は消え入りそうになっている。同じ立場になれば、自分とてわからない。覗きについては不問に付すことにした。

「その結果、片桐親子は剣術の流派が違うかもしれぬと思い至ったわけだな。父子でありながら、しかも藩邸内にいるにもかかわらず、異なる流派を使うている、と」

差し延べた救いの手に、一角はしがみつく。

「いかにも、そのとおりよ。おかしいであろう、親子ぞ」

「年を取ることによって、動きの派手なタイ捨流がきつくなり、他の流派の良いところを取り入れたとは考えられぬか」

「むろん、それもありうることじゃ。武芸に限らず、華道や茶道といった芸事もそうだが、学ぶことに終わりはない。常に工夫をこらして、その道を究めるべく、精進努力するのが肝要。猛虎と呼ばれた片桐様も、寄る年波には勝てずというところやもしれぬ。なんとなく、気になったゆえ」

不意に一角は言葉を切る。

「どうしたのだ」

「いや、人の呻き声のようなものが」

「な、なに？」

数之進はおそろしげに周囲を見まわした。二人がいるのは中奥の厠近くで、主がいない今、座敷には灯がともっていない。月明かりがあるにはあるが、鳥目の数之進は一角ほどよく見

えない。
「おまえはここにいろ」
と言われたが、腕を握りしめた。
「いやだ、ひとりで待つ方がおそろしい」
「では、来い」
草履を脱いで、廊下にあがった一角に、数之進も続いた。うう、ううという呻き声が、確かに聞こえてくる。幽霊が苦手であるため、わずかな距離を歩いただけで、冷や汗を滲ませていた。天上から伸びる青白い月の光が、二人の影を障子に映し出している。遠くの方から、時折、花火のどーんという音が聞こえていた。
「い、一角？」
足を止めた友の腕を、いっそう強く摑んだ。苦しげな呻き声が、かなり大きくなっている。ここは確か御座所のはず、明かりのない座敷にいるのは、はたして、人か亡霊か。一角は障子越しに呼び掛けた。
「どなたかおられるのか」
答えはない。
「ご免つかまつる」

勢いよく障子を開けた一角は、棒立ちになる。おそるおそる覗きこんだ数之進も声を失った。

死に装束に身を包んだ男が、畳に突っ伏している。闇に沈んだ部屋だけに、真っ白な死に装束が、ひときわくっきりと浮かびあがって見えた。なにがなんだかわからない。眼前の光景がすぐには呑みこめず、数之進は唇をわななかせた。

「な、なにが」

「しっかりしろ」

一角は男を抱え起こした。

「すぐに医者を呼ぶ」

「な、ならぬ」

友の腕に絡みついた手は、べっとりと血で濡れている。男は激しく肩で喘ぎながら、声を絞り出した。

「かい、しゃく、を、たの、む」

「……」

二人は顔を見合わせずにいられない。目を疑うような光景、すぐには信じられなかったが、これは……。

殉死。

公儀に強く禁じられている行為が、今、目の前で起きている。

「医者だ、数之進」

「わ、わかった」

転びそうになりながら、数之進は、真っ暗な廊下に飛び出して行った。全身、冷や汗で濡れている。

「武士のなさけでござる、介錯を」

闇の中に、掠れた声が響いていた。

# 第三章　義腹（ぎばら）・論腹（ろんばら）・商腹（あきないばら）

## 一

殉死は、追い腹とも呼ばれており、江戸初期には、藩主の逝去にともない、腹を切る者が後を絶たなかった。

義腹は義理を立てての殉死、論腹は武士道を強調した殉死、商腹は子孫の繁栄を願うがゆえの殉死と、おおよそこの三つに大別される。幕府は安易に死ぬことを諫め、幾度となく禁止令を出していた。そのため、殉死を尊いものとする風潮は薄れて、諸藩においても、もはや追い腹という言葉そのものが消え去りかけていたように、数之進は感じていたのだが――。

「小姓方のうち、おめおめと生き恥を曝（さら）しているのは、それがしひとりでござる」

寅田藤之助は言った。数之進と一角は、付き添って看病する旨、願い出ていたのだが、会うのが許されたのは、騒ぎから五日目の午過ぎのこと。藩士の長屋に寝かされた藤之助は、

まだ青い顔をしており、声にも力がない。

「笑い物でござる。顔が合うと、嘲笑を返されて、ひそひそ囁かれる有様。『河童侍』とは違うのだと、みなに知らしめてやりとうござった」

「考えすぎではあるまいか。だれも笑うてなどおらぬ。少なくとも、おれはそのようなことは思うておらぬぞ。まあ、覗きの好きなたわけだとは思うていたがな」

「一角。それでは慰めにならぬ」

窘めて、数之進は藤之助の顔を覗きこむ。

「痛みの方はいかがでござるか。医者は縫うほどのことはないと、言うていたようでござるが、腕がないゆえに縫えなかったのやもしれませぬ。痛みが治まらぬようであれば、別の医者を手配しろと御家老が仰せになられておる由。他言はいたしませぬゆえ、われらには正直な気持ちをお聞かせ願いたく思います」

金瘡医というのが外科的な処置を施せる医者なのだが、たいした技もなく勝手に名乗っている者が少なくない。寝間着姿の藤之助を、数之進は注意深く見つめている。腹のあたりに血は滲んでいない。出血は止まっているようだが、はたして、傷の状態はどうなのか。

「痛みはあるが、なんとか我慢できる。貴公たちには迷惑をかけてしもうた。すまぬ」

「あのとき、近くにいたのもなにかの縁でございます。これを」

と、数之進は採ってきたばかりの青々とした葉を見せた。
「蓼藍でございます。幸いにもここの庭にございましたゆえ、集めて参りました。止血はもちろんのこと、傷口の消毒、消炎といった効能もございます。生葉を揉んでその汁を塗布いたしますれば、少しは楽になるのではないかと」
どの程度の傷なのか、手当てを口実にして、確かめようとしていた。藤之助の行動を二人はいささか理解しかねている。今頃になって、なぜ、殉死なのか。あるいは、という疑念を感じ取ったのかもしれない。
「あとにしてくれぬか。気持ちはありがたいが、今は、傷口にふれられたくないのじゃ」
藤之助はついとそっぽを向いた。
「わかりました」
素早く引いたが、他にも確かめなければならないことがある。
「お訊ねしたいことがございます」
耳のそばで囁いた。
「殉死のことですが、もしや、小姓方の御三方も、殿の後を追われたのですか」
この五日の間に、一角と調べを進め、細かく情報を交換している。四人いた小姓方のうち、二人は死亡、ひとりは実家に帰ったと聞いていた。が、藤之助の不可解な言動を見ると、殉

死の疑いがいやでもふくらんでくる。

「……」

口を開こうとしない藤之助に、今度は一角が告げた。

「われらは口が堅い。刀にかけて、だれにも話さぬゆえ、正直に答えてくれぬか」

「わたしは刀とこれに誓います」

数之進は腰の脇差を左手で示しながら、懐から算盤を出して、掲げる。父の形見の古い算盤は、言うなれば勘定方の守り刀。藤之助はゆっくりと二人を見た。

「廊下にはだれもおらぬか」

用心深い問いかけに、すぐさま一角が動いた。

「待て、確かめる」

静かに障子を開け、外を覗いた後、閉める。

「おらぬ」

「ここだけの話じゃ。他言は無用ぞ」

藤之助の問いかけに、二人は大きく頷き返した。

「誓います」

「われらを信じろ」

「二人の考えは、おそらく正しい」

それでも藤之助は、慎重な言いまわしになる。

「最初の騒ぎが起きたのは、四月六日のことであったわ。さよう、殿がみまかられてから、ひと月後よ。小姓のひとりが、禁じられている道を選んだ」

殉死という言葉は決して口にしないが、ひとりがその日に死んだのは、おそらく真実であろう。検使役人が検分に訪れているはずなので、左門に確かめれば、はっきりするはずだ。

「あとの二人も……でございますか」

先を促すように、数之進は訊いた。療養のために実家に帰ったという小姓も、殉死したのではないのか。

「定かではないが」

藤之助の口が重くなる。

「そうだという噂を聞いた。四月六日に死んだ者のときは、それがしも亡骸をこの目で見ておる。御座所のあの座敷、それがしが選んだあの場所で最期を遂げたのじゃ。されど、あとの二人については……わからぬ。人づてに話を聞いただけゆえ」

「つまり、藩邸で死んだわけではないのですね」

小声の確認に、藤之助はかすかに頷いた。

「では、殉死かどうかはわからぬ」

一角の言葉を聞くと、すぐさま反論をあげる。

「されど、四天王は、亡き殿とはご盟友であられた。単なる主従の関わりではござらぬ。参勤交代の折にもご同道なされて、一日たりとも離れたことはござらぬ。それゆえ、その道を選ぶしかなかったのではないかと思う次第」

涙がこぼれ落ちかけたのか、しきりに目をしばたたかせていた。一角は皮肉めいた口調になる。

「寅田殿も、四天王の仲間入りをしたかったのでござるか」

武道場の見張りをしたとき、藤之助は、志摩守と伊沢喜内の間には、衆道の関わりがあったというようなことを匂わせていた。数之進もそれらの話を一角から聞いている。揶揄するようだったそれは、すべて四天王に対する羨望や嫉妬から出たものなのか。

「そう、かもしれぬ」

藤之助はぽつりと言い、じっと天井を見据えている。

「あとひとつだけ、お訊ねいたしたく思います」

数之進は最後の問いかけを口にした。

「先程、申されましたが、四天王の方々は、亡き殿とはご盟友であられた由。そして、殿は

参勤交代で、国許に戻っておられた。つまり、四天王の方々も、此度の参勤交代に同道しておられたのですね」

「そうじゃ。江戸に残ったのは、それがしだけよ」

「そうであるならば、なぜ、国許における殿のご葬儀も終わらぬうちに、四天王は、肥後から急ぎ江戸にお戻りになられたのでしょうか。殿がみまかられたのは三月六日。四天王のひとりが、追い腹を切ったのは四月六日。わずか、ひと月後でございます。それほど深い主従の絆（きずな）があったのだとすれば、四天王が国許での葬儀を取り仕切り、それを終えた後、新しい藩主となられる頼之様とともに、江戸へお戻りになられるように思いますが」

「そのようなことまでわからぬ。殿がご不例になられたのは突然だったゆえ、まずはそれを知らせるべく、江戸に戻られたのではあるまいか」

「されど、四天王はみな腕に覚えのある方々ばかり。使者の役目はひとりでも充分だったように思えます。四人揃っての帰参というのが、いささか腑に落ちませぬ」

「すまぬが、もう疲れた」

「あ、これは失礼いたしました。気のまわらぬことで」

数之進と一角は、視線を交わし合い、暇（いとま）を告げた。

「われらはこれにて失礼つかまつります」

「おれも数之進も、傷の手当てには慣れておる。晒しを取り替えるときは手伝うゆえ、いつでも声を掛けてくれ」

傷にさわらぬよう、音をたてないようにして、廊下に出た。それを待っていたのか、主膳がこちらに歩いて来る。

「今日はこの後、姉君たちの家に行くのであったな」

数之進に目をあてて、訊いた。

「は。申し訳ありませぬ。一角にもなにか話があるらしく、連れて来るようにと姉の文に記されておりました。奉公してまだ日が浅いというのに、二人揃ってとは、いささか気がひけまするが」

三日ほど前から冨美の文が届くようになっている。またあらたな騒動かと、内心、気が気ではなかったが、ぎりぎりまで情報を集めることに専念した。もっともこの暇願いは、左門との密談を隠すための口実でもある。

「交代で休みを取るのは、あたりまえのことじゃ。明日の夕刻まで、ゆるりと過ごしてくるがよい」

主膳にそう言われて、ちくりと胸が痛んだ。好きで嘘をついているわけではない。役目のためとはいえ、いつまでたっても慣れるということがなかった。

「武道場の掃除をしてから出かけたく思います」
「律儀なことよ」
「お頭様。寅田殿の手当ての折にこれを」
数之進は、手拭いに包んでおいた葉を見せる。
「なんじゃ」
「蓼藍の葉でございます。止血や解毒に効能がありますゆえ、葉を揉み、絞り出した汁を晒しに浸して、傷口に当てるのが宜しかろうと」
「ほう、数之進は薬種にも通じておるのか」
「医者が逃げ出すほどでございます」
一角の褒め言葉に、慌てて首を振った。
「素人療法でございますが、蓼藍は確かに効果がございます。ちょうどこちらの庭にございましたのが、幸いではないかと思う次第。六月、七月は、蓼藍が青々と繁る時季でございますゆえ」
「わかった。手当てする折、湿布をさせてみよう」
「傷の具合はいかがなのでございますか」
さりげなく探りを入れる。芸目付でもある主膳は、怪我をした藩士の手当てをする役目も

担っているに違いない。暇願いの話をするために、長屋の廊下に来たわけではないだろう。主膳の表情が不意に曇った。

「真一文字に深く切ったらしゅうての。三日ほど血が止まらなんだわ。飛び出しかけていた腸を戻して、きつく晒しを巻いたが……若さのお陰であろう。どうにかこうにか血が止まった」

「さようでございましたか」

芝居かと思ったが、どうもそうではないようだ。

「明日の夕刻には戻ります。なにかございましたら、お声をお掛けください。寅田殿のこと、くれぐれも宜しくお願いいたします」

頭をさげて、二人は庭に降りる。梅雨も終わりに近づき、ここ数日は、真夏を思わせる暑さになっていた。強い陽射しを手で遮り、一角は、肩越しに藤之助が休む座敷を振り返る。

「やはり、おれはあやつが信用できぬ」

「狂言だと言うのか」

「そうじゃ」

「されど、お頭が偽りを言うとは思えぬ。それに、あのときもかなりの量の血が出ていた。とても芝居とは思えぬが」

「お。最後に『が』がついたな」

「うむ。おぬしが言うとおり、不審な死を遂げた三人は、殉死したと思わせたいがための狂言とも考えられる。言うまでもなく、殉死は御法度。藩は当然、これを隠そうとする。われらも下手に騒げぬゆえ、不問に付すしかないと、鳥海様にお知らせするであろう。三人の死をこれ以上、探らせないがための苦肉の策に思えなくもない」

「命懸けの商腹か」

一角らしい辛辣な物言いに、苦笑を返した。見返りがあるからこそ、藤之助は思いきった策に出たのではあるまいか。背後にちらつくのは、そう、ひとりしかいない。

## 二

「うまくいった暁には、御老中からたんまり褒美が、というわけか」

数之進の言葉を、一角が早口で継いだ。

「おれははじめから、あやつが気に食わなんだ。わけもなく、にやにやしては、気持ちを逆撫でするようなことを言うていたが、あれも怒らせて本音を聞き出そうという腹だったのやもしれぬ」

「おぬしが気に食わぬ云々はともかくも、ひとり目が四月六日に死んだという話は、おそら

く偽りではあるまい。問題は本当に自分で腹を切ったのか、それともだれかに切られたのか、ということだ」

「切られたのじゃ、決まっておる。そもそも寅田という名字からして怪しいではないか。鳥海様の屋敷に投げこまれた文には、こう記されていた由」

〝お助け侍の善意につけこみ、始末しようとする輩あり。此度の潜入は危険。待ち受けるのは虎と狼なり〟

「あの『つけこみ男』、おまえがご親切にも手伝うてやった平助は、文にあったとおり、善意につけこみ、命を奪おうとした」

「奪おうとしたのは、平助ではない、刺客だ」

「屁理屈をこねるな。とにかく、文の警告は真実であったということよ。虎と狼の虎は、藤之助に違いない」

躊躇いなく断じた。否定するでも、肯定するでもなく、数之進は続ける。

「鳥海様はこうも言うておられたな」

〝どうも御老中は、目をつけたいくつかの藩に、『仕込み』をしていたふしがある〟

何人ぐらい仕込んだのか、藤之助もそのひとりなのか。しかし、あまりとらわれてしまうと、真実が見えなくなるようにも思えた。

「四天王のうち、生き残ったのは、伊沢喜内様おひとりか」

独り言のように呟いた。武道場が見える場所に来ていたが、まずは拭き掃除用の水を汲むため、二人は近くの井戸に向かっている。

「だからこそ、おれは殉死ではないと思うのじゃ。堅い絆で結ばれた四天王が、よいか、がっちりと結ばれた四人がだぞ。藤之助の真似をするわけではないが、おめおめと生き恥を曝すまい。『河童侍』だのなんだのと、人のそしりを受けながらも……」

「それよ」

と、素早く遮る。

「喜内様は物静かに見えるが、ご気性は激しい方のようにも思える。落ち着いておられるゆえ、わたしは当初、同い年ぐらいかと思うたがな。お年は十九とお若い。己を抑えきれず、走りがちになるであろうに、敢えて『河童侍』という嘲(あざけ)りに耐える道を選んだ」

「おまえの話は、時々、わかりにくくなる。要するにこういうことか。蔑称を与えられた時点で、腹を切っていた、いや、切りかねない気質であろう男が、なぜ、生き恥を曝し続けているのか」

一角は水を汲みあげて、桶に注いだ。数之進は顔を洗い、喉を潤してから、手拭いで拭いた。武道場のまわりには、大きな木が多いので、心地よい日陰ができている。吹き抜ける風

が涼やかだった。

「そうだ」

問いかけに頷き返して、もう一度、水を飲む。寅田藤之助の言動も不可解だが、数之進の目には、伊沢喜内も謎めいた若者と映っていた。武道場で稽古が行われる折、相変わらず黙然と座り続けている。藩士たちにそれとなく訊ねても、たいした話は得られていない。

「もっと陰口をたたく者がいても、いいように思えるのだが、そういった話はついぞ耳にしない。溺れたという話の裏に隠された真実を、みな知っているからではあるまいか。もしかすると……溺れたのは、志摩守様の方だったのやもしれぬ」

「裏に真実があると決めつけておるな」

一角は笑って、武道場に歩を進めた。

「知りたければ本人に訊けばよいではないか」

「え？」

「いいから、来い」

ふたたび言われて、数之進は、あとに続いた。武道場にはだれもいないと思っていたのだが、噂の人物、伊沢喜内が汗みずくになって熱心に素振りを行っている。いつの間に一角は親しくなったのか。

「喜内様」

呼び掛けると、喜内が笑みを向けた。

「一角殿。なかなか姿をお見せにならぬゆえ、今日はおいでにならぬのかと思うておりました」

名前で呼び合うあたりに、ここ数日間で急速に育んだ親密度が表れている。数之進と定期的に行う『厠の密談』に遅れることが多かったのは、ここで稽古の相手をしていたからに違いない。

流石は一角。

友の抜かりない行動に、感謝しながら、手短に挨拶をかわした。

「噂になっており申す。虎に咬みついた若武者がいると」

喜内は興味深げな眼差しを投げている。猛虎に敢然と具申した様子が、面白おかしく伝わっているのかもしれない。数之進は恐縮して、畏まる。

「咬みつくなど、めっそうもない。意見を求められましたので、常日頃より思うていることを述べたにすぎませぬ。我が藩は常に工夫を凝らして、あらたな特産品を増やしております。そのお陰でほとんど借財がないという、他藩からは考えられぬ台所事情を維持しておりますが、裏に見え隠れしているのは民の嘆き。せめて、もう少し慮ってやれぬかと……」

「数之進」
一角が笑いながら制した。
「あ」
二人の視線に気づき、苦笑する。
「申し訳ありませぬ。つい」
「これでござる。『民富めば国富む、民知れば国栄える』が、我が友の口癖。勘定方というよりは、地方巧者でござるよ。それぞれの国の地形までをも頭に入れて、どんな特産品が適しているか、なにを、どうやれば民が潤うか。寝る間も惜しんで考えておりまする」
「伊沢家は江戸詰めの家老職。恥ずかしながら父は、ご領地に足を踏み入れたことがありませぬ。それでは殿の助けにならぬと思い、それがしは参勤交代の折、お供つかまつりました次第。生田殿が申されたとおり、役人と庄屋の結びつきが強く、民はかろうじて命を繋いでいるような有様でござった。潰れ百姓が増えていることを、殿は危惧されており申したが」
初めての参勤交代、初めての領地視察。主従ともども意気揚々とお国入りしたであろうに、若き藩主の短い政（まつりごと）は、最悪の形で終わりを告げた。たったひとりになった四天王の生き残り。喜内の胸にあるのは、どんな想いなのか。なにもかも押し隠して、平静を装う姿に、数之進は胸を打たれた。

このお方は、おそらく藩主派であろう。お力になりたい。
うまく話の糸口をつかめないかと考えたが、
「それにしても」
喜内の方が先に口を開いた。
「お若いので、驚き申した。生田殿は、それがしよりお年が下なのではござらぬか」
「いや、喜内様。童顔ゆえ、若く見えるやもしれませぬが、数之進はそれがしよりも、ひとつ年上の二十六。なめてかかると、手玉に取られますゆえ、お気をつけめされよ」
「手玉に取るなどと」
数之進は軽く受け流したが、喜内は直立不動になって、深々と頭をさげる。
「ご無礼つかまつった」
相手が年下であっても、決して居丈高な態度は取らないだろうが、年上となれば、たとえ下級武士であろうとも敬う気持ちを忘れない。おそらく江戸生まれで、そのほとんどを江戸で過ごしてきたであろう喜内は、だがしかし、肥後もっこすの気質を身裡に強く持っているように思えた。
「お気遣いは無用でござる」
一礼して、数之進は言った。

「われらはここの掃除を終えた後、姉の家に行くのですが、宜しければ伊沢様もおいでになりませぬか」

数之進にしては大胆な申し出だったかもしれない。驚いたように一角が目を向けたが、意図を読み取って、すぐさま呼応する。

「さよう、大川端で眺める花火は、一見の価値がありますぞ。僭越ながら、この早乙女一角が、案内役を務めまする。お忍びで、いかがでござろうか」

「おおいにそそられます」

半分本音、半分困惑といった表情になる。とはいえ、これからすぐにとはいかないのが、上級藩士の辛いところだ。

「されど、次の機会にしていただきたく思います。すでにお耳に届いておるやもしれませぬが、殿の弟君、頼之様が、肥後をお発ちになられた由。喪中ゆえ、派手やかなお迎えはできませぬが、身のまわりの品々を整えなければなりませぬ。暇に見えるやもしれませぬが、『河童侍』にも、色々とやらねばならぬことがあるのでござるよ」

自嘲めいた言葉は、笑いを含んだ軽やかなもの。聡明さと機知にあふれている。年は若いがなかなかの大器と、数之進はいっそう好感をいだいた。

「それでは、また次の機会にいたします」

その言葉が終わらないうちに、奥御殿に続く北側の女門がいきなり開いた。呼び掛けも戸を叩くこともない、凛々しい袴姿の女が入って来る。後ろでくくった長い黒髪が、驚きを示すように大きく揺れた。

「どなたですか」

涼やかな目が数之進と一角に向けられる。

「百合殿」

喜内は特に狼狽えた様子もなく、二人を紹介した。突然の闖入者は、猛虎の女、片桐百合。髭面の勘定頭と、眼前の美人が結びつかず、数之進はしばし絶句する。

「……」

鳶が鷹ならぬ、猛獣が天女か。

不躾すぎる注視だったかもしれない。それが気にさわったのか、あるいは、なにか思うところがあったのか。百合の頬がさっと引き攣る。

「さては、過日の覗き屋は貴公らか」

壁に掛けてある竹刀を取り、数之進に向かって投げたが、

「おっと」

横から一角が摑み取る。

「盟友は覗き屋ではござらぬ。覗いていたのは、それがしでござる」
「では、その腐った性根、叩き直してくれるわ」
言うが早いか飛びかかった。竹刀が頭をかち割らんばかりの勢いで襲いかかる。一角は巧みにそれを受け止めた。百合が攻める、一角が受ける。父親である主膳とは、まったく異なる動きに、数之進は目を奪われた。
「凄い」
「女子ながらも百合殿は、タイ捨流の印可を受けております」
喜内は告げ、声を張りあげる。
「ご油断めさるるな、一角殿。たおやかな見た目に騙されると、手痛いしっぺ返しをくらいまするぞ。手加減はいっさい無用でござる」
「手加減する余裕などない」
一角は答えるのが精一杯という感じだった。百合の竹刀は止まることがない。竹刀を振り降ろして、薙ぎ払い、相手がさがったところへ、逆袈裟斬りを叩きつける。一角は寸前でそれを受け止めた。
「くっ」
百合は悔しげに唇を噛み、すみやかに後ろへさがる、と思わせて、横からまわりこんだ。

あわやの一撃をくらいかけたものの、一角とて自称武芸十八般である。すかさず足を送って、かわした。ほとんど早足になりながら、二人は所狭しと動きまわっている。終始、百合が攻め立て、いつになく一角は押され気味になっていた。

「手加減無用と、喜内様も言うたではないか」

苛立ちまぎれの打ちこみを、のがすような一角ではない。軽く百合の腕を打つと、竹刀が白い手から離れた。

「あっ」

と声をあげたのは、数之進だった。

「それまで」

喜内が告げる。

「いつも言うておるではないか。そなたは、気が短すぎる。技を磨きあげるのも大事だが、精神修養も忘れてはならぬぞ」

男勝りの女剣士は、不満を唱えるかと思いきや、意外にも床に跪いて畏まる。

「はい」

息を弾ませて、頬を紅潮させた顔は、眩ゆいほどに美しい。人見藩の『肥後七花』と謳われるだけのことはある。鬼百合というよりも、穢れなき白百合の方がしっくりくると、数之

進は思った。

錠がおろされていなかった武道場の女門。ごくあたりまえのように入って来た女は、多くを語ることなく、女門の向こうに消える。

可憐な白百合はいなくなった。

そう、多くの疑問を数之進の胸に残して――。

## 三

「おぬしは、どう思うた」

数之進は友に訊ねた。二人は藩邸を出て、鍛冶橋を通り過ぎ、御堀の河岸沿いに北の方角――一石橋の方に歩いている。時刻は六つ（午後六時）の鐘が鳴り終わったばかりで、周囲はまだかなりの明るさに包まれていた。夕涼みと花火見物をするためだろう。仕事を終えた人々で、河岸に並ぶ屋台や見世は混み合っている。

「なんの話じゃ」

一角は買い求めたばかりの稲荷寿司を頬張り、数之進にも差し出した。手車売り、鬼灯売り、操り人形売りといった子供向けの品を売る者たちも、往来を行き交っている。ひとつ稲荷寿司を口に入れて、数之進は話を続けた。

「百合様のことよ。声を掛けるでもなく、戸を叩くでもない。女門に錠がおりてないことを、知っていたような態度であった」

「おお、恋道に疎いおまえにしては、珍しいではないか。おれはますます気がぬけぬな。お株を奪われてばかりじゃ」

「茶化すな。あれに気づかぬのは、よほどの朴念仁か、赤児ぐらいのものよ。通常、女門の方は、内も外も錠がおろされておる、はずだ。少なくとも、わたしはそう聞いている。ところが、喜内様は開けておいた」

通り過ぎて行く者たちは、数之進の顔を見ると、決まって笑みを向ける。はて、なにが可笑しいのだろうと思いつつ、一角に視線を戻した。

「逢瀬の場か」

言葉を継ぎ、友は、にやりと笑った。

「確かにあの武道場は、それをするのに適した造りよ。男門も女門も、内側から錠をおろしてしまえば邪魔されぬ」

「されど、百合様は、殿の許嫁だった女子。喜内様とて、それはご存じであろう。あのお二人の気質を考えると、いささか慎みがなさすぎるように思えなくもない。今は喪中ではないか」

「む」

一角は歩きながら、首をひねる。

「百合様が殿の許嫁とな。おまえは、その話をだれから聞いたのじゃ」

「同役の村井殿よ。酔うていたからであろう、今も殿が生きているような話し方をしていたが」

「おかしい」

友は数之進の口調と表情を真似る。

「おぬしは、違う話を聞いたのか」

「うむ。しかし、出所は死に損ないの『商腹』ゆえ、あてにならぬがな。やつによれば殿はどこかの大名家の姫様との縁組みが決まっていたとか」

「なるほど。寅田殿は、どこの大名家であるかまでは言わなかった、か」

鋭く読み取っていた。片桐百合については、迂闊にも今まで話をしていなかったが、それは志摩守がすでに逝去しているからだ。祝言をあげていたならいざ知らず、婚儀もまだである相手にまではなかなか気を向けない。加えて、顔を見る機会もないため、話にのぼらなかったということもある。

「おぬしは、毎日、喜内様の相手をしていたのか」

なにかがくすぶっていた。喜内らしくない行動の裏にもまた真実が隠れているのではないだろうか。

「おれが相手をするようになったのは、かれこれ三日ほど前からじゃ。武道場の近くを通りかかった折、竹刀を振る音が聞こえたのでな。だれかと思い、覗いてみたところ、喜内様だったというわけよ。誘われたゆえ、相手になった。むろん調べるためということもあるが、お人柄に惚れこんだという面もある」

朝稽古の折、武道場の片隅に黙然と座していた喜内。『河童侍』は実に謎めいている。数之進も誠実で謙虚な人柄に惹かれていたが、殉死という血腥い場面が結びつきにくい若者といえた。

「おぬしのお陰で、思わぬ繋がりができたのはありがたいことよ。百合様についてはどうだったのだ。過日も、稽古が終わる頃合いを見計らったかのように姿をお見せになられたか」

「いや、初めてじゃ。おれは喜内様が、引き会わせたように感じたがな。今日はおまえを連れて来ると言うておいたゆえ」

「ということは」

御算用者と気づいているがゆえの行動と思われた。そうであるならば、ますます裏を読みたくなる。

「亡き殿と百合様は、相愛だったとか」

数之進の頭には、ふたたび同役の嘉津次の言葉が甦っている。

〝相愛での。殿が元服なされた折に、ご結納をかわされたのじゃ。似合いの夫婦になられるであろうさ〟

今も志摩守が存命しているかのようなあれは、なにかを伝えるためなのか。藩主が家臣のふりをして御算用者の動向を探ろうとする。あるいは死んだ藩主をさも生きているように見せかける。さらに生きている藩主をさも死んだかのように思わせる、などなど、諸藩はありとあらゆる策を講じて、公儀という怪物に立ち向かおうとするため、さまざまな場合を想定しなければならない。

「相愛だったが、やむなく大名家との縁組みを調えたのではあるまいか。古来より、家と家との結びつきを強めるため、武家では政略結婚が常。おれはさして気にすることではないと思うがな」

一角は、落ち着かない素振りで、屋台や見世にちらちらと目を向けている。呉服橋を左手に見ながら、角を曲がりかけたとき、

「だめだ、我慢できぬ。蕎麦を食うていこう、数之進」

と背中を押した。

「家はもうすぐそこだぞ」

「腹の虫が催促しておるのじゃ。なんでもいいから早く食わせろとな。稲荷寿司で空きっ腹を抑えようとしたが、よけい腹が空いてしもうた。それに下手をすると、飯を食うどころではないかもしれぬではないか。腹が減っては戦はできぬゆえ、腹六分目ぐらいにはしておいた方がよかろうさ」

隅の飯台に陣取り、蕎麦を頼んだ。戦が姉たちの騒動を指しているのは言うまでもない。家が近づくにつれて、数之進の心ノ臓は、どきどきし始めている。それをいっときだけでも遠くに追いやるべく話を戻した。

「本当に殉死騒動があったのだろうか」

囁き声の問いかけになる。初対面の喜内に、いきなり殉死のことを訊ねるのは、流石に憚られたので、話を聞けないまま別れていた。

「おれに訊かれてもわからぬわ。鳥海様の方に、なにか話が入っているやもしれぬ。昨日、使いを出しておいたゆえ、おいでになるであろう。されど、殉死に見せかけて殺めることもあるからな。賄賂をつかまされれば、検使役人はいくらでも口裏を合わせる。ここだけの話、村上様の調べもどこまで信用できるか」

運ばれた蕎麦を一角は旨そうに啜っている。またしても給仕の女が、数之進の顔を見たと

たん、笑っていた。含み笑いを洩らしながら、ちらちら振り返っている。
「わたしの顔になにかついているか」
「とぼけたことを言うでない。痣だらけではないか。右目は隈取りしたかのように真っ黒じゃ」
「ああ、そうか。それでみな笑うのか」
数之進も蕎麦を食べようとしたが、どうしても箸が動かない。
「どうしたのじゃ」
「いや、なんだか急に」
「ははあ、いつものやつが始まったな。ここしばらく、姉君たちはおとなしかったゆえ、おまえの苦労性と貧乏性も出番がなくて、鬱憤がたまっているに違いない。よかったではないか、これで胸の痞えが取れるぞ」
慰めなのか、揶揄なのか。しかし、とても胸の痞えが取れるとは思えない。数之進は丼を、友の方に押した。
「おぬしの腹におさめてくれ」
「ありがたく頂戴しよう。おれはなにやら、こう、胸が高鳴っておるのじゃ。此度はどのような騒動であろう、とな、楽しくてならぬ」

「わたしはそこまで達観できぬ」
渋面で言い、また話を戻した。
「剣術の流派についてだがな。先刻の手合わせを見て、わたしもタイ捨流の動きがよくわかった。確かに朝稽古の折、あれほど激しい動きは見せぬ。片桐様などはどちらかと言えば、ほとんど動きや構えがないように見える。剣術のことには疎いわたしでも、正反対の動きのように思えるが、なんという流派なのであろう。おぬしには、すでにわかっているのではないのか」
「おそらくは」
一角は汁を啜り、数之進の分まで早くも食べ終えた。
「陽の太刀ではなく、陰の太刀。構えなきを構えとする流派であろう。『切らず取らず勝たず負けざる』がその教えじゃ。タイ捨流の肥後派とうまくいくわけがない。はてさて、厄介なことよ」
銭を置いて、立ちあがる。
「待て、はっきり言わぬか」
数之進は慌てて追いかけた。
「たまには、おれも迷宮話をしてみたいのじゃ。かつまた今はまだ定かではない。確かだと

思うたときに、ちゃんと流派を告げるゆえ、しばし待て」
「思わせぶりなことを」
「楽しみは先に延ばした方がよかろうさ」
怖ろしさは、の間違いではなかろうか。姉たちの騒動と同じく、知りたいのだが、知るのが怖かった。
「鳥海様の配下じゃ」
一角が辻に立っていた二人に片手をあげる。なにげない足取りで、数之進たちの後ろに付いた。花火があがり始めていたが、数之進はその美しさを楽しむどころではない。どーん、という音が鳴り響いた瞬間、足を滑らせかける。
「おっと」
友が素早く支えた。
「すまぬ」
「いつも思うのだが、おまえは、なにもないところで転ぶ名人じゃ。そら、足下を見てみろ。大きな石があるでなし、いったい、なにに躓いたのか」
「人生やもしれぬ」
「禅問答か」

「そんなつもりはないが、此度は躓いたのではない。花火に驚いたのだ。あの音は心ノ臓に悪い」

「心ノ臓に悪いのは、花火ではのうて、騒動姉妹であろう。騙りに拐かし、怪しげな宗教、捨て子と、よくもまあ、次から次へと思えなくもない。騒動の権化よ。しかし、村上様にも困ったものじゃ。われらの潜入先に文が届くのはすなわち、だれかが姉君たちに洩らしている証。鳥海様にお話しして、きつく諫めて、と」

気配がないことに気づいたのだろう、足を止めて、振り向いた。

「歩け、数之進。足を前に出すだけじゃ。怖ろしさのあまり、動かし方を忘れたか」

「いつも以上に胸騒ぎがする」

冷や汗が、ぽたり、ぽたりと、流れ落ちている。長屋の木戸が見えた瞬間、心ノ臓ばかりか、胃の腑までもが痛み出していた。左門の配下たちが、苦笑いして、横を通り過ぎて行く。不審な者がいないか、見まわって来るつもりなのかもしれない。それとも苦労性と貧乏性には、付き合いきれぬということだろうか。

「では、そこで待っていろ。おれがまず様子を見て来るゆえ」

「待て」

声をあげたが、いち早く一角は木戸に走った。花火見物の客が出歩いているとあって、大

屋の彦右衛門が営む絵双紙屋も雨戸を閉めていない。見世の中から洩れる明かりが、木戸で手招きする友の姿を浮かびあがらせている。

「大丈夫だから来い。なにも起きておらぬ」

数之進はおずおずと歩を進め、一角の隣に行った。

「様子はどうだ」

「静かじゃ。静かすぎて、不気味なほどよ」

左右に三戸ずつ、合計六戸しかない長屋は、九尺二間の溝板長屋とは、いささか異なる空気を持っている。子供がいる家は一軒だけしかないとあって、ふだんから静かではあるのだが……。

「花火見物にでも出かけたのではあるまいか」

数之進は、一角の後ろに及び腰で従っている。いつでも逃げられるよう、背後への目配りも忘れない。それでも役目のことが頭にあるので、右側の一番奥、鳥海左門が借りてくれている家にも目を向けていた。

「鳥海様は、まだおいでになられておらぬようだ」

「冨美殿、三紗殿、早乙女一角でござる」

平然と戸を叩いた友から、数之進は急いで離れて、左門の家に隠れる。

「なにをしているのですか」
突然、背後で三紗の声が響いた。

四

「うわぁっ」
数之進は大声をあげ、転がるように外に出る。躓いてまた転びそうになったが、素早く一角が支えた。
「しっかりしろ。まだ幕もあがっておらぬぞ」
「す、すまぬ」
足を踏ん張って、左門の家から出て来た三紗に頭をさげる。
「姉様。ただいま戻りました」
「お勤め、ご苦労様でございます」
淑やかに一揖した三女は、いまだかつて目にしたことがないような極上の笑みをたたえていた。穏やかで、数之進を見つめる眸には慈愛さえあふれている、ように思える。
「どうしたのですか、その顔は。痣だらけではありませんか」
猫撫で声に、背筋がぞくりとした。

「剣術の稽古です。遣い手揃いでございまして」
「まあ、可哀想に」
顔に伸びて来た手を、我知らず、かわしていた。
「み、見た目ほど痛みませぬゆえ」
「そうですか。そなたは生田家の大黒柱、なにかあれば、わたくしと姉上は途方に暮れてしまいます。くれぐれもお気をつけなされますよう」
「は、はい」
「そなたたちが戻る頃だと思い、家の掃除をしておきました。すぐに膳の支度をいたします。あ、そうそう、お世津さんが、二度ほど姿を見せましたよ。言伝(ことづて)はありませんでしたが、なんとなく不安げな様子でございました。そなたを頼りにしているのでしょう。後で様子を見に行ってあげなさい」
「……」
数之進は恐怖のあまり、とうとう言葉が出なくなる。顔から血の気が引いていくのが、自分でもわかった。いつもは代弁者となる一角も、唖然として、目を見開いている。三紗は自分たちの家に戻りかけたが、
「お世津さんで思い出しましたが、楓(かえで)の世話も怠りなくしておきましたよ。だいぶ枝が伸

びてきたではありませんか。植え替えて、ひとまわり大きな鉢にしたいところですが、暑いときは花木も疲れております。植え替えは控えるのが宜しいでしょう。今のまま秋口まで、見守ってやるのがいいでしょうね」

では、と、もう一度、頭をさげて、三紗は家に戻る。話に出た楓とは、数之進が想い人から賜った鉢植えのことである。

「……」

二人はどちらからともなく顔を見合わせた。茫然自失、しばし路地に佇んでいたが、ごくりと唾を呑み、一角が告げる。

「とりあえず、中に入ろう」

肩を抱き合うようにして、左門の家に入る。とたんに、数之進は腰がぬけかけた。

「お、おそろしい」

友に支えられて、上がり框（かまち）に座る。

「大丈夫か。そら、水じゃ」

差し出された柄杓（ひしゃく）の水を、ごくごくと喉を鳴らして飲んだ。さらにもう一杯、飲んだが、薄気味悪い冷や汗が、あとから、あとから噴き出してくる。

「見たか、一角、姉様の異様な機嫌のよさを。聞いたか、一角、労りに満ちた数々の言葉を。

信じられぬことだが、わたしの身体を案じていた。そればかりではない、お世津さんのことを『さん』付けにしていた。いつもは憎々しげに『あの女子』としか言わぬのに」

「おれも流石に肝が冷えたわ」

一角は手拭いで、しきりに汗を拭っている。

「かつて、あのような表情を見せたことがあろうか。まさに菩薩のようであったわ。三紗殿は元々美人だが、仏の笑みを見せると、なんというのか、その、凄みのようなものが加わるな。いっそう恐怖を煽られるというか」

「ど、どうしたらいいのだ。なにが起きたのか、知りたくはないが、それでは済まぬ」

「そうじゃ」

ぽんと手を叩いた。

「こういうときこそ、彦右衛門じゃ。われらにしては迂闊であったな。先に探りを入れるべきだった。雨戸も閉めておらなんだし、明かりも灯っていたゆえ、訪ねるのに遠慮は無用。待っていろ。おれがちと調べて……」

「数之進」

不意に戸が開いた。

「は、はいっ」

数之進は操り人形のような動きで立ちあがる。入って来たのは二女の冨美、後ろ手に戸を閉めて、座敷を目で指した。

「姉、姉上、わた、わたしはまだ足を拭いておりませぬ」

「話があるのです」

「で、ですから、足を拭いてから」

押されるようにして座敷にあがり、一角が投げた雑巾で足を拭いた。重苦しい空気を察したのだろう。

「やけに家が静かでござったゆえ、花火見物にでもお出かけになられているのかと思いましたが」

一角はかなり無理をして、笑みを押しあげている。ひくひくと頬が引き攣っていた。姉妹の様子からして、大騒動であるのはおそらく間違いない。文化八年の大騒動か。瓦版の主役になることだけは勘弁してほしかった。

いったい、なにがあったのか。

様子を窺うように極端な横目で二女を盗み見る。肝心の冨美は話があるといったくせに、陰気に押し黙っていた。一角が行灯に灯を入れると、のしかかるような重苦しさが、わずかではあるものの、やわらいだ。

「姉上」
それに背中を押されるようにして、数之進はやっと切り出した。
「なにかございましたか」
口が渇きすぎてしまい、舌がもつれそうになる。答えが返るまでの時が、ひどく長いものに感じられた。三紗が信じられないほど明るいだけに、冨美の昏さがよけい心を不安にさせる。
「鳥海様の様子がおかしいのです」
冨美はゆっくりと目をあげた。
「え？」
「やけに浮かぬ顔をしておられるのです。どうしたのでしょう、そなた、なにか聞いていませんか。やはり『男心と梅雨の空』なのでしょうか。わたくしに愛刀を預けたことが、重荷になっているのでしょうか」
数之進の腕を摑み、縋りつかんばかりの形相で訴える。かつて左門は冨美に、侍の魂である愛刀を預けていた。これを返せば断りの返事、返さなければ明日に繋がるかもしれない。内気な冨美を慮ったがゆえの行動だろう。しかし、数之進や三紗がいまだに所帯を持っていないということもあり、受け取ったときのまま、二人の仲は進んでいなかった。

「そのようなことはないと思いますが」

当惑して、助けを求めるように友を見た。

「それがしも特に聞いておりませぬ。考えすぎではござらぬか。鳥海様は御役目のことで、頭を悩ませておられるだけではないかと思う次第。冨美殿に対する気持ちは、変わっておらぬのではないかと」

「一角の言うとおりです」

何度も小さく頷き返した。

「鳥海様は、姉上に捧げた真と誠を今も堅く守っておられます。姉様がなにを言うたのかは知りませんが」

「三紗は『大丈夫です、鳥海様のお心は姉上から絶対に離れませぬ』と言うのです。ですが、あの子にそう言われると、なんだかよけい不安になって」

どうやら冨美も、常とは異なる三紗の言動に恐怖を覚えたらしい。優しい言葉をかけられればかけられるほどに、不安は募り、恐怖へと変化する。これはあらてのいやがらせではあるまいか。

「案ずることはありませぬ。鳥海様のことに関しては、姉様の言葉どおりです」

心からの言葉で慰め、訊いた。

「ひとつ、わたしもお訊ねしたいのですが、姉様は」
ごくりと唾を呑む。言おうとしたのに、なかなか言葉が出ない。喉のあたりで詰まったようになってしまうのだ。
「おれにまかせろ」
一角が代弁者を買って出る。上がり框に膝で乗り、三紗が入って来ないか気にしながら、早口で告げた。
「おわかりかもしれませぬが、三紗殿のことでござる。まるで夜叉から菩薩に変化したかのようではござらぬか。今までの行いを恥じて心を入れ換えたのか、はたまた妙なものにでも取り憑かれてしもうたのか。さて、ご返答やいかに」
「杉崎様ですよ」
冨美はあっさりと言った。『柳生五人組』のひとり、杉崎春馬がしばらく姿を見せないために、三紗は機嫌が悪いのだと隠居の伊兵衛は渋面になっていた。冨美もまた眉間に深い皺を寄せている。
「四日前にそなたを訪ねて来たのです。三紗はもう大喜びでしたよ。すぐに使いをやるから待てと言って、酒肴でもてなした挙げ句、遅くなったゆえお泊まりなされ、などと言って、杉崎様をここに一晩、泊めたのです」

「なんと!?」
「杉崎春馬がこの家に泊まったのでござるか」
二人同時に驚きの声をあげ、視線を交わし合った。泊めた三紗はもちろん悪いが、泊まった春馬もその真意がわからない。この家になにか隠されているとでも思ったのだろうか。あるいは待ち伏せて、数之進に襲いかかるつもりだったのか。
「言うておきますが、わたくしは止めましたよ」
冨美は強調するように、一語一語、はっきりと言い、続ける。
「ですが、馬の耳に念仏でした。なにか過ちが起きてはならぬと思い、わたくしは不寝番をしたのです。三紗はそわそわと落ち着かなくて、この家に忍びこみかねない様子でしたから」
ちらりと冷ややかな目を投げた。
「すぐに文を送ったのに、なしのつぶて。そなたは役に立ちませぬ」
厳しい言葉だったが、いつもどおりの振る舞いこそが、生田家に、いや、数之進に平安をもたらしてくれる。落ち着いてきたのが、いいのか悪いのか。
「それで、杉崎殿の御用向きはなんだったのですか」
居住まいを正して、訊いた。

「わかりませぬ。杉崎様は『また参ります』とだけ言うて、お帰りになりました」
「三紗殿になにか話した様子はなかったのでござるか」
「それはありませぬ。二人きりにはさせてはならぬと、故郷の姉上様になったつもりで、側に付いておりましたゆえ」
「さあ、支度ができましたよ」
膳を運んで来た三紗に、話を中断させられた。
「姉上、手伝うてください。二人ともお腹が空いたのではありませんか。楽な御役目ではないのですから、せめて、腹いっぱい食べて、力をつけてもらわなければ……あ、これは、鳥海様」
戸口で三女が頭をさげると、冨美の頬はさっと朱に染まる。雨模様ならぬ恋模様か。夏本番を前にして、生田家の周囲には、早くも恋の炎が燃えあがっていた。とはいえ、数之進たちまで呑みこまれるわけにはいかない。
「鳥海様」
姿を見せた上役に、深々と一礼した。人見藩の騒動に隠された真実に近づくべく、密談を始める。

# 五

「殉死じゃ」

左門は躊躇うことなく断言した。

「四月六日に死んだ藩士は、間違いなく腹を切った。それも十文字にの、切っていた。首の刎ね方がこれまた見事。首の皮を一枚、残しただけの作法に則ったやり方であったわ。あのような死に様は、今まで見たことがない。侍の心を見た思いがした」

家にいるのは、数之進と一角、左門と村上杢兵衛の四人のみ。その目で見て来たかのような言葉を聞いて、数之進は、確認の問いかけを発する。

「もしや、検使役をお務めなされたのは、鳥海様でございますか」

「さよう、わしじゃ。杢兵衛も同道した」

「鳥海様もお人が悪い。そうであるならば、間違いなく殉死であったと、調書にその旨、記しておいてくだされればよいものを」

「一角。鳥海様は……」

窘めようとした数之進を、杢兵衛が遮る。

「ええい、相も変わらず鈍いことよ。鳥海様は、常にまっさらな状態で、御役目に臨んでほ

しいというお考えなのじゃ。事前に話を聞けば、それにとらわれてしまい、黒いものが白く見えかねぬ。それゆえのご配慮じゃ」

左門より十歳年上の六十三。小言じみた部分は聞こえぬふりをした。

「お屋敷に知らせが行ったのですか」

二度目の問いかけも念のためという色合いが濃い。知らせが行ったからこそ、左門は検使に向かったのであろう。

「うむ。おそらくは腹を切る前に、使いを寄越したのではあるまいか。亡骸はまだ温かかったゆえ」

「両目付様を呼びたかった、ということでござろうか。われらに潜入してほしいがゆえの、鬼気迫る壮絶な策に思えなくもありませんな」

一角のくだけた口調が気に入らないのか、杢兵衛は苦虫を嚙みつぶしたような顔をしている。苦労性と貧乏性の業が疼いてしまうため、数之進はこれまた見て見ぬふりをした。

「わたしもそう思いますが、いくつか引っかかる点がございます。確かめたく思います次第。まずは、ひとつ目。介錯役を務めたのは、御家老のご嫡男、伊沢喜内様でございましょうか」

「いかにも、喜内殿よ。若いながらもタイ捨流の印可を受けているとか。幼少の頃より、抜

きん出た才覚をお持ちであられる由。『人見の四天王』の長として、藩士たちを取り纏めているのは確かであろう」

「なるほど、それで合点がいきました。我が友の話によりますと、三年前、喜内様は水練において不始末をしでかしたとか。侮蔑と皮肉をこめて『河童侍』なるはなはだ不名誉な異名を与えられたそうにございます。ところが藩士たちからは、喜内様を貶めるような声がいっさいあがっておりませぬ。それどころか畏怖するような空気がございましたゆえ、いささか気になっておりました次第」

「太平の世が続いておるゆえ、切腹を見たのは初めてという者ばかりであろうな。おれも喜内様に対する誹謗中傷の類は耳にしておらぬ。盟友の首を見事に刎ねた男だ。陰口などたたけまい」

友の呟きに頷き返して、数之進は話を進めた。

「気になりますのは、喜内様に対する幕府の対応でございます。殉死は御法度、介錯した藩士に対して、いまだになんの御沙汰もないのは、なにゆえでございましょうか」

「すでにわかっておろうが」

左門の唇には、皮肉な笑いが滲んでいる。

「御老中よ。新藩主が御城にあがるまでは、処分お預けとのことであったわ。藩主派と逆意

方の動き次第ということであろう」

「やはり、そうでございましたか」

老中の腹の内は読めていたが、無駄な時を費やしたくない。話を続ける。

「もうひとつ、気になっておりますのは、四天王のことでございます。なぜ、鳥海様のお屋敷に駆けこまなかったのでしょうか。御算用者は信じられぬ、諸藩を潰すために公儀から送りこまれる『潰し屋』よ、という噂が広まっているのでしょうか。そのため、お屋敷に駆けこむのを断念したと」

「いや」

否定しかけて、左門は次の言葉を呑みこんだ。御算用者に対する疑念から、殉死を選んだのではないということだろうか。

「続けます」

上役が口を開かないため、数之進は自分なりの意見を述べる。

「仮に四天王が、御算用者に対する疑念を持っていなかったとした場合、あらたな疑問が湧きます。腹を切った者はもちろんのこと、喜内様も残る二人も、相当な遣い手であった由。『人見の四天王』と謳われた手練れ揃いでございます」

「まだるっこしくてならぬな。姓名はわかっておらぬのでござるか」

一角が口を挟んだ。杢兵衛がじろりと睨みつけ、手元の調書に目を向ける。

「殉死したのは、栗橋定常、年は二十三。残る二人は、友野吉太郎、この者も殉死したかのような死を遂げておる。年は栗橋と同じく二十三。もうひとりが、中林勝矢で年は二十二じゃ。この者は生死も行方も定かではない」

「ありがとうございます」

素直に礼を言い、左門に視線を戻した。

「話を戻しますが、鳥海様のお屋敷に駆けこむのを止めようとする者がいたとしても、この四人が力を合わせれば、さほどむずかしくはなかったはず。にもかかわらず、殉死という道を選んだのはなぜなのでしょうか」

今ひとつしっくりこなかったが、一角はふたたび同じ意見を述べる。

「言うたではないか、幕府御算用者を呼ぶためよ。鳥海様にあらかじめ使いを送っておいたのは、御老中の存在を懸念するがゆえでござろう。握りつぶされるやもしれぬと、怖れていたのではありますまいか」

「おぬしの言うとおりだとは思うのだが」

腑に落ちない様子を見て取ったに違いない。

「腹を切った理由が、他にもあると申すか」

左門が訊ねた。

「いえ、確かな理由があるわけではありませぬ」

「義腹、論腹、商腹と、殉死には三つあると言われておりますが、四天王の殉死は、さしずめ、論腹でござろうか。武士道をつらぬかんがため、幕府に訴えんがために腹を切った。笑い物にされるのは、四天王ではのうて、商腹の寅田藤之助であろうな。黒い腹を切ったところで、あふれ出るのは己の醜い欲望だけよ」

皮肉たっぷりの一角を、窘めずにいられない。

「わからぬではないか。寅田殿とて、自分なりの信義があるのやもしれぬ。下手をすれば、死んでいたかもしれぬのだ。笑い物にしてはならぬ」

「寅田は御老中の子飼いよ。『待ち受けるのは虎と狼なり』の虎は、彼の者に相違ない。われらはいつもだいたい六つ（午後六時）頃に『厠の密談』を行っておる。寅田はそれを知っていたゆえ、狂言の舞台を中奥の御座所、つまり、厠近くの座敷を選んだのであろうさ。時刻もおおよそ、おれが言うた頃じゃ。われらが駆けつけるのをあてにしたうえの真似事よ。もっとも怪しいのは、寅田だけではないが」

一角は深呼吸するように言葉を切り、さらに言った。

「勘定頭と芸目付を兼ねておられる猛虎も怪しい」

「片桐主膳か」

左門の目が、不意に昏く翳ったように感じられた。口をつぐみ、あらぬ方を見やる。先程、短く「いや」と否定しかけたときにも、似たような重い空気になった。冨美が案じていたのは、この表情なのかもしれない。

「人見藩の剣術の流派はタイ捨流。片桐様もタイ捨流なのでございますか」

またしても確認するような問いかけとなる。

「かつては、指南役を務めるほどの腕前であったが、さて、近頃は、どうであろうな。別の流派が『交ざっている』やもしれぬ」

微妙な答えは、数之進の文をきちんと読んでいるからこそ。かつまた密かに別の答えも告げていたが、敢えてそれにはふれない。肥後の方言とは思えない方言を使っていた藩士たち。人の好さそうな同役の嘉津次が浮かんだが、これも敢えて考えないようにした。

「『交ざっている』のは間違いないと思います。夕涼みの折、しきりに方言を使うておりましたが、方言どおりであるかどうかは定かではありませぬ。あるいは、彼の者たちの仕業だと思いこませたいのやもしれませぬ」

「ほう。別の『交ざり者』やもしれぬと申すか」

「確信はありませぬが、方言だけではなんとも……四天王の話に戻します。寅田殿によりま

すと、友野吉太郎と中林勝矢も殉死したのではないか、という話でございました。そういう噂を聞いたと。されど、村上様の調書では、中林勝矢は生死も行方も定かではない由。どちらが正しいのでしょうか」

上役たちを交互に見た。寅田藤之助は信用ならぬ、と、一角が目顔で訴えている。

「確かなところはわからぬ」

左門の返事を、杢兵衛が慌て気味に継いだ。

「御老中様じゃ、先手を打たれてしもうての。われらが赴いたときには、友野吉太郎の亡骸はすでに浄められたうえ、布団に横たえられていたのじゃ。腹を切り、喉を突いたように見えなくもない死に様であったが」

「それはいつ頃のことでございますか、さらに検使をしたのは、どちらのお屋敷でございましょうか」

「待てまて、日付は、と、四月九日じゃ。検使場所は人見藩の下屋敷、赤坂の田町よ」

「四月九日。つまり、殉死騒動があった日から三日後でございますか」

数之進は頭を整理しながら、思いつくまま口にする。

「四天王のひとりが殉死したのは、四月六日。つまり、喜内様をはじめとする四天王は、その時点で江戸に戻っていたことになります。志摩守様の近習であった四人が、亡骸を国許に

残したまま、早々と江戸に戻ったのはなぜでございましょうか」
「藩主が逝去したことを、急ぎ知らせに戻ったのやもしれぬがな。数之進が言うたように、堅い絆で結ばれていたはずの主従が、亡骸の供もせず、肥後を発ったことに関してはいささか疑念が残る」
と、左門は数之進に物言いたげな目を投げる。

## 六

「はい」
数之進は頷き、おそらくは三人も考えているであろうことを口にした。
「もしかすると、四天王は、志摩守様の密命を受けたのやもしれませぬ」
見まわしたその目に、みな頷き返した。以心伝心、よけいな説明がいらないのはありがたい。
「四天王が江戸に着いた後の足取りがわかれば、謎を解く鍵が見つかるやもしれませぬ。すぐに殉死したのか、あとの二人は『そのとき』どこにいたのか。せめて、その行方知れずの中林勝矢が、生きていてくれればよいのですが」
「おれは他のことが気になっておるのじゃ。喜内様よ。千両智恵には遠く及ばぬものの、諸

藩も智恵を振り絞って、公儀の追及をかわそうと躍起になっておるのは間違いない。思いもかけぬ策を用いたのやもしれぬ」

一角は言い、多少、あらたまった口調になる。

「鳥海様、それがしは、みまかられたという志摩守様にも疑問がありまする。これはまだ数之進とも話をしておりませぬゆえ、それがしひとりの考えでござるが……もしや、喜内様こそが真の志摩守様ではなかろうか、と」

藩士たちの畏怖は、友が殉死した際、見事に首を刎ねたという、その心と技だけに向けられているのだろうか。もしかすると、真の藩主であるがゆえ、それを知っているがゆえの畏怖ではないのか。国許で死んだというのは替え玉ではないのか。数之進の裡にも同じ疑問がある。

「わたしも一角と同じことを考えておりました。いかがでございましょうか、鳥海様」

口の重い上役を促した。

「逝去した志摩守が、本物であるかどうかはわからぬ」

左門は言った。

「されど、伊沢喜内が家老の嫡男であるのは間違いない。わしは人見藩とは、浅からぬ縁（えにし）があってな。幼い頃より喜内殿を見知っておるのじゃ」

「なんと」

一角は目を剝いたが、数之進は冷静に受け止める。

「さようでございましたか」

だからこそ、四天王が御算用者に対して疑念を持っているのではないかと言ったとき、左門は否定しようとした。ひとつ明らかになったが、そうなると、別の疑問が浮かんでくる。黙りこんだのをどう思ったのか。

「なんじゃ、二人で意味ありげな目をかわしおって。われらはまた蚊帳の外でございますな、村上様」

一角が杢兵衛を見やった。

「馬鹿を言うでない、わしはわかっておる。気づかぬのは、そのほうだけじゃ」

「では、それがしひとり、蚊帳の外でござるか」

いささか不満げだったものの、一角も弁えている。それ以上、よけいなことは言わなかった。

「殉死のことでございますが」

数之進は考えながら言葉を発する。

「一角が言いましたとおり、ひとつは、幕府への強い訴えがこめられていると思います。人

見藩はほとんど借財もないという優れた藩。それゆえに狙われたのでございましょうが、御老中様も取り潰す気持ちはございますまい。考えているのは、おそらく御家乗っ取り。以前、鳥海様が仰(おっしゃ)られましたように、手下や息のかかった者を潜入させて、『仕込み』をしていたのではないかと思います」

「尾張訛(なま)りの『乗っ取り屋』か」

一角がとうとう潜入者の国名を出した。同役の村井嘉津次も、そのひとりかもしれない。

肥後の焼畑農法と、『使いまわし』の輪作を用いる大和農法。この話が出たとき、嘉津次は急に狼狽えた。さらに変化朝顔のときにも、同じように狼狽えた後、不可解な沈黙を返している。

夕涼みのとき、酔うにつれて飛び交った方言。

喪中であるのに不謹慎と、酒宴を非難した六人は、肥後派。嘉津次たちは尾張派なのではないだろうか。一角が代弁するように告げた。

「言うなれば、肥後派と尾張派よ。そして、尾張派の後ろにいるのは、妖怪じみた御老中様じゃ」

「わたしも同じ考えです。いつの間にか、藩内に、尾張派が巣くってしもうたのやもしれませぬ。もちろん、まだ尾張派とは言い切れませぬが、『交ざり者』に気づいたときにはすで

に手遅れ。殉死という壮絶な手段を用いるしか策がなかったとも考えられます。また話を戻しますが」

どうしても頭から離れない。

「殉死を選んだひとつ目の理由は、幕府への訴えであろうと思いますが、二つ目として、敵の目を引きつけておくため、ということは考えられませぬか」

四天王の二人、ひとりは殉死に見えるような死に様、ひとりは行方知れず。藩邸で殉死したひとりとは違い、不審が残る。

「重臣や藩士の目を殉死に引きつけておき、その間に、残る二人が志摩守の密命をはたした、と？」

左門の目が鋭く光った。

「はい」

数之進は頷いて、考えを言葉にする。

「鳥海様と人見藩の間に、浅からぬ縁があるとなれば、四天王は御算用者に対して、ある程度の信頼を置いていたと思います。そうなりますと、なぜ、お屋敷に駆けこまなかったのかという疑問がますます強くなるのです」

「なるほど。腹を切るより、まずは駆けこむであろうな」

それで、と、一角が先を促した。また中途半端にやめられるのはご免蒙りたいと思っているのかもしれない。

「切腹に、なにか他の意味、そう、密命をはたすための策として、これを用いたのであれば、得心できます。あらかじめ鳥海様に使いを送り、藩邸に駆けつける時を見計らって、腹を切る。残る二人は、なにかをするために別行動を取っていたのではないでしょうか。それを慌てて阻止しようとした何者かによって命を絶たれた、とも考えられます」

「ふぅむ」

左門と李兵衛は、どちらからともなく顔を見合わせた。鋭い読みをする数之進に驚きながらも、賞賛の眼差しを向けている。しかし、これはあくまでも推測の域を出ていない話である。

「亀戸村の百姓、平助夫婦の方はいかがでしょうか」

今度は過日の襲撃騒動を口にした。一角曰く『つけこみ男』の平助は、いかにも千両智恵に縋るようなふりをして、相談に訪れている。黒幕は老中だが、平助はおそらくなにも知らないだろう。

「われらが仕留めた刺客には、尾張訛りがあったと言うていたが」

左門が予想どおりの答えを返した。最後の部分に、訛りにとらわれてはならぬという、声

なき声がこめられているようにも感じられる。

「すでにお聞き及びかもしれませんが、杉崎春馬が四兵衛店を訪ねて来た由。彼の者は尾張柳生家のもと門弟。形だけの破門でございますが、杉崎殿が姿を現したことも気になっているのです。あるいは……知らせに来てくれたのやもしれぬと思いまして」

「買いかぶりすぎじゃ」

一角が即座に否定する。

「宣戦布告に来たのやもしれぬ。妙に親しくなってしもうた分、やりにくいのであろうさ。これから襲うゆえ、宜しくとな、律儀に告げに来たのやもしれぬぞ」

笑いを含んだ言葉に、数之進もつられて笑った。暗くなりがちな話を、明るくする名人かもしれない。

「そういえば、明日は、雑司ヶ谷に出向くとか」

左門が話を変える。上役への文に、雑司ヶ谷の〈岩田屋〉の植木職人、清治郎のことも記しておいた。むろん清治郎にも使いを送り、明日のことは知らせてある。

「そのつもりでおります。頼まれた件については、いまだ閃いておらぬのですが、朝顔を見れば、なにか浮かぶやもしれぬと思いまして」

「鳥海様もいかがでござるか」

一角が粋な誘いを提案する。

「冨美殿に声をお掛けするのが、宜しかろうと存じまする。『男心と梅雨の空』なる呪(のろ)いの言葉に、だいぶお心を悩ませておられますからな。ささ、思い立ったが吉日。見れば、向かいの家もまだ起きている様子」

土間に降り、戸を開けて、明かりが点いているのを確かめた。立ちあがろうとしない上役を、再度、一角が促した。

「さあ、鳥海様」

「されど、このような時刻に」

などと言いつつ、満更ではない顔で左門も腰をあげる。

梅雨が終わって晴れ間が覗くかどうか。

左門の照れたような顔は、少年のように輝いていた。

# 第四章　変化朝顔

## 一

翌日は、鬱陶しい梅雨が終わったかのような晴天に恵まれた。

「まあ、ほんに珍しい朝顔ばかりでございますね」

天気以上に、冨美は、晴れやかな顔をしている。伊兵衛が三紗にでも贈ったのか、近頃は男の間でも流行りの日傘を持ち、仲睦まじげに左門と二人で鉢植えの朝顔を眺めていた。

清治郎が営む〈岩田屋〉は、雑司ヶ谷鬼子母神にほど近い雑司ヶ谷村の一郭にある。周囲はほとんどが畑地と百姓町であり、緑が多いため、人家が密集している神田近辺よりも涼しく感じられる。

「姉様は大丈夫であろうか」

数之進はつい友に囁いていた。家に杉崎春馬が来るかもしれないと思っているのだろう、

三紗は珍しく同道していない。三紗が来ないとなれば、伊兵衛も動かないため、四人だけの朝顔見物となっていた。

「案ずるでない、親父殿と村上様が張りついておる。杉崎春馬が来れば、三紗殿は引き止めるだろうが、ま、大丈夫であろうさ。さよう、春馬の見張り役は三紗殿、三紗殿の見張り役は親父殿と村上様よ」

「姉上の場合は過ぎた相手ゆえ、これはこれで悩むが、姉様が惚れるのは、どういうわけか、面倒な男ばかりだ。人見藩の『交ざり者』が、尾張藩、あるいは尾張柳生家だとすれば、よけい厄介なことになりかねぬ。いずれにしても、頭の痛いことよ」

「おまえはそうやって悩むことにより、心のどこかで平安を覚えるという厄介な気質。悩み事がなければ、逆に悩むのではあるまいかと、おれは近頃、思うたりするがな。世の中、なるようになるさ。今までもそうだったではないか」

「うむ」

なにげなく目を向けた先に、冨美と左門がいた。その視線をどう思ったのか。

「おまえもお世津を誘えばよかったではないか。何度も言うたのに、生返事ばかりだったゆえ、強く言わなんだが、要らぬ気遣いは無用ぞ。おまえがお世津を誘えば、おれもだれかを誘うたものを」

「気遣いではない、気が乗らなかっただけの話よ」
「ほほう、その理由やいかに」
「たいしたことではない」
「おれには隠し事はするな。おまえはお世津に岡場所通いのことを正直に言うてしもうた。されど、別に所帯を持っているわけではなし、謝る必要もない、責められる筋合いでもこれまたない。だが、胸はちくちくと痛む。お世津の店を訪ねてみようか、どうしようかと、まあ、こんなところであろうさ」
流石は一角、恋道ならまかせておけとばかりに、数之進の憂悶を言い当てた。
「おぬしにはかなわぬ」
「朝顔の鉢植えを手土産に、ご機嫌伺いをするがよい。それにしても、出入りの多い見世じゃ。さいぜんから、ひっきりなしに人が訪ねて来るではないか」
「さよう。しかも、なぜか侍が多い」
〈岩田屋〉は相当な広さを有しており、前庭には、所狭しと朝顔の鉢が並んでいる。平屋の母屋は簡素だが、竹羽目の壁や虫籠窓といった造りが、素朴でありながら、どこか垢抜けた佇まいを見せていた。並んでいる鉢は、大切に葦簀で囲われており、屋根のように簾で覆って真夏の強い陽射しを防いでいる。夏の花とはいえ、やはり、暑さはほどほどにというこ

となのかもしれない。

「清治郎はなにをしておるのじゃ。われらを待たせたままではないか」

「怒るな。忙しいのであろう」

話している間も、次から次へと朝顔の鉢が運びこまれて来る。荷車に乗せて運んで来るのは、下級武士といった風情の者たちだった。

「生田様、早乙女様」

清治郎が汗を拭きふき、駆け寄って来る。

「お相手しなければならぬものを申しわけありません。生田様からの使いが来たときに、『朝顔合せ』を思いつきまして、他の植木屋や下谷の御徒屋敷に声を掛けたのです。中庭には野点のご用意をいたしました。料理屋のようにはいきませんが、酒肴も揃えてございます。どうぞ、こちらへ」

「気が利きすぎると思えなくもない」

一角がにやりと唇をゆがめる。

「〈岩田屋〉の裏に、〈北川〉の伊兵衛ありと思うたが、どうじゃ」

「そのとおりです」

清治郎は笑いながら認めた。

「ご隠居さんが、料理の仕出しを頼む店から、酒や茶の銘柄まで、指南してくださいました。ついでに引札も撒けと言われましたので、そのようにいたしました。思っていた以上に人が集まりまして、わたしも驚いております」

先に立った清治郎に、二人も続いた。冨美と左門にも声を掛けようとしたが、一角に素早く腕を引かれる。

「馬に蹴られたくはなかろう」

「確かに」

答えて、数之進は清治郎を呼び止めた。

「野点や酒肴はあとでよい。朝顔は素人ゆえ、指南してもらえぬか」

「さよう。指南を受けているうちに、我が友の千両智恵が、ぴかりと閃くやもしれぬ。朝顔を萎れさせずに、せめて、一日、長持ちさせる法であったか。此度の相談事は今までの中でも難題ゆえ、流石に頭を悩ませておるのじゃ」

「やはり、無理でしょうか」

早くも落胆しかけた清治郎を、数之進は元気づける。

「諦めてはならぬ。諦めれば、そこですべては終わってしまうからな。それよりも、朝顔だ。姉上ではないが、本当に珍しいものばかりよ」

並んでいる鉢のひとつを指した。

「これは、まるで花が撫子のようではないか。これも朝顔なのか」

「もちろんでございます。他の花も育てておりますが、今日は『朝顔合せ』。前庭に並べてありますのは、すべて朝顔でございます。生田様が示された鉢は、仰ったとおり、撫子咲きです。その隣が、縮緬咲き、こちらは二重咲きでございまして」

「これは蔓がないぞ」

一角が別の鉢を見て、声をあげる。

「蔓がないのに、朝顔なのか」

「はい。変化朝顔でございます。そもそも朝顔と言いますのは、はじめは淡藍一色でございました」

清治郎は淡々と告げた。寛文年間（一六六一～七三）に突如、白花が出現。これに前後して、淡紫、紺、紅色などが次々に作られた。鉢栽培が盛んになったのは、寛政年間（一七八九～一八〇一）の頃である。

「変化朝顔も、その頃からあるのか」

数之進は興味津々、持ち前の好奇心を強く刺激されている。これがあるからこそ、閃きが訪れるのだ。わくわくしながら、次の言葉を待っている。

「あったと思いますが、今ほど種類は豊富ではなかったかもしれません。珍花、奇花が見られるようになったのは、ここ二、三年でございます」

着物、日傘、小間物、そして、花木と、江戸ではなんにでも流行があるが、この頃、朝顔にはまさに第一次とも言うべき流行の時が訪れていた。変化朝顔の鉢植えが、いったい、どれぐらいの値で取り引きされるのか。数之進はその相場を知らない。

「元祖はいないのか、変化朝顔を生み出した祖はいないのか」

問いかける声が掠れている。わけのわからない予感があった。清治郎の頼み事に関わるものなのか、あるいは別のことなのか。こめかみのあたりに鈍い疼きがある。

「元祖は尾張藩士ではないかと言われております」

清治郎の答えが、ぴりりとこめかみに響いた。一角も当然、なにかを感じたに違いない。

「ほう、尾張藩士か」

意味ありげに呟き、促した。

「今少し詳しい話を聞かせてほしいものよ」

「お名前は三村陳富様、号を森軒と申されます。花木作りに長けていた方のようで、陪臣の身でありながら、時の将軍、吉宗公より三度も褒美を賜ったとか」

陳富は、非常に鋭い観察力を持っていたらしく、朝顔の茎や葉、花のつき方、花色の変化、

大きさ、開花期、種子の色形などを緻密に書き記した。こういった功績を買われたのか、尾張藩の薬園を任されるという、栄誉も賜っている。吉宗が尾張藩に送ったとされる朝鮮人参七本の栽培を任されたのは当然の成り行きだったかもしれない。

「努力の人だったのでしょう。見事、朝鮮人参が採れるようになり、このときに先程、申しましたご褒美を公方様より頂戴したようでございます」

「では、今、変化朝顔がもっとも盛んなのは、尾張か」

数之進の問いかけに、清治郎は小さく首を振る。

「各地で栽培されておりますが、特に盛んなのは、やはり、尾張と肥後でございましょうか」

「おお、肥後の名が出たぞ」

一角もいつになく興奮していた。数之進の紅潮した頬を見て、気分が高揚したのかもしれない。数之進が口を開く前に、問いかけを発した。

「ここに肥後の変化朝顔はあるか」

「ございます」

清治郎は、少し離れた場所に置いた朝顔の一群を示した。〈富井屋（とみい）〉という札が掛けられた鉢に目を向ける。

「小鉢本蔓作りという肥後ならではの独特の仕立てでございます。行儀作りとも言いまして、本蔓を摘むことをしません。草丈を鉢の三、四倍にとどめ、第一の花を草丈の四分の一ほどの高さに咲かせるのです」

「なるほど、小鉢というだけあって、他の鉢よりも小ぶりだな」

数之進の言葉を、清治郎が受ける。

「鉢と草姿、そして、花との調和を非常に大切にします。それは他の鉢でも同じですが、肥後の朝顔は特にそういった雰囲気が強いようで」

「代々、こういった変わり花、出物と聞いた覚えがあるが、変化朝顔が咲くのか」

汗を拭くのも忘れて、数之進は見入っている。いつの間にか姿を消した一角が、いつの間にか戻って来て、盆に載せた湯飲みを差し出した。

「この暑さじゃ。まずは茶で喉を潤せ」

「すまぬ」

「気の利かぬことで、申し訳ありません。今のお訊ねですが、変化朝顔は代々咲くものではございません。どんなに変わった花が咲いた株でも、冬になれば、枯れて消滅いたします」

「種が残るではないか。それを植えれば、また同じ花が咲くように思うが」

数之進の語尾が曖昧に消える。咲かないと清治郎が表情で答えていた。

「そうはいかないのが世の常。なぜかはわかりませんが、奇花には種ができないのです」
「では、どの種から生まれるのだ。こうやって、今も変化朝顔があるということはだ。種があるということであろう」
問いかけるのは数之進のみ。一角は持って来た肥後団扇を使いながら、茶を飲み、菓子を食べている。
「はい。奇花を生み出した親株、つまり、普通咲きの朝顔の種をまた植えるのです。複数育てた中から、ごく少数の珍花、奇花が得られるということでございまして、なかなか思うようにはいきません」
「親株の朝顔、親株の種、そこからごく少数の珍花や奇花」
繰り返しつつ、またしても、ちりちりとした疼きを覚えていた。なにかに繋がりそうなのだが、そのなにかがわからない。
「一番、珍しい朝顔はどれじゃ」
一角が訊いた。

## 二

「黄色い朝顔でございましょう。朝顔においては、黄色い花を生み出すことは無理とされて

おります。言うなれば幻の花。わたしもまだ見たことがありません」

清治郎の答えの一部が、食いこむように焼きついた。

「幻の花か」

と、数之進は独り言のように呟いた。懸命に答えを探そうとしている。肥後でも作られている朝顔、人見藩には朝顔屋敷と呼ばれる抱屋敷がある、変化朝顔の話をしたとき、同役の嘉津次はなぜ狼狽えたのか。それらの事柄が、ぐるぐると頭をまわっていた。

「どこかで、それが作られたという話を聞いたことはないか」

疑問を問いかけに変える。

「風の噂で一度だけ、耳にした覚えがございます。ですが、だれかが見たとか見ないとかという、その程度の話でございました」

確かに黄色い朝顔は無理だとしても、珍花、奇花は毎年のように生まれる。数之進はいたって俗っぽい疑問を投げた。

「変化朝顔は高値で取り引きされるのか」

「はい」

職人然としている清治郎の顔が、このときだけ商人のような表情になった。

「生田様も、十四、五年ほど前に起きたカラタチバナの騒動については、ご存じのことと思

います」

手短に説明した。カラタチバナは、関東以西の山地の林床に自生する常緑の小低木である。葉は大きく厚く、夏に小枝の先に花をつけ、秋に赤く熟する木だ。時として白実や黄実のものもでき、一年以上も実をつけたままの姿を保つことから、子孫繁栄の吉祥樹として喜ばれた。

さして変哲もないこの小さな木が、寛政九年（一七九七）前後の数年、上方を皮切りに伊勢、志摩、三河、遠江、駿河、そして、関八州でも爆発的な人気を博して、奇品には百両、二百両の高値がつくという異常事態が生じたのである。

この流行はすべて鉢植えとし、葉の形や斑模様の変異を楽しんだ。特に実生すると次々に変異株を生ずる『七化』や『八幡化』という品種が出てからは、カラタチバナの別名を『百両金』と名付けるほどになり、一株千両を超える鉢まで出たというから驚くしかない。

「一株、千両だと!?」

茶を飲んでいた一角が、危うく噎せ返りそうになった。数之進は背中を軽く叩いてやる。

「金に不自由したことのないおぬしでも、やはり、驚かずにはいられぬか」

「あたりまえではないか。カラタチバナなぞ、つまらぬ木じゃ。ご多分に洩れず親父殿もはまったゆえ、おれはこの目で『八幡化』とやらを見たことがあるから、ようわかる。すでに

早乙女家へ養子として入っていたが、この『八幡化』のお披露目で呼ばれたのじゃ」

腕を組み、悔しげな言葉が出た。

「そうか、狸爺め。千両もの大金を注ぎ込んでいたのか」

現物を見ているからこその驚きだったわけである。今度は清治郎が、興味津々といった顔つきになる。

「早乙女様。その『八幡化』は、今、どちらに？」

「さあて、あの騒動はどこへやら、庭の片隅にでも放り出されているのではあるまいか。まだ残骸があるやもしれぬな。親父殿に訊いてみろ」

「そうさせていただきます」

「ひとつ、訊ねたいことがあるのだが」

数之進は下級武士らしき男を目で指した。

「先程から頻々と、彼の者たちが訪れておる。どこかの家中の者なのか」

「下谷の御徒屋敷に住む御徒の方々です。内職に朝顔作りをしておられまして、これが職人顔負けの腕前なのです。本日はよい機会ではないかと思い、お声を掛けさせていただきました」

「なるほど、下谷の下級武士か。そういえば、五年ほど前に大火があったな」

数之進は記憶を探った。文化三年（一八〇六）、下谷御徒町において牛町火事と呼ばれる大火が起きた。町のあちこちに空き地ができ、植木屋がそこで朝顔を作り出したところ、さまざまな花を咲かせたとされる。

「火事で燃えた後の土が、朝顔には適していたのやもしれぬ。禍転じて福となす、とは、まさに下谷の御徒のことやもしれぬな」

ひととおり話が済み、そこそこ朝顔通になっていた。清治郎は期待に満ちた眼差しを向けている。

「いかがでございますか」

「すまぬ。まだ浮かばぬのだ」

「そう急かすでない」

一角が仕草で「もう行ってよい」と告げた。

「われらは小腹が空いたゆえ、馳走になる」

「それでは、どうぞ、中庭の方においでください。『朝顔合せ』の支度が整いましたら、呼びに参ります。生田様と早乙女様にも、どれが優れているか、選んでいただきたく思いますので」

「ぼんやり見惚れているわけにはいかぬな。どのような基準で選ぶのだ。やはり、花の大き

さや美しさを見るのか」

数之進の言葉に、清治郎は答える。

「変化朝顔の場合は、花の大小や整った形を求めるのではなく、いかに変わった花を咲かせているかを競い合うのです。候補になる鉢はてまえどもが選びますので、その中から選んでいただければと思います。では、またのちほど」

忙しげに母屋の方へ行った清治郎を、二人は見るともなしに見送っている。カラタチバナの変異株には、信じられないほどの高値がついた。もしかすると、変化朝顔もそうなのだろうか。

「この鉢の値は、言うていかなんだな」

数之進は、葦簀や簾で大切に囲われた朝顔の鉢に視線を落とした。訊いても曖昧にはぐらかされそうな気がしたため、敢えて訊かなかったのだが、一角も同じような気持ちだったに違いない。

「うむ。流石に千両とはいくまいが、相当な高値なのやもしれぬ。普段は邪魔なだけだが、こういうときは、狸爺がいると役立つな。カラタチバナを買い求めたほどじゃ。変化朝顔の鉢も、すでにいくつか持っているやもしれぬ」

珍しく伊兵衛がいないことを悔やんだ。確かにそれぞれの値を知るには、隠居に訊くのが

一番であろう。尾張と肥後の鉢植えは、どちらがよく売れるのか。どれほどの値で取り引きされているのか。二人は話しながら、中庭の休み処に足を向けた。

「肥後にも変化朝顔はあると、清治郎さんは言うていたがな。藩邸の夕涼みの折には、変化した鉢は見当たらなかった。同役に問いかけてみたのだが、昨年は親株の種が取れなかったとか。夕顔には変化が出にくいのであろうか」

説明しがたいなにかがくすぶっている。尾張と肥後、朝顔栽培が盛んな場所が、そのまま藩内の対立のように思えなくもない。もっとも、まだ同役の村井嘉津次たちが尾張派と決まったわけではないのだが……。

「人見藩ではまだ変化朝顔は作られておらぬのではあるまいか。それを口にするのは恥と思い、種が取れなかったなどとごまかしたとも考えられる」

「あるいは、その逆か」

口をついて出た疑問に、一角が問いかけを返した。

「逆とは？」

「世にも珍しい変わり花が出たゆえ、知られてはならぬと思い、偽りを述べた。御算用者や尾張派、あ、これは仮の呼び名だが、尾張派の者たちに調べられてはならぬと……待てよ。村井殿は尾張派か。そうなると、今の考えはあてはまらぬな」

「聞いているだけで迷路にはまりこみそうじゃ。とにかく、ひと休みしようではないか」

一角は、休み処の縁台に数之進を座らせた。考え始めると、周囲が見えなくなることをよく知っている。

「腹は空いておらぬか。稲荷寿司、蕎麦、団子に心太と、なんでも揃うておるぞ。酒はどうじゃ」

「まだ午前ゆえ、酒は要らぬ。そうだな。心太でも食べるか」

「まさか女子のように、蜜で、などと言うわけではなかろうな」

甘いものには目がない数之進を、知っているがゆえの言葉が出た。笑いながらであるのは言うまでもない。

「その『まさか』だ。すまぬ」

「やれやれ、大の男が心太を蜜で食すとは」

苦笑して、母屋の方に歩いて行った。数之進は目の端に、野点を楽しむ冨美と左門をとらえている。が、二人きりになれるのは、めったにない機会。邪魔をしてはならぬと、他人のような顔をしていた。

殉死か。

華やいだ場にいるのに、いや、だからこそだろうか。藩邸で覚悟の死を遂げた若者のこと

が浮かんだ。盟友の首を刎ねた伊沢喜内は、どんな気持ちでいるのだろう。おそらく亡き志摩守の密命を受けたはずだが、それはどんな命令だったのか。

「そら、蜜をかけた心太じゃ」

戻って来た一角から、小鉢を受け取る。つるりとした喉ごしと、蜜の甘さが優しく喉に染みた。死んでしまえば、もうこの旨さを味わうこともできない。あたりまえなのだが、それがやけに……哀しかった。

喜内様に対する藩士たちの畏怖の念は、やはり、盟友の首を刎ねたことに対するものなのだろうか。

幕府に対する凄絶な血の訴えは、『肥後もっこす』の心をも動かしたであろうことは想像するに難くない。藩士を鼓舞して、蜂起を促す意味もあったのではないだろうか。問題は、伊沢喜内の器量が頭として相応しいかどうかという点にある。

わたしは名君の器であると見た。

そうなると、そこでまたあらたな疑問が湧いてくる。喜内こそが志摩守ではないのかという推測は、幼少の頃より喜内を見知っているという左門の言葉によって否定された。しかし、数之進の胸には、もうひとつの消えない疑問がある。

「おぬしはどうだ」

さりげなく重い話題を振った。

「そういう場面になったとき、わたしの首を刎ねられるか」

「仮の話はしとうない」

「では、こういう仮の話はどうだ。もしかしたら、喜内様は、亡き志摩守様の弟君、長良頼之様なのではあるまいか」

「なに？」

一角は小さな声をあげ、しばし無言で数之進を見つめる。志摩守の逝去が真実であるとすれば、次に目が向くのは新藩主の頼之だ。万が一のことを考えて江戸家老に預け、藩主教育をしてもらいながら、そのときに備える。ありえないことではないが、すぐには受け入れがたかったのかもしれない。

「されど」

反論しようとした一角を早口で遮る。

「わかっている。鳥海様は喜内様の幼い頃についても、ご存じという話であった。されど、もっと幼い頃、そう、たとえば生まれたばかりの頃に、喜内様と弟君の長良頼之様をすり替えたとすれば、鳥海様でもわからぬのではあるまいか」

「ふぅむ、なんらかの意図を持って、新藩主である頼之様の父君、昨年、亡くなられたとい

う大殿だが、この大殿と御家老が示し合わせて、すり替えたとすれば」

ありえぬことではないやもしれぬ。

一角の囁きに小さく頷き返した。そう考えると、藩士たちの静かな畏敬の念も得心できる。次期藩主への期待がそのまま堅い結束に変わるのは必至。『交ざり者』を排除すべく、肥後派は死に物狂いで戦いに臨むだろう。

「喜内様のためにも、行方知れずの四天王のひとりが、生きていてくれることを祈るばかりだ」

数之進は最後の心太を口に入れる。

「あ！」

刹那、あることが閃いた。

「閃いたのか」

一角が素早く読み取る。

「うむ」

「にやにやするでない。目がぴかりと輝いたゆえ、すぐにわかったわ。教えろ。なにをどうすれば、朝顔を萎れさせぬことができるのじゃ」

「試してみてからだ。今は言えぬ」

「ちっ、もったいつけおって」
「うまくいくかどうかわからぬゆえ……待て、あれは」
数之進は慌てて目を逸らした。同役の村井嘉津次が、勘定方の者たちと中庭に姿を見せたのである。

三

「だれじゃ」
腰を浮かせかけた一角を、短く制した。
「見るな」
背中を向けて、顔を見られないようにする。挨拶をしてもいいのだが、どうもそんな雰囲気には見えなかった。とっさに顔を隠したが、一角はちらちらと様子を窺っている。
「行ったぞ」
「そうか」
「今のはだれじゃ。どこかで見たことのあるような顔だが」
「勘定方の同役だ。なにをしに来たのであろうな。朝顔見物であろうか」
「人見藩の藩士が姿を見せたとなれば仕方ない。不粋を承知で鳥海様にお知らせするか。お

れが行く。おまえはここを動くな。鳥海様の配下が四人、紛れ込んでおるが、この人混みでは思うように動けぬゆえ」

「配下の者たちも来ているのか」

思わず周囲を見まわしていた。ここに来るまでの間、護衛役たちの気配はまったく感じていない。

「あたりまえではないか。刺客にとっては絶好の機会ぞ。密かに近づかれて、ぶすりとやられたらそれで終わりじゃ。杉崎春馬のこともある。今のところ『柳生五人組』らしき者たちの顔は見えぬが、油断してはならぬぞ」

「わかった」

ちらりと見ただけだが、嘉津次は紐で綴じた文書のような束を持っていた。緊迫した表情が、朝顔見物ではないことを告げていたように思える。ここを動くなと言われても、おとなしく座っていられない。数之進は立ちあがり、周囲に目を配りながら、前庭の方に戻った。なにをしているのだろう。

嘉津次は文書を広げて、朝顔の鉢植えを見やっている。他の同役たちも似たようなことをやっていた。みな気むずかしい顔をして、時折、ひそかに言葉を交わし合っている。真実を知るには、意表を衝くのが得策か。嘉津次がひとりになったのを見計らい、数之進は声を掛

けた。
「村井殿」
「え？」
嘉津次は振り向き、大きく目を見開いた。
「こ、これは、生田殿」
驚きのあまり、鉢植えに躓きかける。それを支えようとした数之進もまた転びそうになった。
「危ない」
いつの間にか後ろにいた一角が、二人を支えて事無きを得る。数之進と嘉津次は、顔を見合わせて、苦笑した。
村井殿は本当に、わたしに似ている。
そう思いながらも、素早く抱えていた文書を盗み見た。視線を感じたのだろう。嘉津次は急いで閉じたが、一瞬、花らしき絵が目の端をよぎる。変化朝顔だと思った。
「奇遇でござるな、生田殿。このような場所でお目にかかるとは、思うてもおりませなんだ。そういえば、今日は非番でござったな」
嘉津次は落ち着きを取り戻している。

「はい。ここは知り合いが営む見世でございます。『朝顔合せ』を催すからと誘われました次第。姉が見たいと申しましたので」

「ほほう、姉君でござるか。是非、お目にかかりたいものでござるな。どちらにおいでになるのか」

嘘だと思ったのか、はたまた興味が湧いたのか。嘉津次は姿を探すように目を走らせている。一角がすかさず言った。

「姉君には連れがおりましてな。われらは馬に蹴られるのを承知の供でござる。のちほど、さりげなくお教えしますゆえ、邪魔はなさらぬのが宜しかろうと」

「さようか」

「この植木屋は、我が藩にも出入りしているのですか」

数之進は率直に訊いた。

「いや、出入りしておらぬ」

「それでは、どのような御用向きで、おいでになられたのですか」

人見藩の全容は、今ひとつ、つかめていない。肥後派と尾張派らしき二派の対立があるのは確かだろうが、本当に尾張派であるのかまでは、断定できなかった。殉死騒動が真実とわかった以上、遠まわしに探りを入れている余裕はない。

「生田殿もご存じと思うが、朝顔は春播きが、今頃、花を咲かせ申す。此度は参加できませなんだが、我が藩も夏播きの『朝顔合せ』に、出展できぬものかと思いましてな。様子を見に来た次第でござる」

「その図譜は朝顔を写したものですか」

これまた率直に、持っている文書を目で指した。嘘が苦手な嘉津次は、困ったような顔をしたが、

「いかにも朝顔でござる」

図譜を広げてみせた。細密な変化朝顔が、どの丁にも描かれている。葉や茎、そして、花も、奇妙な形をしたものばかりだ。探すのは大変だと思ったのか、

「似た朝顔が、出展されておらぬかと思うてな」

嘉津次は数之進に意見を求めた。

「いかがでござるか、ここにござったか。そっくりではなくても、似たような朝顔を見ておられぬか」

「我が藩独特の小鉢本蔓作りですね。先程、向こうにこの手の作り方をしてある鉢がありました。されど、葉や花の形は、いささか異なっていたように思います」

「村井さん」

他の同役が来て、なにか話しかけようとしたが、その前に数之進に気づいた。
「お、なんだ、生田殿もおいでござったか。いや、われらは……」
「すでに話した」
嘉津次が素早く遮る。下手な言い訳をされて、辻褄が合わなくなるのはまずいとでも思ったのかもしれない。嘉津次は顎で数之進が示したあたりを指した。
「あったか」
「仕立ては、小鉢本蔓作りだが、ちと違うな。そら、あれは花が桔梗のような形をしていたではないか」
「うむ」
と答えた嘉津次は、数之進を気にしているように思えた。が、逆に思わせぶりな態度を取ることによって、いかにも『あれ』という部分を強調しているようにも感じられた。探しものは、桔梗のような花を持つ変化朝顔なのだろうか。
「されど、この鉢を仕立てた植木屋には、別の鉢があるやもしれぬ。〈富井屋〉という屋号の札が立っていたが、我が藩に出入りしている見世ではない。熊本藩か薩摩藩に出入りしている植木屋かもしれぬが、一度、見世を覗いてみたいものじゃ」
同役の言葉に、

「植木屋か」

ふたたび嘉津次の目が数之進に向いた。

「〈富井屋〉とやらも、ここに来ているのでござるか」

「おそらく来ていると思います。どの鉢でございますか。念のために、確かめさせていただきたいのですが」

「あちらじゃ」

同役の者が先に立ち、嘉津次、そして、数之進と一角が続いた。目はつい図譜に向いている。嘉津次が見せた絵は、見せても差し支えない絵だったのではないだろうか。ある丁に挟まれたままの左手の指が、数之進は気になっていた。

酔わせるしかないか。

あまり使いたくない手だが、酔えば、本人の意志に反して、図譜がその手から離れるということもあり得る。人見藩の謎を解く鍵のひとつが、隠されているかもしれない図譜。奪い取りたくなる衝動をかろうじて抑えた。

「これよ」

同役が示したのは、先程、数之進が清治郎の指南を受けた鉢である。

「ざっと見たが、小鉢本蔓作りは、あまり多くないようじゃ。普通の仕立ての鉢であれば、

桔梗のような花をしたものもあるがの」
「もう一度、探してみよう」
「わしもそうするが……村井さん」
同役の男は、物言いたげな目を向けた。
「なんじゃ」
嘉津次が怪訝そうに眉を寄せる。
「いや、近頃、おぬしの様子がおかしいと、みなが言うておるゆえ、あ、いやいや、なんでもない。気にせんでくれ。中庭の休み処には酒も用意されておった。落ち合うのは、休み処にしようぞ」
舌なめずりせんばかりにして、同役は離れて行った。意味ありげな言葉が気になったのだろう、嘉津次は首をひねっていたが、酒には目がない男。すぐに笑みが湧いた。
「楽しみなことよ」
「酒は井戸水に浸けて、よく冷やしてあるようです」
数之進は餌を投げ、大胆な頼み事を口にする。
「先程も何枚か朝顔の絵を見せていただきましたが、その図譜をすべて拝見させてはいただけませぬか」

似た気質なればこその真っ向勝負。周囲に人がいないのを確かめたうえであるのは言うまでもない。

「え」

嘉津次は吃驚したように見やる。尾張の方言をわざとらしいほどに使ったのは、尾張派であることを示すためなのか。背後にいるのは、尾張藩なのか。尾張藩が老中と手を組み、九州の臍とも言える人見藩を乗っ取る謀なのか。あるいは、尾張藩の仕業と思わせるための策なのか。

しばし沈黙の後、

「それがしもお訊ねいたしたき儀がござる」

嘉津次はごくりと唾を呑み、告げる。

「生田殿は、幕府御算用者なのでござるか」

返って来たのは、やはり、真っ向勝負だった。後ろにいた一角が、「よせ」というように袖を引く。嘉津次の眸が揺れていた、数之進の心も揺れている。まるで鏡に映る己を見ているかのよう。嘉津次は逆意方だろうと思っているのに、心のどこかで味方かもしれないとも思っている。

「そうです」

数之進は懸けた、自分に似ている男に。

「……」

嘉津次は落ち着きなく視線を彷徨わせている。はっと息を呑んだ瞬間、なぜか大きく身震いした。視線を追って後ろを見た数之進は、男物と思われる大きな日傘を見たが、持ち主の姿は隠れてしまい、見定められない。

「お知り合いでもおられましたか」

「い、いや、なんでもない。酒じゃ、飲もうではないか。冷えた酒をいやというほどな。馳走になろうぞ」

その声には力がないうえ、すでに悪酔いしたかのごとく、青ざめていた。唇はわななき、暑さのためとは思えない汗が、額から頬を伝って流れ落ちている。くだんの日傘は出入り口の方に移動していた。

今のはだれだ？

数之進は一角と顔を見合わせる。真昼の強い陽射しが照りつけているのに、周囲が暗く翳ったように感じられていた。

## 四

「いや、駕籠など要らぬ、大丈夫でござる」

恐縮する嘉津次を駕籠に乗せ、〈岩田屋〉を出たのは、七つ半（午後五時）頃だろう。勘定方の同役たちは、先に引きあげてしまったため、数之進と一角はいやおうなく嘉津次の供役となっていた。

畦道のような細い道を、護国寺の方に向かって進んでいる。周囲に広がるのは、田畑と植木屋の広々とした緑地帯とあって、昼間の暑さはなりをひそめていた。足下はまだ明るく、提灯なしでも不自由しない。

「うまい具合に酔い潰れてくれたわ」

一角が駕籠を覗きこみ、囁いた。

「図譜を大事に抱えこんでいるが、おれがそっと取りあげてやる。駕籠を停めろ」

「よせ。やはり、盗み見るのは気がひける」

「そんなことを言うている場合か。騒動の大元を一刻も早く探らねばならぬのだぞ。もしかすると、あの図譜には、変化朝顔を生み出す極意が記されておるのやもしれぬ。それを巡る戦いということも考えられるではないか」

「冴えておるな」

「ふふん、五両智恵とて、この程度の考えは浮かぶわ。それにしても、あの日傘の侍。だれだったのであろうな」

駕籠の中の嘉津次を気遣っているのだろう、いっそう声をひそめた。

「侍だったのか」

数之進も囁き声になる。『朝顔合せ』の間中、嘉津次が怯えた相手を探したのだが、日傘を持っていたのは、冨美だけ。二女は左門とともに、ひと足、先に〈岩田屋〉を出たが、二人の背後には、即かず離れずの距離を保ちながら、左門の配下が付いていた。

「刀がちらりと見えた。それにあの足取りは、ただものではない。相当な遣い手であるのは間違いあるまいな」

「尾張派の頭役であろうか。いや、今は逆意方と言うた方がいいやもしれぬが」

「わからぬが、村井殿はあきらかに怯えていた。浴びるように飲んでいたが、酔えなかったのであろうさ。ついつい飲み過ぎてしまい、このざまよ」

と、一角は駕籠を一瞥する。嘉津次が酒好きなのは知っていたが、確かに無茶な飲み方だった。飲み始めたときなどは、手の震えが止まらず、何度も杯の酒をこぼしている。逆意方の黒幕が現れたのを見て、なぜ、あれほどに怖れたのか。

「されど、日傘侍が逆意方の頭役だとすれば、普通はほっとするように思うがな」

数之進は自分にあてはめている。今も左門が後ろにいてくれればと思っていた。配下を信じないわけではないが、やはり、左門とは格の違いを覚えずにいられない。嘉津次は似た気質ゆえ、あの怖れ方が理解できなかった。

「恐怖で人を支配する頭なのかもしれぬ」

一角が言った。

「われらは上役に恵まれているが、上に立つ者がみな鳥海様のようなお方ばかりではない。村井殿はある意味、正直な男なのやもしれぬ」

「正直者だ。わたしと同じで嘘がつけぬ」

「おまえほど頭は切れぬわ。そうよな、せいぜい十両智恵といったところか。おれよりはましだが、まあ、並み程度よ」

一角はしきりに道の前後を気にしていた。互いの顔がわかる程度だった周囲は、徐々に夜の気配が融けて、暗さが増してきている。数之進にとっては苦手な闇の訪れが迫っていた。

「おかしな気配があるのか」

友の様子を見て、不安に襲われている。

「なんでもない。おお、そうじゃ。朝顔の鉢植えのことだが、直接、お世津の家に届けてや

ればよかったではないか。さすれば、明日からまたいつもどおりよ。猫茶屋の話などは、どこかに消えてしもうたものを」

「岡場所通いをごまかすために、朝顔を使うのもな、花が気の毒でならぬ。それに」

消えた言葉を、一角が声に出して、言った。

「まだ気持ちの整理がつかぬ、か」

「うむ。いや、自分でも女々しいとは思うているのだ、早く忘れなければと思うている。されど、そう簡単にはいかぬのが人の心よ。お世津さんの美しい眸を見れば見るほど、思い出してしまうのだ」

忘れられない女。

五瀬という名の姫様は、とうに嫁いでいるだろう。嫁ぎ先の大名家を選んだのは、他ならぬ数之進。幸せになってほしいという、あらん限りの祈りをこめて、御役目をはたした、つもりである。

「そうであるならば、正直に今の気持ちを告げればよい。お世津は水茶屋勤めをしていた女子じゃ。初な素人女よりも話がわかるであろうさ。なにも言わぬのが、一番、よくないと、おれは思うがな」

「そうか？」

「恋道ならまかせておけ、と、進む道を決めねばならぬようだな。おい、駕籠屋。左ではのうて、右の道を行け。武家屋敷ばかりだが、雑木林の道よりも多少はましであろう。少し急いでくれぬか」

一角は言い、小走りになる。少し先の道は右と左に分かれているようだが、すでに闇に沈んでいるため、数之進にはよく見えない。一角が駕籠屋の前に出て、先導役になったときである。

「賊じゃ」

大声で叫んだ。左手の雑木林から、ばらばらと人影が飛び出して来る。十人ほどはいるだろう、駕籠屋は慌てふためいて逃げた。一角は早くも刀を抜き、襲いかかって来たひとりを袈裟懸けに斬りつける。のけぞった男を目の端にとらえつつ、数之進は嘉津次に呼び掛けた。

「村井殿、目を覚ましてください」

「うむぅ」

「早く逃げなければ」

「数之進」

一角が背後に迫った男を、後ろから斬り捨てる。いつ来たのか、左門の配下が駕籠を守るようにして、陣を組んでいた。こちらは総勢七人だが、そのうちの二人は、剣術よりも算盤

が武器という商人侍。数之進は懸命に嘉津次を揺さぶる。
「村井殿、起きてください」
「ん？」
ようやく寝惚け眼を開いた。
「生田殿か。なんじゃ、もう着いた……」
言葉は最後まで続けられない。斬られた賊が、駕籠に倒れかかったのだ。寸前で嘉津次を外に連れ出したが、そこに刀が振り降ろされる。
「させるか」
一角が受け止めて、弾き返した。
「走れ、逃げるのじゃ」
友の大声に押されて、数之進は嘉津次と一緒に走り出した。二本に分かれている道の右に行こうとしたが、
「い、生田殿」
嘉津次が急に腕を摑んだ。雑木林の中から闇が忍び出るようにして、人影が現れたのである。ほとんど黒にしか見えない着流し姿だが、深藍の絽かもしれない。風が高価な香の薫りを運んで来た。

「生田数之進はそれがしでござる」
遅ればせながら、数之進は刀を抜いた。
「この者には、関わりなきことでござるゆえ、見のがしてやっていただきたい」
背中に嘉津次を庇い、青眼に構える。するすると音もなく、男が近づいて来た。抜き放っていた刀が、ぎらりと月の光を弾いた。
来る！
と思った刹那、地を這うようにして、男の刀が伸びた。一瞬のうちに喉もとへ迫っている。とっさに嘉津次が数之進の袴を引いた。喉もとに伸びた刀の切っ先が、獲物をのがしたことに気づき、もう一度、喉もとへと伸びる。
「避けろっ」
一角が男に向かって脇差を投じた。むろん戦いながらであるため、それ以上の手助けは期待できない。それでもわずかな隙ができ、数之進と嘉津次は転がるようにして左右に分かれる。
狙われるのは数之進だと思ったのだが、意外にも男は、嘉津次に忍び寄る。向かって行くというよりは、音もなく忍び寄るという感じだった。まさしく影のような動きで、逆袈裟斬りを放ったが、間一髪、嘉津次はそれを受け止める。

「村井殿」

数之進も勇気を奮い起こして、刀を振り降ろした。相手は素人目にもわかるほどの遣い手、ひとりでは即座に斬り捨てられてしまうだろうが、二人であれば逃げる隙ぐらいは作れるはず。数之進が攻めると同時に、嘉津次が反対側から斬りつける。男は脇差を抜き、二刀流になって嘉津次の斬撃を弾き返した。

「なにをしておるのじゃ、逃げろ」

一角の叫び声が虚しく響いた。逃げようと思っているのだが隙を見出せない。男は右手に刀、左手に脇差を構え、道を塞ぐようにして浅く腰を沈めている。雑木林に駆けこもうとしたが、すかさず刀が動いた。

「うっ」

数之進は後ろにさがったが、右手の甲を浅く斬りつけられる。嘉津次が男の左側にまわり、深く踏みこんだ。垂直に振り降ろした一撃は、だがしかし、軽く撥ねのけられる。軽く返したように見えたが、思いのほか力がこもっていたのかもしれない。嘉津次は体勢を崩して、後ろによろめいた。

男の刀が一閃する。

「ならぬ」

数之進はかろうじて、その刃を止めた。しかし、男の左手の脇差が、喉もとめがけて突き出される。

万事休すか。

と思ったとき、だれかが男の左手を斬りつけた。普通であれば避けられなかったかもしれない。が、男はいち早く後ろに引いた。月明かりの中、雑木林からあらたに幾つかの人影が現れる。

「助太刀いたす」

助けてくれた男の声に憶えがあった。

「杉崎殿」

春馬をはじめとする『柳生五人組』が、刺客に向かって行った。形勢不利と見て取るや、男たちは逃走に転じる。だれかが声を掛けたわけではないのだが、見事なほど統制が取れていた。襲撃が終わった道には、動かない骸（むくろ）が横たわっている。

## 五

「此度の騒動に関わっているのは、尾張藩ではない。尾張柳生家でもなければ、むろん、われらでもない」

春馬は言った。

「人見藩の乗っ取りを企んでおるのは、大和柳生家じゃ」

大和柳生家は、別名、江戸柳生とも言われる将軍家の剣術指南役だ。

長暦二年（一〇三八）、関白藤原頼通が、春日大社に寄進した神戸四箇郷――添上郡大柳生・小柳生・坂原・邑地――のうち、小柳生郷を預かった大膳永家の末裔が、柳生一族の祖であるとされている。

戦国時代になって現れた柳生美作守家厳は、三好長慶に従い、しばしば戦功があったとされるが、この時代、まだ頭角を現すまでには至っていない。

この家厳の後を継いだのが、永家から数えて八代目にあたる石舟斎宗厳だ。新当流を神取新十郎に学び、さらに新陰流において関東一と謳われた上泉伊勢守秀綱に師事して、新陰流の目録を受けている。

文禄三年（一五九四）五月。石舟斎宗厳は徳川家康に招かれて、『無刀取り』をはじめとする剣術の秘法を披露。家臣団の一員となった。家康に剣術指南役を頼まれたが、石舟斎は高齢を理由にして、五男の宗矩を推挙する。

これが江戸柳生の始まりである。

柳生家は度々加増を受け、惣目付という大名家の監視にあたる重職に就いた。のちの大目

付である。さらに大和柳生藩の初代藩主となって、一万石の大名家に列している。定府大名――参勤交代をしないで江戸に常駐する大名であったため、江戸柳生とも呼ばれた。

対する尾張柳生は、石舟斎宗厳の孫、利厳が開いたものである。尾張藩主の徳川義直のもとに出仕して、五百石の禄を与えられたのが始まりだ。

剣禅一味。

剣の極致と禅の極致が一致することに徹した点においては、江戸柳生よりもより禅的と言えるかもしれない。剣の鍛錬に重きを置き、時流に乗らず、あくまでも一兵法家として、愚直に生きる道を選んだ。

「似て非なるものよ」

春馬は、江戸柳生を厳しく非難した。

「江戸柳生は商人大名じゃ。すでに剣を語る資格はない。事実、剣術指南役よりも、大名家としての役割を与えられることが多くなっておる。公方様の日光祭礼奉行のときなどを見れば、あきらかよ。命じられたのは火番としての御役目。もはや、剣術指南役としては用をなさぬ」

嘉津次が足をひねってしまい、歩くのが困難だったため、一番近くの船宿で一夜を明かすことにしたのである。斃された刺客の中には、まだ息のある者もいたが、亡骸も含めて、後

始末は左門の配下にまかせていた。隣室で寝む嘉津次を気遣いながら、数之進と一角、そして、春馬を加えた三人の密談になっている。

「そして、江戸柳生は人見藩の乗っ取りに名乗りをあげた、か」

数之進の呟きを、一角が継いだ。

「古い話になるやもしれぬが、宗矩殿は諸藩のお取り潰しに深く関わっていたとされておる。十兵衛三厳殿が手先となって動いたという話は眉唾ものだがな。秀忠公がみまかられた寛永九年（一六三二）に、宗矩殿は惣目付を仰せつかっておる。お取り潰しの功績を買われたからであろう」

二代将軍秀忠時代に、取り潰しに遭った大名は、外様大名二十一家、譜代大名十四家に達した。諸藩の取り潰しや転封は幕府の体制固めの基本方針であったといえる。そういった中、謎めいた行動を取った柳生十兵衛。

他に訊かなければならない話があるのに、数之進は好奇心を抑えられない。一晩に二度の襲撃はあるまいという安心感も手伝い、問いかけていた。

「それでは、十兵衛殿は、なぜ、江戸から姿を消されたのであろう。家光公のご勘気を蒙ったというのが通説だが」

「家光公は剣術の稽古に、非常に熱心だった」

春馬が答える。

「奨励するばかりでなく、ご自身も宗矩殿より指南を受けられた。その稽古相手になったのが、十兵衛殿よ。年も近かったゆえ、互いに刺激を受けたのであろうさ。しかし、どちらかが傷つくやもしれぬほどに、激しい稽古であったとか。宗矩殿は、それをご懸念なされたのであろう。謎と言われている時期、十兵衛殿は柳生の里におられた」

口調は丁寧だが、顔には冷笑が浮かびあがっていた。数之進はまたしても訊かずにいられない。

「宗矩殿は、江戸柳生の礎（いしずえ）を築かれたお方。杉崎殿は商人大名と申されましたが、商人侍のわたしなどから見ますと、剣術だけで家を守（も）り立てるのは、なまなかな覚悟ではできぬと思います次第。今にいたるまで御家が無事、続いているのは、凄いことではございませぬか」

「『世を渡る技のなきゆえ兵法を隠れ家とのみ頼む身ぞ憂き』と、これは、石舟斎宗厳殿が詠んだとされる歌だ」

二度目の冷笑は、どこか自嘲めいていた。太平の世にあって、剣術は無用の長物となり始めている。心を読まれたと思ったのか、春馬は淡々とした口調で続けた。

「宗矩殿もわかっておられたであろう。それゆえ、柳生新陰流を一対一の小なる剣術ではな

く、兵法に高めようとした。もっとも、家康公の教えに少なからず影響を受けたらしいがな」

「家康公の教えとは？」

「小野流は剣術なれど柳生流は兵法なり。大将軍たるものは、すべからく大将軍の兵法を学ばれよ」

横から一角が口を挟んだ。小野流とは、やはり、剣術指南役を務める小野派一刀流のことである。

「石舟斎宗厳殿の新陰流は、一対一の小なる兵法であったがな。宗矩殿はこの家康公の精神を学ぶことで、新陰流を経世的な意味を含んだ将軍の大なる兵法として昇華させたのではないかと、おれは思うておる」

「昇華とはまたやけに綺麗事を言うではないか。要は理屈をつけただけよ。頭で考えるだけの剣術になりさがってしもうたのじゃ」

春馬が猛然とくってかかる。一角も負けていない。

「言葉を返すようだがな、なりさがったのは、江戸柳生家五代目当主、柳生俊方殿からであろう。病がちで稽古もままならなかったと聞いている。この俊方殿が、五代将軍綱吉公の時代から、八代将軍吉宗公の時代、正しくは享保十五年（一七三〇）までだが、四十一年も

の長きにわたって、当主を務めたことはまさに不幸と言うしかない」

「『伝家の刀法精研せよ』か」

春馬が言い添えた。俊方は綱吉の時代にそう告げられて、一時、奥詰の役目を免除されている。江戸柳生の当主の剣技は、俊方から確実に低下したと言えるだろう。この頃から今にいたるまで、江戸柳生は、武門の棟梁として征夷大将軍を演出する力を完全に失っていた。

「それを取り戻さんがため、此度の騒動の主役になったと？」

数之進は核心を衝いた。

「そのあたりの事情については、わたしよりも貴公の方が詳しいのではないか」

春馬は逆に問いかける。人見藩の領地は、九州の臍とも言うべき位置にあり、南を薩摩藩、北を熊本藩という大藩に挟まれている。両藩に睨みをきかせるには、最適の場所といえた。間者を送りこむにも適しているうえ、ほとんど借財もないとなれば、強欲な老中ならずとも食指が動くに違いない。

「目付役として、江戸柳生ほど適した藩はないと思います」

独り言のように呟いた。かつての力を取り戻すため、いや、江戸柳生ここにありと、世に知らしめるためだろうか。おそらくは老中の命を受けて、江戸柳生は人見藩の内部に深く潜入した。

「いったい、どれぐらいの人数が、入りこんでいるのか」
数之進は目顔で春馬に問いかける。そんなことは自分たちで調べろと、突っぱねられるかと思ったが、
「およそ五十人」
意外にも春馬は素直に応じた。
「五十人」
その数の多さに、数之進は言葉を失った。松平信明は『仕込み』という今までとは、いささか異なる策を取っている。
「されど、そうたやすく御役目の空きが出るとは思えませぬが」
頭に浮かんだ疑問を口にした。
「江戸詰めの藩士の陪臣として、潜りこませておるのじゃ。奉公させれば、藩内の様子が事細かにわかる。うまく空きが出た折には、素早く連絡を取って、そこにまた江戸柳生の藩士を潜入させるという策よ。勘定方や御用人、御留守居役といった特に重要な御役目を中心にしておる」
「勘定方」
数之進と一角は、ごく自然に隣室を見やっていた。夕涼みの折に飛び交った尾張の方言は、

尾張藩や尾張柳生と思わせるための姑息な企みだったわけである。視線を読んで、春馬はいっそう声をひそめた。

「ずいぶんと小判をばらまいたようじゃ。このご時世よ。借財で首がまわらなくなっているのは、どこかの商人侍だけではないからな。二年前に代替わりした折、小判にものを言わせて入りこんだと聞いている」

皮肉まじりの言葉に、一角は不満げな声をあげる。

「どこかの商人侍はよけいじゃ」

「お、すまぬ」

春馬は笑みを浮かべたが、急に表情を引き締める。

「何者なのじゃ」

顎で隣室を指した。

「姓名は村井嘉津次、わたしと同じ勘定方の者です」

「勘定方か。こっちの腕前はどうだ」

と今度は刀を握る真似をした。

「わたしと同じ程度ではないかと」

「つまり、遣い手ではないわけか。ふうむ、そうなると、よけいわからぬな。どうも田辺新

九郎の狙いは、おぬしだけではなかったように思えてならぬのだ。いや、むろん御算用者の始末が、目的であろうがな。新九郎はやけに彼の者に固執していたように見えた。普通であれば先におぬしを始末して、ついでに片づけるように思えるが」

「あの男を知っているのですか」

数之進は思わず身を乗り出したが、

「あ、いや、それを訊く前に、なぜ、あそこにいたのですか」

遅ればせながらの疑問を発した。たまたまであるわけがない。数之進たちを尾行けていたのか、それとも刺客を尾行けていたのか。

「田辺新九郎たちを尾行けていたのだ。どうせ訊かれるだろうから先に言うておく。あやつは江戸柳生の中でも、一、二を争うほどの手練れという噂じゃ。石舟斎宗厳殿の再来とまで言われておる。まあ、そういう噂を流して、商人侍を怯えさせる策であろうと思うておるが」

二度目の商人侍に、一角が冷ややかな目を返したが、数之進は仕草で宥める。

「着流し姿だったので驚きました。もしや、日傘をさしていたのは」

「さよう、あやつよ。歌を詠み、香を聞き、花を愛で、楽の音を楽しむ。数寄者を気取っておるのじゃ」

「貴公に訊ねたい。どうせ助けるのであれば、なぜ、もっと早く現れなかった」

一角の目に、静かな怒りがちらついている。確かに尾行けていたのであれば、襲撃した時点で助太刀することもできたはず。ふん、と、春馬は鼻で笑った。

「両目付の配下だけで充分だと思うたのよ。よけいな助太刀は無用と思い、遠慮しただけのこと。存外、役に立たぬので驚いたわ」

「きさま」

「よせ、一角」

慌てて腕を摑んだ。この二人は気質がよく似ている。そう、似た者同士は他にもいた。数之進は嘉津次のことを考えずにいられない。

領地の焼畑農業と、『使いまわし』の大和農法。そして、変化朝顔のことを訊いたとき、嘉津次は、なぜ、あんなに狼狽えたのか。さらに刺客の中の手練れは、数之進だけでなく、嘉津次のことも狙っていた。勘定方の同役が、近頃、様子がおかしいと、物言いたげな目を向けていたあれも引っかかっている。

「『男心と梅雨の空』か」

ぽつりと出た言葉に、一角と春馬は、ほとんど同時に怪訝な目を向ける。

「え？」

「おぬしらは」
数之進の苦笑をどう思ったのか。
「このあたりでご免つかまつる」
春馬は立ちあがりながら、懐から文書のようなものを出した。
「なにかの扶けになるやもしれぬ。ああ、ついでに言うておくが、われらはおぬしを助けたわけではない。横やりを入れようとした江戸柳生に、大事な獲物を取られてはかなわぬゆえ、いっとき、助太刀しただけじゃ。事が終わった折に、あらためて、その首、貰い受ける。覚悟しておけ」
「待て。もうひとつだけ訊ねたいことがある。鳥海様のお屋敷に、投げ文をしたのは、おぬしか」
慌てるあまり、親しげな口調になっていた。春馬は答える代わりに、意味ありげな笑みを浮かべ、無造作に文書を放り投げる。置いて行ったのは『兵法家伝書』と記された書物だった。一角は鼻に皺を寄せ、不愉快さをあらわにして、閉められた障子を睨みつける。
「いちいち気にくわぬやつじゃ」
「これは？」
「柳生宗矩殿が記したとされる書よ。まずはその敵を知れ、ということであろうさ。襲撃を

しくじったとなれば、思いきった策に出るのは必定。明日から忙しくなりそうだ。今のうちに少しでも寝ておけ」

友はごろりと横になるや、すぐさま眠りに落ちた。『交ざり者』は江戸柳生、藩主方は肥後派で逆意方は柳生派、刺客は遣い手、狙われたのは御算用者だけではない、村井嘉津次はなぜ狙われたのか。

変化するのは、朝顔だけではないのかもしれぬ。

数之進は心の中で呟いていた。

# 第五章　交ざり者

## 一

翌朝、藩邸はざわついていた。

「ようやくこの日が来たか」

「われらの苦労が報われるの」

柳生派は歓迎の意、肥後派は無言の非難。江戸柳生家から人見藩へ、家老格の重臣が遣わされるという噂話が広まっている。勘定方には『交ざり者』が多いとあって、同役たちは特に落ち着きがない。

昨日の今日でこの動きか。

数之進は苦々しい思いを噛みしめている。明日から忙しくなりそうだという一角の言葉どおりの展開になっていた。襲撃の失敗が原因だろうか。しかし、この早さからすると、襲撃

の成否以前に、段取りが整えられていたようにも思える。

あとで村井殿に訊いてみるか。

嘉津次は、足がまだ痛むということで休暇届けを出していた。未明に船で戻って来たのだが、ひと言も喋らなかったのが気になっている。刺客に命を狙われたのが、相当、こたえているように見えた。

「生田数之進」

姿を見せた片桐主膳に呼ばれて、前に進み出る。夜明け前に帰着した折、挨拶は終わらせている。畏まって、主膳の言葉を待っていた。

「雑司ヶ谷の植木屋において、『朝顔合せ』が行われた由。たいそうな賑わいだったようではないか」

「は」

数之進は短く答える。左門の屋敷に投げこまれた文は、杉崎春馬たちによるものだったという可能性が高まっていた。

〝お助け侍の善意につけこみ、始末しようとする輩あり。此度の潜入は危険。待ち受けるのは虎と狼なり〟

狼はおそらく柳生家の『交ざり者』を指しているに違いない。問題は虎だが、猛虎の異名

を持つ主膳と、寅田藤之助の二人がどうしても頭に浮かんでくる。数之進は深読みして、もしかすると、敵ではなく、味方なのではないかと考えていた。が、これは『そうあってほしい』という願いが胸にあるからかもしれない。

「これを見せてほしいと、村井に頼んだとか」

主膳は、文机に例の文書を置いた。朝顔図譜と表書きに記されている。嘉津次が知らせたのはあきらかだが、はたして、数之進の正体まで告げたのか。

「は。変化朝顔を記した図譜であるように思いましたゆえ、お願いいたしました。どうやら朝顔は、かつてのカラタチバナのような流行を生み出しそうな気配がございます。藩の特産品のひとつとして、育成を心がけていくのがよいのではないかと思いました次第。図譜を拝見いたしますれば、それがしもなにか思いつくことがあるのではないかと」

「あとで、ゆるりと見るがよい」

鷹揚に言い、図譜を数之進の方に押しやった。嘉津次が指を挟んでいた丁は、おそらく取り除かれているに違いない。わかっていたが、口にするのは憚られる。

「はは っ」

図譜を掲げて、頭をさげた。

「藩士たちによれば、我が藩と同じ仕立ての鉢があったようだが、〈富井屋〉という札が立

っていたと聞いた。ちと話が聞けぬかと思うてな」
「〈富井屋〉にでございますか」
「うむ。そなたは、まだ本所の抱屋敷を見ておるまい。わしが案内して進ぜるゆえ、ついでにその〈富井屋〉と会う場を設けてはもらえぬか」
「お頭様に案内していただくとは、もったいないことでございます。畏まりました。急ぎ手配りいたします」
「頼む」
藩邸がふたたびざわめいた。先刻までの政がらみの殺伐としたものではない、華やぎをともなう好奇の眼差しが中庭を横切る人影に向けられている。
「百合様じゃ」
「いつもながら、凛々しいお姿よ」
「さて、何用でおいでになられたのか」
片桐百合は真っ直ぐ勘定方の部屋をめざしていた。いつものように袴姿で、後ろにまとめた長い黒髪が、軽やかに揺れている。百合の気質を表すかのような青い空と強い陽射しが眩しかった。
「父上」

廊下の前で足を止め、百合は主膳を見あげる。

「殿の喪中であるにもかかわらず、奥御殿には、いささか耳を疑うような噂が飛び交っております。真偽を確かめたく思い、参りました次第。父上におかれましては、娘を人身御供になさるおつもりでございますか。そのご存念やいかに」

女剣士はこの藩邸内で、もっとも正直な人間かもしれない。怒りに燃える美しい眸を父親に向けていた。

「はてさて、怖ろしいことよ」

主膳は笑って、庭に降りかけたが、

「中食の後、本日は水練を行う旨、すでに知らせがまわっていよう。膳所も早めに支度を整えておくと言うていた。食うてすぐでは、具合が悪くなる者が出るやもしれぬ。御役目はこれまでとして、中食に行くがよい」

大声で申し渡した。腹にひびく声の持ち主ゆえ、勘定方だけでなく、他の部屋にも聞こえているだろう。主膳の言葉が合図となって、藩士たちは文机の上を片づけ始める。

「生田殿は初めてと聞いたゆえ、御家老より、世話役を仰せつかっておる。まずは腹ごしらえといこうではないか」

同役に言われたが、数之進は嘉津次のことが気になっていた。

「申し訳ありませぬ。村井殿の様子を見た後、膳所に参りますので」
「さようか。わかっておると思うがの。逃げてはならぬぞ」
冗談まじりの言葉に、笑みを返して、別れる。主膳父子は並んで、奥御殿の方に歩いて行った。数之進の頭には、幾つかの事柄が浮かんでいる。
〝相愛での。殿が元服なされた折に、ご結納をかわされたのじゃ。似合いの夫婦になられるであろうさ〟
これは嘉津次の言葉だ。今も志摩守が存命しているかのような言い方が、強く頭に残っている。だが、一角は寅田藤之助から聞いた話として、こう告げた。
〝やつによれば殿はどこかの大名家の姫様との縁組みが決まっていたとか〟
どこかの大名家というのは、江戸柳生のことに違いない。縁組みを装った御家乗っ取りは、さして珍しくもないが、藩主を失ったとなれば、当然、自然消滅する。それでは、と、名物家臣、片桐主膳が名乗りをあげたとも考えられた。あるいは志摩守の婚儀とは別に、もうひとつの縁組みが持ちあがっていたのか。
百合様を柳生家に嫁がせて、いや、片桐家に婿入りやもしれぬな。柳生家の藩主に近い人物と百合様の縁組みを進めながら、同時に御家乗っ取りを進める。
人身御供という言葉から、数之進はかなり確かだと思える答えを導き出した。猛虎は逆意

方の急先鋒、頭役に見える。それともそう見せかけているだけだろうか。今ひとつ主膳の真意が読めない。

されど、少なくとも村井殿と寅田殿は、真実を告げていたように思えるが。

志摩守と百合は相愛だったが、そこに江戸柳生からの縁組みが持ちこまれた。前者は嘉津次、後者は藤之助の話である。二人は真実を知らせていたのでは……。

「数之進」

長屋に続く廊下の手前で、一角が待っていた。

「おまえのことじゃ。水練の前に村井殿を見舞いに来ると思うてな。『厠の密談』は気づかれてしもうた懸念があるゆえ、待っていたのよ」

「なにかあったのか」

「鳥海様から文が届いた」

左門との連絡に関しては、一角にまかせてある。数之進は素早く文に目を通した。殉死騒動があった四月六日の未明に、本所の抱屋敷――朝顔屋敷の近くで、侍同士の争いを見た者がいる、という話が記されていた。

「やはり、おかしい」

口をついて出た呟きに、一角がにやりと笑った。

「出たな。此度はなにが『おかしい』のじゃ。気になることはなんじゃ」
「杉崎殿よ。刺客たちを尾行けていたゆえ、ある程度の事情はわかっているだろうがな。『交ざり者』は五十人とか、江戸詰めの藩士の陪臣として潜りこんでいるとか、いささか詳しすぎるように思えなくもない」
「われらを嘲りたいがゆえ、死に物狂いで調べたのであろうさ。御算用者に話を教えるというのは、さぞ気分がよかろう。天狗になりすぎた鼻が、天井につかえそうであったわ。ええい、あの小憎らしい面を思い出してしもうた。癪に障る」
春馬の悪態をついても始まらない。
「次期藩主、長良頼之様についてはどうだ。藩士たちの中に、顔を見たことのある者はいたか」
数之進は話を変える。藩主がいないため、これといった役目のない一角に、聞き取り役を頼んでいた。想像していたとおりの答えが返る。
「いや。だれに訊いても、知らぬと言うていた。江戸では、大殿のおられた下屋敷にお住まいなされているご様子。藩邸を訪れることは、ほとんどなかったらしい」
いっそう声をひそめて言った。
「おまえの考えどおりではあるまいか」

伊沢喜内こそが、長良頼之ではないのか。何刻か前に、数之進はそう告げている。が、断定できるだけの話は集まっていない。

「もしかすると、すでに藩士たちの中に紛れこんでおられるのやもしれぬ」

肥後を発ったという次期藩主。しかし、その藩主が本物であるかどうかはわからない。人見藩の謎を解く鍵は、なかなか見つけられなかった。

「気になることは多々あるが、次は水練じゃ。心してかかれ」

「言うてくれるな。考えぬようにしていたものを」

心からの言葉が出た。昨日の今日でまさかとは思うが、二度目の危険な罠がないとは言い切れない。数之進は高まる不安を懸命に抑えつけていた。

## 二

「そもそも泳ぎは武芸のひとつであって、武士たる者が修行すべきものである。神君家康公も、常々、水泳術の大切さを解いておられた」

家老の伊沢仁左衛門が、水練に臨む心得を告げている。が、数之進の耳にはまったく残っていない。藩邸の西側に設けられた池は、直径がおおよそ十間（十八メートル）ほどで、深さは一丈（三メートル）ということだった。大きさはともかくも、数之進は深さを聞いただ

けで目眩を覚えている。

「案ずるな。なにがあっても、おれが必ず助ける」

一角の囁きにも、がくがくと首を動かすのがやっとだ。藩士たちはみな下帯しか着けておらず、じりじりと焼けつくような陽射しが降り注いでいる。数之進も痣だらけの素肌を曝していたが、暑さも羞恥心も感じていなかった。

「泳ぎを習うには理屈から入るのではなく、まず実際に自分で泳ぐことからはじめるべきである。本日が初めてという者もおろう。なりふりかまわずに精一杯、頑張るのが大事じゃ。何回も稽古するうちに、自然と上達するゆえ、水に慣れることからはじめるがよい」

池のまわりには、六、七十人ほど集まっていた。剣術の稽古のときと同じく、離れた場所にぽつんと、喜内が控えている。嘉津次は参加していない。

人見の四天王、殉死したひとりの首を喜内が見事に刎ねた、残る二人のうち、ひとりが死に、ひとりは行方知れず。なぜ、殉死という凄絶な道を選んだのか。幕府への訴えのため、そして、敵の目を引きつけておくため、さらに藩士を鼓舞して蜂起を促すため。志摩守の密命を受けた四天王は、殉死に目を引きつけておき、その間に、なにかをした。

なにかを探していたような嘉津次たち。入谷の植木屋に来たのは、なんのためなのか。変化朝顔の図譜を見ながら、いったい……。

「まずは上級者たちが模範を示す。池に入るがよい」
仁左衛門の声で、数之進は我に返る。激しい暑さと緊張感で頭がぼんやりしていた。気をつけないと本当に危ない。
「あれが立ち泳ぎじゃ」
一角が言った。池に入った藩士たちは、胸から上を水面に出している。まるで歩くかのごとく、自然に泳いでいた。中には手を使わずに、万歳をしたような姿勢のまま、泳いでいる者もいる。
「一丈の深さと聞いたように思うたが、わたしの誤りか」
数之進は思わず訊いていた。足が着いているのではあるまいか。泳いでいるようには見えない、歩いているに違いない。
「間違いなく泳いでおる。浅い池と思いたいのかもしれぬが、おれも確かに聞いた。深さは一丈じゃ」
友の言葉で奈落に突き落とされる。後押しするように、仁左衛門が声をはりあげた。
「稽古をするときの心がけとして、水学行道が示されておる。正直を旨とし実志を立てること、日夜鍛錬して倦まないこと、私心を捨て水の法則に従うこと、水の浅い深いを自然に悟ること。他にもまだあるが、それはまた後日とする。初めての者には、基本となる立ち泳ぎ

を覚えてもらわねばならぬ」

仁左衛門の手の動きに従い、池の中にいる藩士が泳ぎを披露し始めた。身体を胸ぐらいまで出しての立ち泳ぎは浮游、抜手游は、手を抜くことによって前に進む技、さらに櫓が投げ入れられると、藩士は櫓を両手に持ち、その場を動くことなく立ち泳ぎを続けている。川ほど流れがないとはいえ、御堀から引き入れた水で、弱いながらも流れはある。また池はさほど広くないため、他の藩士の泳ぎに、影響されることも少なくない。

「すごい」

数之進もしばし恐怖を忘れて見入った。

「今のが櫓持ち立游である。両手を用いずに立ち泳ぎをするのが、我が流派、小堀流踏水術の技じゃ。構えあって構えなきように、格にとらわれず、どんなところでも自由自在に泳ぐことができるようになれば、おのずから神技の域に達することになろう」

「はて、どこかで聞いたことのあるような」

首を傾げた数之進に、一角が答える。

「柳生新陰流でも同じことを言うておる。『構えを用いず、構えなきを構えとする。敵のはたらきに随ってなすところ新陰流の立場なり。切らず取らず勝たず負けざるの流』と、これは有名な『月之抄』に記されておるが、泳ぎも武芸ゆえ、心得や奥義は似たようなもの

じゃ」

「次は配膳游」

仁左衛門の声で、三方や膳が渡された。水の入った湯飲みが載せられている。藩士たちは水をこぼすことなく、泳ぎながら進んで行った。感嘆の声をあげるのは、数之進のみ。他の藩士からは、多少、冷ややかな目を向けられている。

「まさに神技だ。わたしは、地を踏みしめていても、こぼしてしまいかねぬ」

「次は水剣の技」

と、仁左衛門が言ったとき、藩士が駆けつけて来た。何事かを耳もとに告げる。頷き返した後、仁左衛門は藩士たちを見まわした。

「わしはちと離れるが、このまま続けよ」

「ははっ」

代わりに指南役となったのは、川方師役の上級藩士。池の中の者に竹刀が渡された。立ち泳ぎをしながら、剣術の型を取っている。まさに自由自在、何年、稽古しても数之進にはとうてい到達できそうもない。

「気をつけろ、数之進」

一角が耳もとに囁いた。数之進は無言で頷き返すしかない。監視役を務める家老が、持ち

場を離れたのは、たまたまなのか。裏に危険な企みが隠れているのではないか。離れた場所に座していた喜内が、ゆっくり立ちあがった。

「この後、泳ぐ者たちは用意をしておけ」

指南役に言われて、数之進は、頬を引き攣らせる。勘定方の同役たちに、瓢箪を繋げて帯状にした浮帯を着けられた。瓢箪の口は塞ぎ、中に水が入らないようになっている。

「ざんぶと飛びこんでも、浮帯があれば、自然に浮く」

「さよう。子供でも泳げるのじゃ」

「池の中は涼しくていいぞ。絶好の水練日和よ」

口々に励ましの声を掛けてくれたが、身体は強張り、肩にぐっと力が入る。指南役が続けざまに指示を与えた。

「五人による揃游、そして、潜泳と続けよ」

池の中の五人は、綺麗な抜手游で、並んで泳ぎ始める。右手から左手に泳いでから、今度はいっせいに潜った。先刻からの稽古で、池の水は濁っている。潜ると、どこにいるのかまるでわからない。時折、あがる小さな泡が、五人の存在を示している。よく息が続くものだと感心する反面、潜って襲われたら防ぐことはできない、などと考えたりもした。

「おお、同時に」

ひとりの藩士が、その場にいた全員の驚きを代弁する。池の左手で潜った五人は、ほとんど同時に右手の方に姿を現したのだった。水中で目を開けていなければ、互いの動きはつかめない。

「こんなに濁った水の中でも見えるのですか」

数之進は小声で訊いていた。

「ほとんど見えませぬ」

と答えたのは、喜内である。

「水中で水を掻くときの感覚というか、水の動きでわかるのです。それに呼吸も苦しくなる。池の畔（ほとり）まで、さよう、あと一尺（三十センチ）というあたりで、それっとばかりに浮上するのです」

集まっていた藩士たちは、小さく会釈して、畏まる。柳生派の者たちもその例に洩れなかった。喜内に対する深い畏敬の念を、あらためて見る思いがした。

「さて、次は初めての者じゃ」

「はい」

一角が前に進み出る。

「早乙女」

指南役は怪訝そうに眉をひそめた。
「剣術の腕前は、相当なものであるのに、水練が初めてとは信じられぬ」
「水が苦手でございまして、水練だけは避けておりました。されど、よい機会と思い、生田殿と一緒に学ばせていただければと思う次第です」
むろん嘘だが、友の気遣いを感じて、数之進は身体の強張りがゆるむのを感じた。いざというとき、すぐに助けられるよう、一緒に泳ごうとしているに違いない。
「そうか。では」
指南役が目配せした瞬間、数之進は池に突き落とされる。なにがなんだかわからない、気がついたときには池の中にいた。
「うわっ、うわわぁっ」
とっさにじたばたもがいたが、すぐに沈まないことに気づいた。藩士たちがどっと笑い声をあげる。
「言うたではないか」
「疑い深いことよ」
「浮帯を着けておれば、濁流の中でも沈まぬ」
苦笑を返した数之進の隣に、一角が泳いで来る。いちおう浮帯を着けていたが、友の場合

は初心者に見せるための道具にすぎない。数之進は浮いている我が身を、いささか不思議な心持ちで、しみじみ眺めていた。

「まず身に着けるのは、基本中の基本、立游である」

指南役の声に従い、上級者のひとりが泳いで見せる。手でやわらかく水を掻いていたが、残念ながら足の動きまでは見えない。

「力みのないよう水をあしらう。これが極意じゃ。決して力を入れてはならぬ。よいか、手の動きで足の動きを見せるゆえ」

ゆらゆらと藻が揺れるように、指南役は手を動かしていた。数之進も水の中で足を動かしてみる。今ひとつぴんとこないが、水に慣れるだけでよいと、自分に言い聞かせていた。とにかく早く池からあがりたいというのが本音である。

「生田、早乙女、よう見ておけ。今からさまざまな浮身の型を見せる」

今度は自ら指南役が池に飛びこんだ。仰向けに浮く、伏して浮く、真横になって浮くといった型を披露する。最後には、仰向けに浮かびながら、字を書く真似をして見せた。

「これは浮身水書と呼ばれる技じゃ。なにを好きこのんで水の中で字を書くのか、などと思うてはならぬぞ。酒呑游、瓜むき游といった技もあるほどじゃ。手や身体の形にとらわれることはない。心の持ち方に気を使って、修行するのが大事よ」

「ははっ」

数之進と一角は、同時に答えた。と、なぜか先刻よりも身体が池に沈んでいる。胸のあたりまで出ていたのに、今は首だけしか出ていない。隣で泳ぐ一角ともども沈み始めていた。

「浮帯の瓢箪に水が入ったのでは……」

訴えの途中で、いきなり足を摑まれる。次の瞬間、数之進は水の中に引きずりこまれていた。見えたのは濁った水の色だけ。懸命にもがき、叫んだが、苦しくて……なにもわからなくなる。

水練の稽古に見せかけた暗殺。

人見藩の首謀者、柳生派の頭はだれなのか。

数之進の意識は闇に陥ちていった。

## 三

亡き志摩守の密命を受けたと思われる人見の四天王。

密命はどんなものなのか。行方知れずのひとりは生きているのか、始末されてしまったのか。肥後を発ったとされる次期藩主の長良頼之。本当は伊沢喜内こそが頼之ではないのか。亡き志摩守の弟君ではないのだろうか……。

「ここは」

数之進はぼんやり目を開けた。顔を覗きこんでいた一角が、ほっとしたように声をあげる。

「気づいたか。ここは藩邸の長屋よ」

「今、何刻(なんどき)だ。わたしはどれぐらい気を失うていたのか」

「そろそろ暮六つ（午後六時）の鐘が鳴る頃であろう。溺れかけたおまえを引きあげ、水を吐かせて、ここに運びこんだ。一度、正気づいたように思うたが」

「ああ、そういえば」

水を吐いたときに、苦しさのあまり、正気づいたのを思い出した。が、すぐにまた気を失ってしまったのだろう。枕元には、喜内も座している。一角とともに助けてくれたのをかすかに憶えていた。

「喜内様。お手をわずらわせてしまいまして、申し訳ありませぬ。ありがとうございました。とんだ不調法をしでかしまして、まことに申し訳なく思う次第。なさけないことでございます」

「不調法ではない、あれは仕組まれた罠よ」

一角が吐き捨てるように言った。

「あの浮帯はな、瓢箪ではなかったのじゃ。紙よ。紙で瓢箪を作り、浮帯に見せかけたとい

うわけよ。手のこんだ策を使うものだ」

「紙」

数之進は「なるほど」と得心する。

「それゆえ、すぐには沈まなんだというわけか。水を吸い、徐々に沈んでいったのは、そういう理由か。それにしても、どうやって作ったのであろうか。竹かなにかで型を作り、紙を貼り合わせて瓢箪の形にした後、型をそっと抜き、底を閉じる。ふむ、このやり方であれば、できなくもないな」

「数之進」

一角は呆れながらも、ようやく笑みを見せた。

「偽瓢箪の作り方まで考えるとは、いかにもおまえらしいが、おれはもう、うんざりしておるのじゃ。命がいくつあっても足りぬわ。こんなところに長居は無用、さっさと暇願いを出そうではないか」

怒りを叩きつけながら、御算用者であることも暗にほのめかしている。

「生田殿、早乙女殿」

喜内は顔色を変えたが、廊下に人の気配を感じたのだろう、不意に口をつぐんだ。静かに姿を見せたのは、喜内の父親であり、家老でもある伊沢仁左衛門である。

「大丈夫か」

と、傍らに腰をおろした。口を開きかけた一角を、喜内が目顔で止める。じりっと膝で前に出た。

「父上。なぜ、あの場を離れたのでございますか。まるで此度の騒ぎが起きるのをご存じだったかのように見えなくもありませぬ。わたしはもちろんのこと、同じ疑問を持つ者が少なくありませぬ。いかがでございましょうか」

「なにを言い出すかと思えば……新しくご奉公した二人を、歓迎するつもりだったのであろう。いささか悪ふざけが過ぎたようにも思うが、深い意味はない。藩士たちも詫びていた。許してほしい、とな」

細められた眼には、つかみどころのない男という印象がちらついていた。やんわりかわそうとしたようだが、喜内はそれを許さない。

「水練に関しましては、代々伊沢家が指南役の長と定められております。長たる者が目を離した責は重いのではないかと思う次第。頼之様がご到着なされた折には、御役目を返上なさるのが宜しかろうと」

「そんな話はあとにせよ。わしは見舞いに来ただけじゃ」

「はて、わたしは、生田殿の生死を確かめに来たのかと思いましたが」

喜内は、どきりとするような言葉を投げた。

「なに？」

仁左衛門の表情が強張る。造り笑いが消えて、目にかすかな怒りが浮かびあがっていた。父子の諍いを見るのは、これが初めてだが、根深い確執を感じずにいられない。不安げに目をあげた数之進を見て、一角が厳しい口調で諫めた。

「父子喧嘩は外でやっていただきたい」

じろりと仁左衛門を睨みつける。

「我が友は正気づいたばかりでござる。生臭いのは、池の水だけで充分でござる。充分すぎるほどに味わわされましたゆえ、少しの間、そっとしておいていただきたいと思います次第。ご遠慮いただきたく思いまする」

「申し訳ありませぬ」

喜内は答えて、父親を目で促した。父子が出て行く間、二人はじっと様子を見ている。足音が消えて行ったのを確かめて、数之進は囁いた。

「父と子の間には、相当、激しい対立があるようだ」

「お世辞にも仲がいいとは言えぬな。もしかすると、御家老は、あわよくばの夢を描いておるのやもしれぬ」

「うむ」

嫡男の喜内を藩主の座に。仁左衛門はそう考えて、柳生派に合力することを決めたのかもしれない。数之進の頭には、昼間の片桐父子のことも浮かんでいた。

「百合様も意に染まぬ縁組みを進められているご様子。すごい剣幕で、お頭に食ってかかっていた。お頭は、柳生派の藩主か、それに近い者と、百合様を娶せるお考えなのやもしれぬ」

「二組の父子、しかも、どちらも藩の重臣じゃ。かたや倅、かたや娘と、違いはあるがな。嫁を迎えたり、嫁入ったりすれば、堅い絆が結ばれるというわけよ。父子もそうだが、御家老と片桐様もまた、あまり仲がよくないのやもしれぬ」

「一緒におられるところを拝見したことがないゆえ、確かなことは言えぬが、手を携えて藩を守り立てるという間柄ではあるまいな。どちらが先に柳生派と堅い絆を結べるか。水面下の駆け引きが、行われているのは確かだろう。それはそうと」

数之進は話を変えた。

「村井殿はご無事か」

水練騒動は、御算用者を始末するのが最大の目的だろうが、藩士たちの目を引きつけておくためということも考えられた。その間に邪魔者を片づける。邪魔者はすなわち柳生派の手

練れに命を狙われた嘉津次となるのだが、一角は数之進の不安を読み取れなかったに違いない。

「ご無事じゃ。おまえが気遣っていたことを多少なりとも、わかっているのであろうさ。さいぜん様子を見に来たわ」

皮肉たっぷりに応じた。

「しかし、他人を案じるどころではあるまい。昨夜に続いて、二度目だぞ。命からがら戻ったというに、またしてもじゃ。此度は引きあげよう、数之進。江戸柳生が相手では分が悪すぎる。命あっての物種よ」

「ご無礼つかまつる。早乙女殿にお目にかかりたいと申す者が来ておりまする」

藩士がだれかの来訪を告げる。一角は渋々ながら立ちあがった。

「おれがいない隙にまた、ということもあるからな。すぐに戻って来る。おまえは寝ていろ。動いてはならぬぞ」

「疲れて動く気にもなれぬ」

力なく言い、忙しげに出て行く一角を見送る。それを待っていたかのように、そっと障子が開いた。

「具合はいかがでござるか」

小姓方の寅田藤之助が、廊下の様子を窺いながら、部屋に入って来る。殉死しそこなった若者は、顔色もよく、元気そうだった。

〝待ち受けるのは虎と狼なり〟

左門のもとに届いた文の一部が甦る。おそらく狼は江戸柳生のことだろうが、虎は、猛虎の異名を持つ片桐主膳か、寅田藤之助ということもありうる。敵だと教えているのか、それとも味方という意味なのか。杉崎春馬は曖昧な笑みだけ残して立ち去ったが、数之進は味方だと思いたかった。

「もう駄目かと覚悟しましたが、悪運のお陰で命を拾うたようです」

できるだけ明るく告げる。

「やはり、わたしは水練には向かぬようで」

「我が藩には、狼がうろうろしておるゆえ、油断できぬ。隙を見せると、がぶりとくるからな。早う頼之様に、お戻りいただきたいものよ。正式に藩主とおなりあそばされれば、狼もおとなしくなるに相違ない」

狼と、二度も言ったのが気になったが、虎と狼の文を知っているわけがない。あるいは藩内でも、柳生派のことを陰で狼と呼んでいるのかもしれなかった。

「潜りこんでいる狼は、およそ五十人」

続いて出た藤之助の言葉に、数之進は、二度目の疑問を覚えた。杉崎春馬の話に出た数と同じだったからである。問いかけるような眼差しに気づいたのか。

「なんじゃ」

藤之助が訊いた。

「いえ、五十人という数を、どなたからお聞きになられたのかと思いまして」

「噂になっておる。ついでに言うと」

耳もとに告げる。

「喜内様のこともな、広まっておるのじゃ。もしや、喜内様こそが、亡き志摩守様の弟君、頼之様ではないのか、と」

「え？」

## 四

数之進の憶測を言葉にしたような感じだった。

肥後を発ったという長良頼之は影武者であり、すでに本物の頼之は、家老の嫡男として、君主教育を受けている。正体を隠して騒動の鎮圧に動いた後、次期藩主の名乗りをあげれば、人見藩は安泰。これらのことが浮かんでいたが、なんとなく物言いたげな雰囲気をとらえて

いる。

「寅田殿はその噂話を信じておられるのですか」

試しに訊いてみた。

「さあて、どうであろうか。鵜呑みにはできぬ、とは思うておるが、ありえぬことではないとも思うておる。幼い頃に弟君と喜内様が入れ替わっていた、などと考えれば、ふむ、今のは我ながら妙案じゃ」

ひとりごちて、続ける。

「世間にはよくある話ではないか。藩主の影武者がいる、あるいは公儀に気づかれぬよう替え玉を当主として届け出る、といった噂話には事欠かぬ。ああ、そうそう、替え玉で思い出したが、屋号なども上と下を入れ換えたりしてだな、決めたりするではないか。珍しくもないことよ」

「は？」

唐突すぎる話の流れに、流石の数之進も返事に詰まった。弟君と喜内が入れ替わったという話と、屋号の話が、どこでどう繋がるのか。不審な目を受けて、藤之助はごまかすような笑いを浮かべる。

「ははは、ちと無理があったか」

無理だのなんだのと言う話だろうか。ますますわけがわからない。二度目の不審な目に、今度は苦笑いを返した。

「ところで早乙女殿のことだが、いささか変わった男よの。まだ頼之様は着いておられぬというに、毎朝、中奥を整えておるのじゃ。座敷や廊下を隅から隅まで清め、床の間には花を活け、香を焚きしめておる。まめやかというか、落ち着きがないというか。とにかく、いっときもじっとしておらぬ。まあ、よう動く男じゃ」

「早乙女殿は、そういう男なのでございます。特に今は喪中でございますゆえ、亡き志摩守様の御霊をお慰めする意味もこめているのでございましょう。中奥を整えながら、志摩守様とお話ししておるのやもしれませぬ」

「亡霊とか」

大仰に目を剝いてから、藤之助はまた笑った。

「早乙女殿も変わっておるが、おぬしも負けておらぬな。されど、以心伝心とはまさにこのことやもしれぬ。友の気持ちが即座に理解できるとは羨ましいことよ」

憑きものが落ちたかのように、明るく闊達であった。御座所において、追い腹を切ろうとした男とは、別人に思えなくもない。

「数之進」

戻って来た一角が、藤之助を見て、露骨にいやな顔をする。
「息の根を止めに来たのではなかろうな」
「一角。寅田殿はわたしの身を案じて、様子を見に来てくれたのだ」
「いや、笑いに来たのでござるよ。うまうまと『紙瓢箪の罠』にはまりおって、とな。そもそも肩に紙瓢箪の浮帯を掛けたときに、なぜ、気づかなんだのか、ええ、早乙女殿。生田殿はともかくも、貴公は剣術の遣い手であろう。肩に掛けたときにわかるはずじゃ。わからなんだのは、修行不足ゆえよ」
厳しい言葉を吐かれて、一角は唇を噛みしめた。
「きさま」
「おっと、喧嘩をしに来たわけではない、見舞いに来たというのはまことじゃ。わたしも水練に参加したかったのだが、なにぶんにもまだ傷が痛むため、遠慮した次第。逆に足手まといになるかもしれぬと思うたからよ。しかし、早乙女殿が付いていれば大丈夫と、安心していたゆえ、驚いたわ。『善く游ぐ者は溺る』であろうか」
「こやつ、おれを愚弄するか!?」
「よせ、一角」
数之進は止めたが、一角は、藤之助への怒りを迸らせる。

「皮肉を言うておるのじゃ。以前、喜内様の話をしたときに、おれがくだんの諺を言うたのを憶えていたのであろう。小憎らしいやつよ。人の心を逆撫でしては、腹で笑うておるに違いない」

「いや、腹でなど笑わぬ。堂々と笑うてやるわ」

「喧嘩を売っているな」

「やめろ」

数之進が起きあがろうとしたとき、

「やめぬか、一角」

突然、男が飛びこんで来た。藤之助に飛びかかろうとした一角の腕を摑む。浪人ふうの着物と袴姿だったが、顔を見誤るはずがない。

「と……」

鳥海様。

と大声をあげかけて、数之進は危うく呑みこんだ。左門は、木綿の色褪せた着物と袴に、月代を伸ばして無精髭という浪人姿。あまりにも馴染みすぎていて思わず声を失っていた。が、藤之助もまた茫然自失という感じで、ぽかんと大口を開けている。

「その阿呆面をなんとかしろ」

一角が下から顎を押しあげた。
「あうっ」
舌を噛んだのか、藤之助は顔をしかめる。
「乱暴者めが、わたしを自死させるつもりか」
「し損ねたゆえ、及ばずながら手伝うてやろうと思うてな。ちと力が足りなかったか。惜しいことをしたわ」
「きさま」
と、今度は藤之助が目の色を変えた。まあまあ、と、左門が割って入る。藤之助は胡散臭げに一瞥した。
「貴公、何者じゃ。浪人が長屋に出入りするとは前代未聞のことよ。驚きのあまり、言葉が出なんだわ」
「お、これは失礼いたした。それがしは、生田数之進の叔父、村上杢兵衛でござる。数之進の命が危ないという知らせを受けたため、駆けつけました次第」
「おれが知らせた」
無愛想に一角が継いだ。
「さようか」

藤之助も負けじと鋭い目を向けている。人は人を映す鏡、一角は正直に相手の気持ちを表していた。だが、流石におとなげないと思ったのか。

「それがしは、これにてご免つかまつる」

藤之助は、最後だけは礼儀正しく頭をさげて、出て行った。

「気に食わぬやつじゃ」

「おぬしは、そればかりではないか。杉崎殿のときも似たような台詞を聞いた憶えがあるぞ」

「われらのまわりには、そういう輩が多いということよ」

一角は、念入りに廊下を確かめてから、ようやく腰をおろした。数之進はあらためて左門を見やる。

「いつもながら、鳥海様には驚かされます」

「以前にも色々お化けになられましたが、此度のそれが、いちばん似合うておられるような気がしなくもありませぬ」

一角の軽口に、苦笑を洩らした。

「月代と無精髭は、髪結い床から切った毛をもろうて来て、糊(のり)で貼りつけたのじゃ。陽の下では、いささか危ういが、行灯の明かりであれば、どうにかごまかせるだろうと思うてな。

米粒の糊は、乾くとぱりぱりして、喋る度に髭が剝がれ落ちそうじゃ」

たとえ人に嘲笑されようとも、配下が危ないときには、なにを置いても駆けつける。それが鳥海左門という上役だった。その気持ちだけで、数之進は胸が熱くなる。

「ありがとうございます、鳥海様」

「礼には及ばぬ。昨夜の襲撃騒動を聞いたゆえ、もしやと思い、迎えに来る支度をしておいたのだが、思っていたよりも悪いことが起きてしもうたようじゃ」

「引きあげましたときには、息が止まっておりました。慌ててぐっと胸を強く押しましたところ、ぴゅーっと水を吐き出しますとともに、鮒まで噴きあげまして」

一角の言葉に、数之進は首を持ちあげる。

「今の話はまことか、鮒が噴きあがったのか」

「おお、甘露煮にして、すでに食したわ。小ぶりだったが、なかなか美味であったぞ」

にやりと笑った友を見て、つられたように笑みを返した。辛いことも怖ろしい体験も、笑いとばして終わりにする。暗くなりがちな数之進を、一角は明るく支えていた。が、左門は二人ほど軽く考えられなかったに違いない。

「わしが来た理由は、すでにわかっておろう」

いつになく深刻な表情で告げた。昨夜に続く暗殺騒動、家老は悪ふざけと言い訳していた

が、御算用者の命を狙ったのはあきらか。度重なる騒ぎを見かねて、連れ帰ろうとしていた。

## 五

「はい」
そう答えた後、数之進は素早く言い添える。
「ですが、途中で逃げ出すことはできませぬ」
「数之進」
「この場を借りまして、鳥海様にご報告いたします」
「そのままでよい、無理をするな」
「いえ、大丈夫でございます」
起きあがって、上役の目に目をあてる。
「御家老とご嫡男の喜内様、勘定頭の片桐様と女（むすめ）の百合様という二組の父子の間には、激しい対立が見て取れます。どうも父親たちは柳生派に肩入れしている様子。思いのほか柳生派の勢力が強くなっているのやもしれませぬ」
「肥後派は押され気味か」
「はい。御家老と勘定頭は、言うまでもなく藩の重臣。その二人がすでに柳生派と手を組み、

藩主の座を懸けて、鎬を削っているとなれば、藩士たちの心が傾くのは無理からぬこと。殉死という凄絶な訴えの裏には、そういった事情が隠れていたのではないかと思います次第」

江戸柳生を後ろ盾にした藩の重臣と、喜内を頭に据えた若い藩士たち。表向きには肥後派と柳生派の対立に見えるが、実際は肥後派の中にこそ確執がある。父子なればこその辛い対立。ここで数之進たちが引けば、命を落とした四天王は、まさに犬死にではないか。そんな想いを感じたのだろう。

「長良頼之殿だが、すでに江戸入りしているようじゃ」

左門があらたな情報をもたらした。

「まことでございますか」

「杢兵衛の知らせによれば、昨夜、下屋敷にそれらしき一行が入ったとか。わしはそれが気に入らぬ」

昨夜の部分に、ひときわ力をこめた。頼之一行、つまり、喜内たちは、御算用者襲撃の話を知っていたのではないか。遣い手たちの目が逸れる隙を狙ったような江戸入り。一角が皮肉まじりの言葉を口にした。

「われらを囮役にしたか」

「たまたまかもしれぬ」

「お人好しもたいがいにせい。柳生派の『交ざり者』は、おそらく遣い手揃い。今こうやっている瞬間にも、襲いかかって来るやもしれぬ。二度目まではなんとか助かったが、三度目はわからぬぞ」

「おぬしがいる」

数之進は友を見た。幾たびも死線をくぐりぬけてきた相棒、御算用者は二人で一人。どちらが欠けても成り立たない。とたんに一角は勢いがなくなる。

「おれは、まあ、おまえに従うが」

ちらりと、左門に目を走らせた。あとは上役にまかせるしかない。このまま続けるか、それとも引くか。

「わしは引くべきだと思うておる」

短い答えだったが、その眸には限りない慈愛があふれていた。役目と配下の命を秤にかければ、常に後者に軍配があがる。しかし、人見藩に潜入して以来、左門がどこか浮かぬ顔をしていることにも数之進は気づいていた。

「話が戻りますが」

引く、引かないについては敢えて話題にしない。

「下屋敷入りした頼之様一行のことです。どちらから、おいでになられたのでしょうか」
「肥後からであろう」
一角が横から口を挟む。あたりまえのことを訊くでない、という口調だった。左門は異なる考えを持ったのか、
「数之進は、どう考えておるのじゃ」
そう訊き返した。
「はい。もしや、尾張藩の下屋敷あたりから、我が藩にお戻りあそばされたのではないかと思いまして」
簡潔に説明する。人見藩の内情にやけに詳しかった杉崎春馬、『柳生五人組』は尾張藩の下屋敷に食客として滞在している、江戸柳生を尾行していた『柳生五人組』、行方知れずの四天王のひとり、中林勝矢は、もしかすると、春馬たちに助けられたのではないか。
「中林殿から事情を聞いたとすれば、内情に通じているのも得心できます。人見藩は尾張藩にとっても、魅力的な藩なのではありますまいか。ここで恩を売っておけば、後々なにかと利が生まれるのは必至。いずれにしても損はないと見て、匿うのを許したように思えなくもありませぬ」
「ふうむ」

左門は、唸った。

「いつもながら、数之進の慧眼には恐れ入るばかりじゃ。ようもそこまで読めるものよ。わしもだが、杢兵衛に爪の垢を煎じて飲ませてやりたいの」

「御意」

一角がふざけて畏まる。小さな笑いが起きたとき、

「生田殿、宜しいか」

廊下で声が響いた。喜内である。数之進の目配せを受けて、一角が障子を開けた。座していた喜内は、左門を見て、小さく息を呑む。表現の仕方は異なるが、数之進は、寅田藤之助を思い出さずにいられない。引っかかったが、敢えて口にはしなかった。

「数之進の叔父、村上杢兵衛でござる」

左門の短い挨拶に、喜内は頷き返した。

「此度の不始末は、我が伊沢家の不始末。生田殿には、お詫びのしようもございませぬ。二度とこのようなことがないよう、われらは命を懸けてお守りする所存。つきましては、生田殿と早乙女殿に、あらためてご挨拶をしたいという者たちがおりまして」

合図を受けて、障子が全部、開かれた。廊下には、ずらりと若い藩士たちが並んでいる。二十人ほどだろうか。夕涼みの折、嘉津次たちとあわやの事態になりかけた六人も含まれて

いた。

「他にもいるのですが、なんというてもあの騒ぎの後でござる。本日は遠慮させ申した。是非ともわれらにご助力いただきたく思い、お願い申しあげます次第。何卒、何卒、お願い申しあげます」

平伏した喜内に、若い藩士も倣った。御算用者と気づいているがゆえの頼みであるのは言うまでもない。喜内はわかっていた、おそらく左門の正体にも……。

「答える前に、いくつか訊ねたいことがある」

一角が真剣な顔で問いかける。

「昨夜、われらは雑司ヶ谷から戻る途中で、賊に襲われ申した。その企みについて、おのおのがたはご存じでござったか。ちなみに刺客の中で名がわかっているのは、田辺新九郎と申す者。手練れでござる」

新九郎の名が出ると、座していた藩士の間にざわめきが広がった。肥後派や柳生派のいかんを問わず、その名を知られているらしい。

「いかがでござるか」

再度、一角に問われて、喜内が答えた。

「われらの耳には、届いておりませなんだ」

「まことか」
「刀にかけて誓いまする」
喜内は腰に携えている脇差の柄を軽く握りしめて、続けた。
「事前にわかっていれば、それがしも同道いたしました。たった今、襲撃の話を聞き、身体が震える思いでござる」
やり場のない怒りと憤りで、頬が朱に染まっている。数之進はこのやりとりだけで充分だったが、一角は得心しない。
「他にもわからぬことがある。あらたな藩主、長良頼之様とは、だれなのか。それがしの目の前にいるお方ではないのか。先程、耳にしたのでござるが、御家老の嫡男こそがという噂がまことしやかに流れており申す。はたして、真偽やいかに」
色々調べていたときに、友も喜内の噂話を耳にしたようだ。数之進とは情報を突き合わせていなかったが、藩邸に噂が広がっているのは事実なのだろう。
「それは」
口ごもった喜内に、一角は怒りを叩きつける。
「ほう、事情は話せぬ、されど、力と命を貸してほしい、と申されるか。ずいぶんと虫のいい話では……」

「一角」

数之進は静かに遮る。この場でなにもかも、あきらかにできるかと言えば、そうはいかない。数之進はまだ手札を見せていないのだ。こちらが手の内を明かさない以上、相手にばかり求められなかった。

「承りました」

力をこめて告げる。

「及ばずながら、生田数之進と早乙女一角。喜内様にお力添えいたす所存でございます。われらも命を懸けて……」

「それがわかりませぬ」

不意にひとりが声をあげた。諍いを起こしかけた六人のうちのひとりである。真っ直ぐな眸が、喜内に似ていた。

「われらもお訊ねいたしたき儀がござる」

「承ります」

「先程からの話によりますると、命を狙われたのは、昨夜に続き、二度目になるとか」

「いかにも二度目です」

「なぜでござる」

若い藩士は訝しげに眉を寄せる。

「なぜ、そのような思いをしてまで、我が藩のために尽くしてくれるのですか」

心からの問いかけだった。通常、自分に利がなければ人は動かない。無償で尽くしてくれるのは、親ぐらいのものだ。もっとも近頃はその親でさえ、我が子を道具として利用する。そんな日常を過ごしている者にとっては、御算用者の行為そのものが、奇異に映るのかもしれない。

「途中で降りれば、ただの愚か者と笑われますが」

数之進は言った。

「最後までつらぬけば、それは五常を守ったことになります。わたしは剣術も泳ぎも苦手な勘定方の商人侍ですが、商人として死にたくはありませぬ。せめて心だけは侍で在りたいのです」

五常とは、仁義礼智信のことである。声高に告げたわけではない、数之進は、ただ静かに語りかけた。感じるところがあったに違いない。張り詰めていた場の空気がゆるんだ。

「お二人の真意を知りまして、百万の味方を得た思いでござる。すでにお聞き及びかもしれませぬが」

「頼之様がご到着なされた」

長屋の外で大声が響いた。
「先触れが知らせに参りましたぞ。おのおのがた、頼之様でござる。江戸入りなされて、この屋敷に向かっておられまする」
「詳しい話はあとで」
立ちあがった喜内に、藩士たちも続いた。いつの間にか、左門は姿を消している。忌々しげに一角が舌打ちした。
「ええい、逃げ出す最後の機会だったというに」
本気でないことは笑顔に表れている。
「御座所の用意をしなければならぬのではないか。おぬしが怠りなく整えていたゆえ、今更やることはあるまいがな。万が一にそなえなければならぬ」
「おまえは寝んでいろ。まだ顔色が悪い」
「そうはいかぬ」
数之進は急いで着替え始めた。
藩邸はにわかに慌ただしさを増している。

# 六

「江戸柳生から家老格として、重臣が来るのは明日か、明後日か。頼之様もその話を聞き、急がれたのやもしれぬ」

一角の言葉に、数之進は頷いた。二人は中奥の御座所を整えている。

「藩主が不在では勝負にならぬからな。とはいえ、飛んで火に入る夏の虫となる場合がなきにしも非ずよ。みすみすお命を危険に曝すような真似は、避けてほしかったというのが、正直な気持ちだ」

「頼之様が本物であれば、おまえのその不安もあてはまるが、わからぬではないか」

「関係ない。本物であろうと、偽者であろうと、命の重さは同じだ。なんとかできぬものだろうか。江戸柳生の特産品は剣術、襲撃されれば、血で血を洗うような戦いになるのは間違いない」

「特産品ときたか。まあ、売りという点では、確かにそう言えなくもないな」

「遣い手揃いだというのに、わたしの武器はこれしかない」

と、数之進は懐から父の形見の算盤を取り出した。すかさず一角が告げる。

「千両智恵もあるではないか」

「うむ。おぬしがいつもそうやって、持ちあげてくれるゆえ、多少、自信がついたが」

春馬に渡された『兵法家伝書』と、変化朝顔の図譜を畳に並べた。数之進は図譜を手に取る。

「あれは花が桔梗のような形をしていたではないか、と、同役の者が村井殿に言うていた。されど、この中に桔梗のような花の形をした変化朝顔はない」

「秘中の秘を、そうたやすく見せるか。あらかじめ抜き取ってあるのじゃ。おまえとて、それはわかっておろう」

「そう、わたしも同じことを考えていた」

「明日にでも、喜内様に朝顔屋敷を案内してもらおうではないか。さすれば、なにか得られるやもしれぬ」

「二人とも、このような場所でなにをしておるのじゃ」

嘉津次が顔を覗かせる。

「頼之様は、奥御殿にお泊まりあそばされるとか。お駕籠は御裏御門からお入りになられるそうじゃ。すでに先頭が御成門に着いておる由。ぐるりと裏にまわるゆえ、いささか時はかかるが、急がねばお出迎えに間に合わぬぞ」

「なんと、いきなり奥泊まりか」

一角は答えるやいなや、走り出している。

「数之進はゆるりと来るがよい。おれが様子を見て来るゆえ」

「待て」

止める暇もあらばこそ、またたきする間に、友の姿は見えなくなっていた。数之進は追いかけようとしたが、

「こちらからの方が早うござる」

嘉津次が暗闇に沈む庭に降りた。一瞬、恐怖を含んだ躊躇いがよぎる。嘉津次は柳生派に属している『交ざり者』、ひとけのない場所に誘い出して、三度目の暗殺を実行しないとも限らない。

されど『男心と梅雨の空』だ。

数之進は独特の考え方で、その恐怖を打ち消した。当初は『交ざり者』だったであろう嘉津次の身に、なにかが起きて『変化朝顔』となった。その結果、御算用者ともども刺客に命を狙われるという事態に至っている。

「足は大丈夫でございますか」

庭に降りて、後ろに続いた。

「まだ少し痛むが、なに、たいしたことはない。それより、生田殿こそ、いかがでござる

か」

「流石にこたえています。ろくに寝る暇もなかったうえ、初泳ぎでございましたので」

「逃げた方がよい」

嘉津次は不意に立ち止まり、数之進の肩を摑んだ。

「生田殿も正直に答えてくれたゆえ、わしも正直に告げる。江戸柳生は今度こそ、御算用者を仕留めるつもりじゃ。近々、手練れを中心にした刺客が送りこまれるのは必至。今のうちに逃げろ」

「村井殿」

「喜内様たちとのやりとりは聞いた。わしも隣の部屋にいたからの。気持ちはわかる、侍で在りたいという生田殿の気持ちは、痛いほどわかる。されど」

さほど長い言葉ではないのに、嘉津次は何度も詰まり、口ごもった。迷っているのは数之進ではない、眼前のこの男ではないのか。

「苦しいお気持ちはわかります。同じ立場になれば、わたしも……」

「人見藩の者たちは、みな真っ直ぐで、勤勉じゃ。絆も強い」

早口で遮る。嘉津次の耳に、数之進の言葉は届いていない。

「新しいものを取り入れて、藩を変えていこうとする意欲もある。事実、少しずつではある

が、変わり始めていることは、生田殿もご存じのとおりじゃ。わしは心を動かされた、一生懸命にご奉公する若い藩士たちの姿に」

嘉津次の告白には、重要な事柄が隠されている。おそらくこの者には、一角のような盟友や、左門のような上役がいないのだ。柳生派の中で一目置かれるのは、剣術の遣い手であり、勘定方の商人侍ではない。

しかし、人見藩は違う。

剣術の腕前が未熟であろうとも、泳ぎが不得手であろうとも、互いに支え合い、高め合おうとする。数之進は、江戸柳生の大きな欠点を教えられたように感じた。

「怖いですか」

と、訊いた。

「怖い」

「わたしもです。されど、今、逃げたら、わたしは侍どころか、人ですらなくなってしまいます」

藩士たちに告げたことによって、数之進は、自ら退路を断った。ともすれば恐怖に襲われて逃げ出したくなる己の弱さをよく知っているからだ。見つめ合う二人は、互いの眸に映し出される己を見ている。

「生田殿」
「参りましょう」
決然と告げ、ふたたび歩き出した。命を狙う者もいれば、守ってくれる者もいる。数之進は自分に注がれる幾つかの視線をとらえていた。左門の配下か、あるいは左門自身か、それとも人見藩の若い藩士か。
「頼之様、ご到着でござる」
先触れの声を聞き、急いで御裏御門の潜り戸から外に出た。奥御殿に近い門なのだが、奥御殿に入るには、さらに内門を通らなければならないため、見張りが目を光らせている。門の内側にも外側にも藩士たちが集まっていた。
「数之進」
一角がすぐに気づいて、駆け寄って来る。
「なんじゃ、おれと同時ではないか」
「すまぬ。村井殿に案内してもろうたのだ」
「鳥海様が繁みに潜んでおられたゆえ、案ずることはないと思い、かまわずに走ったがな。落ち着いて考えてみれば、中庭を突っ切った方が確かに早い。おれの悪い癖じゃ、せっかちなのは、と、おいであそばされた」

夜目の利く友は、いち早く駕籠が近づいて来るのを察した。やや遅れて、数之進も行列を確認する。早めに知らせを受けていたのか、なんと片桐百合が行列の先頭に立っていた。いつものように袴を着けて、女剣士然としている。もちろん喜内も駕籠の脇に従っていた。

〝相愛での。殿が元服なされた折に、ご結納をかわされたのじゃ。似合いの夫婦にならられるであろうさ〟

またしても嘉津次の言葉が浮かんだ。あれは亡き志摩守ではなく、あらたな藩主となる頼之と百合のことを言ったのではないのだろうか。

「もしかすると、百合様は、許嫁をお迎えに行かれたのかもしれぬ。次期藩主の頼之様こそが、お相手なのではあるまいか」

ぽつりと出た呟きに、

「違うな」

一角は断定した。

「なぜ、言い切れるのだ」

「鬼百合だの、女剣士だのと言われても、百合様は女子じゃ。惚れた殿御とひさかたぶりに逢うというときに、袴姿はするまいさ。髪を結い直して女子らしく装うに相違ない。それゆえ、駕籠の中の殿御は、百合様の相手ではないと、おれは思うたが」

「流石は一角。そう読んだか」
「と褒められても、素直に喜べぬわ。好色者と言われておるようでな」
話している間に、駕籠が到着して、門の向こうに消える。はたして、本物の長良頼之なのか。謎とともに門がゆっくり閉められていった。

# 第六章　幻の花

## 一

狙われた人見藩。

江戸柳生の後ろには、老中首座、松平信明が控えている。人見の四天王の凄絶な訴えにより、御算用者は動いたが、動けば命を狙われるのが常。狼の追撃をかわして、無事、新藩主を誕生させられるだろうか。

三日後の早朝。

数之進と一角は、本所の抱屋敷――朝顔屋敷を訪れていた。

本所は御城の東北隅の区域で、大川の東に位置している。万治二年（一六五九）に両国橋が架けられた後、竪川、横川、横十間川などの開鑿を進め、水の便が非常によくなっていた。廻船問屋、材木問屋、薪炭商といった水利に依存した商家が多くなるのも当然といえるかも

しれない。大名家の下屋敷や蔵屋敷、旗本屋敷などの武家屋敷も数多く建ち並んでいる。

朝顔屋敷があるのは、厩橋の渡し場近くの一郭で、三千坪ほどの敷地を有していた。今はまさに花盛り、照りつける陽射しの下、色とりどりの朝顔が花開いている。

「変化朝顔が見あたらぬ」

数之進は汗を拭い、腰にさげておいた竹筒の水を飲んだ。雑草取りや水やりをしながらの探しものとなっている。過日の村井嘉津次たち同様、図譜を片手に歩いているのだが、ごく普通の朝顔しか咲いていない。直植え、鉢植えと、仕立て方や花の大きさは違えど、葉や花の形状はごく普通の朝顔だ。

「どこかに隠してあるのじゃ。東側の一郭に、見張りを立てておる区域がある。後であそこを調べてみよう」

一角はいつもながら下調べをするのが早い。が、新藩主の頼之は、到着した夜以来、奥御殿に籠もりきりとあって、いささか機嫌が悪かった。

「いつまで隠れているつもりなのであろうな。刺客を怖れるがゆえであろうが、お目にかかれるのは、喜内様のみ。御家老や片桐様にも、お目通りなされておられぬとか。今ひとつ真意がつかめぬ」

不満げに告げた。色男の一角は、奉公してすぐに二人の奥女中から文を送られていたらし

い。これ幸いとその伝手を頼りに、奥御殿の様子を探っているのだが、奥御殿においても、側に近づける者は限られているようだった。

「亡き大殿の奥方様、つまり、頼之様の母君である光徳院様と、百合様だけしかお目通りを許されておらぬ由。まあ、顔を憶えられると、即座に狼が襲いかかるやもしれぬからな。慎重になるのは、わからぬでもないが」

「あるいは」

数之進は小声で継いだ。

「だれもが見知っている顔ゆえ、お姿を現せぬのやもしれぬ」

「なに？」

一瞬、友は黙りこむ。じっと数之進を見つめていた。だれもが見知った顔というのはすなわち、そう、あてはまる者はひとりしかいない。無言の語らいをしばし続けた後、

「なるほど、そういう考え方もあるか」

得心したように小さく頷いた。

「あくまでも憶測にすぎぬがな。ありえぬことではあるまい」

「では、本物の頼之様はどこにいるのじゃ」

「わからぬ」

数之進は、また雑草取りを始める。もしや、と思う候補は二人いるが、流石にまだ口にするのは憚られた。それに喜内の方はともかくも、もうひとりに関しては、一角が大きな否定の声をあげるのがわかっている。言わぬが花だと思った。

「我が友は、わかっていても、わからぬと答える。つれないことよ」

「つれないと思うておるのは、おぬしだけではないやもしれぬ。文を送った二人の奥女中も、訊かれるのは頼之様のことばかり、と、すねておるのではあるまいか。利用しているようで気の毒に思えなくもない」

「おお、おまえにしては、気の利いたことを言うではないか」

揶揄するように答えて、にやりと笑った。

「そのあたりは早乙女一角、ぬかりがない。百合様にもお声をお掛けしておいた。朝顔屋敷においてお目にかかりたく候、とな。文を出しておいたゆえ」

「まことか」

驚いて、雑草を抜く手が止まる。いつもの冗談かと思ったが、一角は急に真顔になった。

「お目にかかる云々は冗談だが、今日、われらがここに来ることはお伝えしてもろうた。おれは人見藩の中では、百合様が一番、信じられると思うておるのじゃ。立ち会うたときにご気質がよう見えた」

「確かに、おぬしの言うとおりやもしれぬ。お頭に『娘を人身御供になさるおつもりでございますか』と訴えたときも、怖いほど真剣な表情をなされていた」

片桐百合と主膳、伊沢喜内と仁左衛門。二組の父子の対立は、そのまま肥後派の中の対立に繋がっている。江戸柳生を後ろ盾にした藩の重臣と、喜内を頭に据えた若い藩士たちとの間には、根深い確執がちらついていた。

「向こうも色々と知りたいことがあるやもしれぬ。たとえば、おまえの懐に隠してある手札について、あるいは、過日、訪れた浪人姿の不審な見舞い客について、などなど、われらもこのあたりで告げておく必要があるのではないかと思うてな。百合様をお誘いした次第よ」

「喜内様と寅田殿は、鳥海様のお顔を見て、驚いておられた。二人ともご存じだったのやもしれぬ」

「寅田藤之助は、いつもああいう顔をする男なのじゃ。阿呆面が得意でな。何度、あの顎を押しあげたいと思うたことか。過日はそれが叶い、ほんの少しではあるものの、すっきりしたわ」

「手厳しいな」

「殉死の真似事をしたのは、四天王の仲間入りをしたいという、浅薄な気持ちからであろうさ。おれはあやつの面を見るだけで……」

一角は突然、話をやめた。

「こちらにおいででしたか」

喜内が汗を拭きながら近づいて来る。数之進は、数人で朝顔屋敷に行くと思っていたのだが、寅田藤之助や嘉津次をはじめとして、勘定方の者や他の部屋の藩士も加わり、かなりの数にのぼっていた。左門たちも屋敷の外にいるだろうが、血気に逸って、刃傷沙汰になるのはまずい。内心、気が気ではなかった。

「ずいぶん広いので驚きました。これらの朝顔はどなたが育てられたのですか」

それでも挨拶代わりに、あたりさわりのない話題を振る。

「昨年、みまかられた大殿です。花は種類を問わず、お好きだったのですが、特に朝顔を愛でられました。変化朝顔は今に値が高くなると、見抜いておられたようです。もちろん売るために育てていたわけではありませんが」

「大殿には、先見の明があったのですね。殿もその血を引かれたのでしょうか」

「はい。やはり、変化朝顔の面白さに取り憑かれておられました。われらも舌を巻くほどの腕前で、みな密かに朝顔師とお呼びしておりました。五月頃からはほとんどこの朝顔屋敷に泊まりこみ、世話をなさっていたのが、懐かしく思い出されます」

喜内は、目を細めて、母屋の方を見やった。その横顔は老成した家老の風格をたたえてい

る。会ったときから感じていたが、やはり、とても十九には見えない。行方知れずの盟友、四天王のひとりは、今、どこにいるのか。本物の頼之はだれなのか。幕府から跡継ぎの許しがおりて、新藩主が御城にあがるその日まで、こうやって攪乱し続けるつもりなのだろうか。

喉もとまで出かかった疑問を、数之進は、かなり無理して胸におさめた。

「先程も申しあげましたが、本日はこの後、〈富井屋〉が来る手筈になっております。お頭もおいでになると思いますので、宜しくお願いいたします」

まずは眼前に迫った事柄に気持ちを向ける。片桐主膳に言われて〈岩田屋〉の清治郎に連絡をつけ、〈富井屋〉の主とここで会う段取りをつけていた。雑司ヶ谷で開かれた『朝顔合せ』の折、〈富井屋〉は肥後独特の小鉢本蔓作りの鉢を出展させている。主膳はそのことを嘉津次たちから聞き、是非、〈富井屋〉に会いたいと言っていたのだった。

「無駄足に終わるような気がしますが」

ふっと喜内が微笑んだ。なにもかも知っていると言いたげなその微笑に、数之進はあらたな疑問をいだいた。

「なぜ、そう思われるのですか」

「あ、いや、なんとなくそう思うただけで、深い意味はありませぬ」

言い訳するように答えて、数之進の手にある図譜に視線を移した。

「変化朝顔ですか」

「はい。もしかしたら、見つかるかと思い、探しているのですが、ありませぬ。同役の者たちの会話を小耳に挟んだのですが、『あれは花が桔梗のような形をしていたではないか』と言うておりました。もしかしたら、桔梗のような花を持つ変化朝顔が、咲いたことがあるのですか」

また曖昧にごまかされるだろうと思いながらの問いかけが出る。一角は聞き役にまわり、よけいな口を挟まない。

「あります」

意外にも喜内は、はっきり告げた。

「大殿が丹精こめて、育てられた花でございました。されど、ここ数年は、桔梗に似た花は現れませぬ」

「桔梗に似た花以外の変化朝顔は、今年も咲いたのですか」

鋭く訊き返した。なにげない表現の中に、真実が隠されていることが多い。喜内はこれまたきっぱりと首を振る。

「いえ、咲いておりませぬ」

「土がよくなかったのでしょうか」

独り言のように呟いた後、

「下谷の牛町火事につきましては、喜内様もご存じのことと思います。火事の後、朝顔の種を植えつけたところ、思いのほか、よいものが育ったとか。朝顔に関しましては、我が藩の焼畑農業が合うておるのやもしれませぬ」

考えながら意見を述べた。

「面白いことを申される」

喜内は笑って、周囲に広がる朝顔を見まわした。

「では、冬にここも焼き払うた方がよいのでしょうか」

「江戸においては、大火事になる懸念がありますゆえ、お勧めできかねます。されど、ご領地では試すことができるのではありませぬか。変化朝顔が出た親株の種を持ち帰り、焼いた後の畑に植えてみてはいかがかと思うた次第」

「なるほど。試すだけの価値はありそうですね。うまく変化朝顔が出て、それを苗まで育てれば、江戸に運ぶこともできる。そうか、江戸で育てることばかりにとらわれておりましたが……よい案かもしれませぬ」

「千両智恵でござる」

一角が嬉しそうに言い添えた。

「これを頼って、家を訪ねて来る者が後を絶ちませぬ。利用されるだけで無料働きということもしばしば。呆れるほどのお人好しでございまする」

「だからこそ、務まるのでございましょう」

なにが務まるのか、わかりきったうえの言葉になっている。喜内の信頼が深まったのを感じた数之進は、もう一歩、踏みこんだ問いかけを発した。

「今もちらりと申しましたが、変化朝顔の場合、それを生み出した親株の種こそが重要になると聞いた憶えがございます。我が藩においては、昨年、その種が採れなかったとも聞きました。そのようなことがあるのでしょうか」

かつて左門にぶつけた疑問が甦っている。殉死した四天王のひとり、ひとつ目の理由は幕府への訴え、そして、二つ目の理由として、数之進は『敵の目を引きつけておくためではなかったのか』と告げた。志摩守の密命を受けた四天王は、殉死という壮絶な場に藩士の目を引きつけておき、その間に残る二人がなにかをしたのではないか。

そのなにかが、今、くすぶっている。いや、ほぼ答えは見えていた。推測を確信に変えたくて、数之進は、喜内の答えを待っている。

「種は……盗まれたのです」

一瞬の躊躇と、頬が強張ったのを見のがさない。

「それは」
さらに問いかけようとしたとき、
「喜内様」
若い藩士が走り寄って来た。
「光徳院様がおいでになられました」
「まことか」
喜内は目を見開き、会釈して、慌ただしくその場を離れる。どこかのんびりした口調で、一角が言った。
「潜入しているらしいという、噂の御算用者に興味を持たれたのは、百合様だけではないようじゃ」
にやにやしている。
「下手をすれば、修羅場になるやもしれぬというに」
数之進は不安を抑えられない。せめて光徳院一行が帰るまでだけでも、なにも起きないことを祈るばかりだった。

## 二

光徳院一行の訪れは、朝顔屋敷をいっそう華やかに彩ってくれた。供は百合を含めて六人、もちろん一角に文を送った二人もいるだろう。数之進が驚いたのは、女剣士のいでたちである。髪を結い直して着物姿という、実に女子らしい装いをしていた。

「この中に惚れた殿御がいるのであろうか」

思わず呟いていた。『長良頼之』が奥御殿入りした夜、一角は、袴姿の百合を見て、断言している。

〝惚れた殿御とひさかたぶりに逢うというときに、袴姿はするまいさ。髪を結い直して女子らしく装うに相違ない〟

この言葉を思い出したからなのだが、言った本人はあっさり答えた。

「光徳院様のお供ゆえ、女剣士の姿では流石にまずいと思うたのであろう」

「されど、危険きわまりない状況であることは、百合様とておわかりのはず。考えたくないことだが、光徳院様が拐かされるということもありうるではないか。百合様のご気質を思うと、袴姿で現れるように思うがな」

「若い藩士が多いゆえ、護衛役は彼の者たちにまかせたのではあるまいか。喜内様には及ば

ずとも、そこそこ遣える者が揃うておる。いずれにしても、女子は女子らしく装うのが一番よ。おまえも野暮は言わずに、あの美しさを素直に褒め称えるがよい」

「まあ、異論はない、が」

言われたからではないが、数之進は、あらためて百合を見た。光徳院はこの強い陽射しをきらい、早々に母屋に入ってしまったため、朝顔を観賞しているのは、百合と五人の奥女中たちである。若い娘の談笑は沈みがちなこちらの気持ちまでなごませてくれる。が、時折、ふっと百合の視線が、彼方に向けられることに気づいた。

だれをご覧になられているのか。

視線を追った数之進は、はっと息を呑む。百合の視線の先にいたのは……。

「どうしたのじゃ」

一角が不審げに目をあげた。

「い、いや、なんでもない。ちと暑くてな。ぼんやりしてしもうた」

「ぼんやりしている暇はないぞ。そろそろ光徳院様に手札をお見せした方がよいのではないか」

「うむ、わたしもそれを考えていた。肥後派の中には、逆意方の他に、喜内様を頭とする喜内派があるのはあきらか。その喜内派であることを示すための訪れであるように思えなくも

ない」

「ついでに、教えていただこうではないか」

含みのある友の言葉には、本物の頼之がだれであるかを知りたいという願いがこめられている。

「おれは喜内様だと思うておるが、奥御殿に籠もりきりのお方も違うとは言いきれぬ。つまり、藩主候補は二人いるわけだ」

三人だ、と、数之進は心の中で答えた。あふれんばかりに自問が湧いてくる。それが言葉になった。

「寅田殿だが、なぜ、殉死の真似事などしたのであろうな」

「またあやつの話か」

少し離れた場所にいる藤之助を、一角はさも忌々しげに睨みつける。

「四天王に少しでも近づきたかったのであろう。あやつにとっては憧れの存在だ。されど、まともな者から見れば愚の骨頂、あの騒ぎ以来、藤之助はまともに相手にされぬ。哀れなものじゃ」

「この間、おかしなことを言うていたのだ」

溺れそうになったあの夜、見舞いと称して、藤之助も部屋を訪れている。その際、気にな

ることを口にしていた。

〝我が藩には、狼がうろうろしておるゆえ、油断できぬ。早う頼之様に、お戻りいただきたいものよ。正式に藩主とおなりあそばされれば、狼もおとなしくなるに相違ない〟

二度も狼と言ったことが、数之進は気になったが、左門のもとに届けられた文――おそらくは杉崎春馬ら『柳生五人組』による文の内容を知っているわけがない。あるいは藩内でも、柳生派のことを陰で狼と呼んでいるのかもしれないと思い、いったんは疑問をおさめた。しかし、藤之助はさらにこう告げたのである。

〝潜りこんでいる狼は、およそ五十人〟

またしても、春馬と同じような内容だった。さらに、喜内が頼之ではないのかという噂を告げ、ひとしきり世間にはよくある話と言った後、

〝屋号なども上と下を入れ換えたりしてだな、決めたりするではないか〟

唐突すぎる言葉を口にしたのだった。

「おかしいとは思わぬか」

数之進の疑問を、一角は一蹴する。

「あやつがおかしいのは、今に始まったことではない。まともに取り合うと、馬鹿を見るぞ。相手にしてもらいたくて、突拍子もないことを口にしておるのじゃ」

「されど」
「生田殿、早乙女殿」
喜内が戻って来た。
「光徳院様がお二人に、是非、お目にかかりたいと仰せになられています」
頬が紅潮しているのは、暑さのせいばかりではあるまい。光徳院に引き会わせることを素直に喜んでいた。やはり、光徳院や百合は、喜内派ということなのだろう。数之進は一角と目配せして、懐から手札を取り出した。
「これを光徳院様にお渡しいただきたく思います」
受け取った喜内の目が、文字どおり輝いた。
「承知いたしました」
少数派なればこそ、なによりも結束が求められる。御算用者の合力がはっきりすれば、あらたに加わる者も出るに違いない。飛ぶような足取りで、母屋の方に駆けて行った。
「生田殿」
嘉津次が門の方を指さしている。
「植木屋が来ておる」
「わかりました」

答えて、数之進は、一角とともに門へ向かった。どんなときにも影のごとく、友はそばにいてくれる。血腥い戦いのときが、迫っているのを感じているだけに、よけい頼もしく思えた。

「清治郎さん」

門前で待っていた〈岩田屋〉の清治郎と、短い挨拶をかわして、背後を見る。荷車に積んだ朝顔の鉢植えの他、だれもいない。〈富井屋〉を連れて来るはずなのに、いったい、どうしたのだろう。

「ひとりなのか」

数之進は訊いた。

「はい。〈富井屋〉さんは、どうしても都合が悪いと言いまして、てまえが名代を頼まれました」

「都合が悪いだと」

短気な一角は、かっとなる。

「ちゃんと文を届けたではないか、都合が悪いでは済まぬぞ。勘定方のお頭様が、どうしても会いたいと仰せなのじゃ。首に縄をつけてでも引っ張って来い」

「そうしたかったのですが、盗人に入られまして、それどころではないと」

「盗人？」
「〈富井屋〉にか？」
数之進と一角の問いかけが重なった。
「そうですが、入られたのは〈富井屋〉さんだけではありません。うちもです。入谷近辺の植木屋も、ほとんどやられたとか。下谷の御徒屋敷も何軒か入られたと聞いています。朝顔の鉢植えを盗まれまして」
「……」
二人は、思わず顔を見合わせる。片桐主膳の仕業ではないのか。江戸柳生の力を借りて、朝顔の鉢植えを盗ませたのではあるまいか。
「盗まれたのは、変化朝顔の鉢植えか」
と、数之進。
「変化朝顔も持って行かれましたが、普通の朝顔の方が多いかもしれません。まだどれぐらい盗まれたのか、よくわからないもので」
「そうか。取り込み中にすまぬな。知らせてくれれば、やめたものを」
「そんな……生田様には、お世話になっておりますので、お気遣いはご無用にお願いいたします。役に立つか立たないか、わからないのですが、変化朝顔の鉢植えを何鉢か持って参り

ました」

「中に運んでくれぬか。清治郎さんに会いたいと仰せになられたお頭は、まだお見えになっておらぬのだが、おっつけおいでになるだろう。暑い中、ご苦労であった。茶ぐらいしか馳走できぬが、とにもかくにも喉の渇きを癒してくれ」

「ありがとうございます」

門を大きく開き、清治郎が引く荷車を中に入れる。後ろを押す役になった一角が、目で道の端を指した。村上杢兵衛が深編笠をあげて立っている。清治郎の案内役は友にまかせて、杢兵衛のもとに行った。

「植木屋に入ったという盗人のことでございますか」

先んじて言った。まわりくどい話し方をする杢兵衛を、自分でも気づかぬうちに牽制したのかもしれない。

「さよう。植木屋は、人見藩の騒動には関わりないかもしれぬが、鳥海様が念のために知らせろと仰せになられたゆえ」

「雑司ヶ谷だけでなく、入谷の植木屋も、ほとんどがやられたとか。中でも〈富井屋〉がひどかったようですが、怪我をした者などはいないのですか」

花盗人は綺麗な呼び名だが、しょせんは盗人。清治郎は詳しい事情を知らないようだった

が、もしかしたら、死人や怪我人が出ているのではないか。李兵衛が広げた調書を覗きこむ。
「えー、屋号はなんであったかの」
「〈富井屋〉です」
「ふむ、〈富井屋〉、〈富井屋〉と」
老眼の李兵衛は、よく見えないらしく、いつも以上の渋面になっている。数之進は遠慮がちに申し出た。
「あの、村上様。それをお貸しくださいませぬか」
「む」
不機嫌そうに一瞥したが、小さな字を見るのが面倒だったに違いない。ぽんと投げるように渡した。
「拝見いたします」
機嫌を損ねぬよう、あくまでも丁重に答えて、調書を見る。二十軒ほどの屋号が記されていたが、〈岩田屋〉はあるのに、〈富井屋〉は記されていない。

## 三

「おかしいですね。見当たりませぬ」

「抜け落ちてはおらぬぞ、何度も確かめたゆえ、間違いない」

今度は杢兵衛が先んじて言った。先刻のお返しであろう。小さなことでも、よく気づくのだ。それでも合点がいかず、数之進は問いかける。

「昨夜、入られたばかりの見世も記されておりますか」

清治郎は、いつのことか、言っていなかった。あるいは調べが間に合わなかったということもあるだろう。そう思ったがゆえの確認だったが、杢兵衛は胸を反らすようにして、答えた。

「記してある。明け方、配下より届けられたものを写して、すぐここに来たのじゃ。だれよりも早く、だれよりも正確であるのは言うまでもない」

「そうなると」

清治郎が嘘をついたのだろうか。それとも他の見世と勘違いしたのか。あるいは〈富井屋〉になにか別の事情ができて来られなくなったため、やむなく盗人騒動を口にしたのか。

そういえば、初めて会うたときも、わたしのことを知っていたような感じだったな。

数之進は清治郎との出会いを思い出していた。生田数之進ではないと告げ、逃げようとしたのに、鋭く見抜いたあれが甦っている。

「村上様。植木屋の〈岩田屋〉と〈富井屋〉について、いささか疑念がございます。急ぎ、

お調べ願えますでしょうか」

「なにを調べろというのじゃ。〈富井屋〉は盗人には入られておらぬぞ」

返された調書をかなり目から離して、李兵衛は、どうにかこうにか屋号を読み取ったようである。見栄を張らずに老眼鏡を持ち歩けばいいものをと、一角であれば口にしたであろう言葉を呑みこんだ。

「盗人に入られたのは、人見藩のようでございまして」

声をひそめて、告げる。

「朝顔の種を盗まれたそうにございます」

もしかすると、その種が、〈岩田屋〉か〈富井屋〉に流れたのではないか。種を植えて育てた鉢が、『朝顔合せ』の場に並んでいたのではないか。図譜と似た変化朝顔だと思い、嘉津次たちは主膳に報告する。それを聞いた主膳は、〈富井屋〉に会いたいと言った。

数之進の頭では、これらのことがぐるぐるとまわっている。喜内は種が盗まれた話をする前に、片桐主膳の訪れについて「無駄足に終わるような気がしますが」と意味ありげな微笑を見せた。

「つまり、喜内様は、〈富井屋〉が出展した朝顔のことをご存じなのやもしれぬ」

声になった自問の呟きを、李兵衛が聞き咎める。

「なんの話じゃ？」

「いえ、まだ定かではありませぬゆえ、調べたうえでお知らせいたします。二軒の植木屋につきましては、いつ頃から植木屋を営んでいるのか、どんな家に出入りしているのか、親しくしている大名家などはあるのか。そういった事柄を中心にして、お調べいただければと思います」

「ふむ、またもや『お助け侍の善意につけこみ、始末しようとする輩あり』かもしれぬということか」

李兵衛は、左門の屋敷に投げこまれた文の一部を繰り返した。清治郎が刺客とは思えないが、違うとも言い切れない。いやなことだが、御算用者に近づく者に対しては、先手を打つべく、警戒の目を向けるしかなかった。

「それでは宜しくお願いいたします」

屋敷に戻ろうとした数之進を、李兵衛が慌て気味に止める。

「待て、まだ話は終わっておらぬ。じきに鳥海様もおいでになるが、未明から胡乱な輩がこの屋敷のまわりを、うろつき始めておるのじゃ。さらに江戸柳生より、家老格として、田辺新九郎という男が乗りこんで来るとか。藩邸の方も動きが慌ただしくなっておるようじゃ」

「その話は耳にしております」

それで片桐主膳の訪れが遅れているのかもしれない。危険な気配がひしひしと迫って来るのを、数之進は感じている。戦いの予感とでも言えばいいだろうか。今までの潜入捜査で身についた独特の嗅覚が、迫り来るそのときを教えていた。

「その田辺という者だがの。鳥海様によると、居合の達人である由」

杢兵衛の口から追い打ちをかけるような言葉が出る。

「刺客を兼ねた家老格よ。今日あたり、血の雨が降るやもしれぬ。わかっておろうが、油断してはならぬぞ」

「は」

一礼して目をあげたとき、こちらに近づいて来る左門が見えた。

〝案ずるな〟

とでも言うように、大きく頷き返した。それだけで数之進の身体に力が満ちてくる。怖ろしさのあまり萎えかけた心が、静かな闘争心を取り戻していた。これ以上、犠牲者を出してはならない。深々と一礼して、屋敷に戻る。

「悪い知らせか」

一角が駆け寄って来た。

「遅いゆえ、どうしたのかと思うてな」

「藩邸の方も慌ただしい動きを見せているとか。田辺新九郎が、家老格として乗りこんで来るようだ」

「杉崎春馬の言うていた田辺新九郎が家老格か。藩士も噂話をしていたが、彼の者は江戸柳生の『変化朝顔』といったところやもしれぬな。柳生新陰流だけでは飽きたらず、武者修行の旅に出て、さまざまな流派の門を叩いたとか。居合は林崎夢想流（はやしざきむそうりゅう）の印可を受けたとか。尾張柳生に、商人大名と悪態をつかれる江戸柳生の中では、変わり者やもしれぬ」

「剣術のことはようわからぬが、特に居合となると、想像もつかぬ。居合とは、どんなものなのだ」

話しながら表門から母屋をぐるりとまわって、中庭の方に歩いて行った。この屋敷は大きな木が多いため、自然に木陰ができる。藩邸よりはかなり涼しいが、今は照りつける陽射しが肌に痛いほどになっていた。

「ここに立て」

一角は、木陰に数之進を立たせると、

「よいか、通常の剣術は、互いに刀を抜いて、構えを取る。立った状態で立ち会うであろう」

落ちていた木の枝を拾い、刀に見立てて構えた。

「うむ。それぐらいは、わたしにもわかる」
「ところが、居合は刀を鞘に収めたままの座った状態、こうじゃ」
今度は深く腰を沈める。完全に座るのではなく、いつでも動けるような、数之進から見ると辛い格好だ。両手は、左手で軽く鐺のあたりを摑み、右手を刀の柄に添えるようにしている。
「これが居合った形よ。この形から即座に敵を撃つ動作に入る術を、一般に居合と呼ぶのじゃ。簡単に言うと刀を抜く技ということになるが、口で言うほどたやすい技ではない」
「居合は速いということぐらいしか浮かばぬが」
「いちいち構えを取らずに、一挙動で敵を撃つという感じが強いのであろうな。されど、抜刀の速さが居合のすべてではない。剣術は構えを取ってから技に入るが、居合は常に臨戦態勢よ。構えがないのじゃ」
「構えなきを構えとする。柳生新陰流の教えにもあったな」
数之進は一昨日、昨日と、春馬が置いていった柳生宗矩の『兵法家伝書』を熟読していた。今も懐にそれを携えている。憶えることは得意なので、蘊蓄だけはひととおり頭に入っていた。
「さよう。剣術の心得は、どれも似たようなものよ、大差ない。ただ居合の場合は、柄に手

をかけると同時に鯉口を切って、初太刀を見舞い、さらに連続して斬撃と刺突を浴びせかけ、敵を沈黙させるまで止まらぬ」

話しながら一角は木の枝で手本を示した。

「う」

と、数之進は声を詰まらせる。胸もとに突きつけられた木の枝と、迸る殺気の凄さに、冷や汗が滲んだのである。

「お陰で涼しくなった」

「居合は刀を鞘に収めたままの状態で、斃すべき相手の戦意を失わせるのが可能とされておる。そういったところも、柳生新陰流の教えに、通じるやもしれぬな」

「切らず取らず勝たず負けざる、か。なんとかして、血腥い戦を避けられぬものか」

数之進はふたたび中庭に向かって歩き出した。午前とはいえ、相当な暑さになっている。早朝から働いていた藩士たちは、木陰で休みを取っていた。

「清治郎め。暢気に西瓜を食ろうておるわ」

一角は苦笑いして、数之進に視線を戻した。

「さっさと追い出した方がいいのではあるまいか。植木屋に会いたいなどというのは、片桐様の口実であろう。田辺新九郎を連れて来るのは間違いない。朝顔屋敷が血に染まる前に、

女子や関わりのない者は、お帰りいただくのが得策よ」
「本当に関わりがないのであろうか」
考えがつい声になっていた。清治郎がひとりで来たことや、〈富井屋〉についての言葉が、どうも腑に落ちない。
「だれのことを言うておるのじゃ？」
「あ、いや、なんでもない」
「そのような暑いところで立ち話などやめろ。生田殿と早乙女殿も、こちらにおいでになられよ。西瓜がよう冷えておる。旨いぞ」
藤之助が手をあげて呼んだ。
「今、聞いたのだが、この者に『朝顔を萎れさせぬ法』を教えてほしいと頼まれた由。股間の倅を萎れさせぬ法であれば、それがしが指南できるのだがな」
揶揄するような言葉に、一角が頬を引き攣らせる。
「おのれ、千両智恵を笑い物にするか」
「よせ」
友の手を素早く摑んだ。ただでさえ妙な気配が漂っている。つまらない諍いが、大きな争いになるのだけは避けたかった。一角も察したのだろう。深呼吸して、木陰を指さした。

「おまえはそこに座っていろ。西瓜を持って来る」
「すまぬ」
数之進はおとなしく示された木陰に座る。やけに打ち解けた様子の清治郎と藤之助たちを、見るともなしに見つめていた。
〝屋号なども上と下を入れ換えたりしてだな、決めたりするではないか〟
閃きが訪れたときのように、藤之助の言葉が甦る。清治郎は盗人に入られたと言ったが、杢兵衛の調書に〈富井屋〉の屋号は見当たらなかった。嘘をついたのだとすれば、なぜなのか。熱意のある若い植木職人という印象しかないだけに疑問がふくれあがってくる。
「富井か」
この響きが、どうも気になる。数之進は地面に指で書いてみた。
とみい、いとみ。
「いとみ、いや、待てよ」
人見藩は、ひとみ、入れ換えると、とみひ。「ひ」を「い」という読み方にすれば、そう、「とみい」になるではないか!?
「……」
もしや、〈富井屋〉というのは、人見藩のことなのか？

数之進の顔をはじめから知っているような感じだった清治郎。たったひとりで、ここに来たのはどうしてなのか。危険であることを知っているからこそ、供も連れずに来たのではないのか。

「まさか」

清治郎は、以前から人見藩となんらかの繋がりがあるのだろうか。それは単なる植木職人としての繋がりか、それとも深い血の繋がりか。藤之助が不自然な言葉を発したのは、重要なことを知らせるためではないのか。

清治郎さんが、大殿の庶子だったとしたら？

かなり大胆な推測が湧いた。心ノ臓がどきどきしてくる、興奮を抑えられない。そもそも志摩守の弟君、長良頼之なる人物の母は光徳院なのだろうか。側室が産んだ子ということも考えられる。本妻の嫉妬に耐えかねて、いや、万が一のことを考えてかもしれない。大殿は密かに町人の家に養子として二男を与えた。

今まで頼之様の顔を見た者がいないのは、藩邸にも下屋敷にも住んでいなかったからなのではないか……。

「そら、西瓜じゃ。確かによう冷えて……どうしたのじゃ。暑気あたりではあるまいな。顔が赤いぞ」

「新藩主の候補が、四人に増えてしもうた」

茫然と呟いた。不可解な言動を取る清治郎。寅田藤之助と伊沢喜内は、浪人姿の左門を見て、驚いたような顔をした。深更に藩邸入りした『長良頼之』は、奥御殿に籠もったまま姿を現していない。

清治郎と藤之助は、楽しげに笑い合っている。

逆意方を攪乱する前に、数之進が攪乱されていた。

## 四

いずれにしても女子たちと清治郎を、一刻も早くこの屋敷から出さなければならない。

母屋の書院に呼ばれた数之進と一角は、訴える機会を窺っていた。案内された書院にいるのは、喜内と百合のみ。上段には御簾が下げられているが、縁側にも簾が下げられているため、強い陽射しが遮られて、庭の暑さが嘘のような涼しさに包まれていた。御簾越しの対面とはいえ、やはり、緊張するのはいなめない。

「直答を許します。二人とも前へ」

光徳院のやわらかな声が、御簾の向こうから響いた。

「は」

なかなか動こうとしない数之進に焦れて、一角が前に膝行する。それを見て、数之進も進み出た。

「御役目、ご苦労です」

労いの言葉は、むろん御算用者に掛けられたものであろう。居合の達人、田辺新九郎もここに来るのは必至。どちらが告げるか、数之進と一角が目を交わし合ったとき、

「大殿は、ほんに朝顔がお好きであった」

光徳院が言った。

「『世の名利を求めず、時流を追わず、ひたすらよい花を咲かせ、一期一会の喜びを味わうために精進努力する』。これが口癖でした。近頃は、その教えを守らぬばかりか、花を奪おうとする不届き者が出る始末。大殿もさぞ嘆いておられましょう」

花を奪おうとする不届き者。

数之進の頭には、片桐主膳と伊沢仁左衛門が浮かんでいる。この屋敷において生まれた数多くの変化朝顔、その親株の種こそが、藩の宝。この朝顔の種を手土産に、江戸柳生と手を結び、人見藩のあらたな藩主として名乗りをあげる。二人の重臣の胸には、そんな企みがあったのではないだろうか。

四天王はそれを阻止しようとしたのだ。

種は盗まれた、のではなく、四天王が奪い返したのではないか。数之進の頭には、そんな推測が浮かんでいた。

殉死に目を引きつけておき、残る二人が朝顔屋敷に走る。目的は昨年、採れた貴重な親株の種。二人は無事、種を手に入れたが、屋敷を警護していた柳生派の者と壮絶な戦いになる。柳生派を見張っていた杉崎春馬たちは、四天王のひとり――中林勝矢を救い出して、尾張藩の下屋敷に匿った。

では、朝顔の種はどこに行ったのか。

思い浮かぶのは、〈岩田屋〉の清治郎。人見藩となんらかの関わりを持つ〈岩田屋〉が、すぐに種を蒔いて、肥後独特の小鉢本蔓作りに仕立てた。数之進に近づきながら、『朝顔合せ』の準備を整え、そこに〈富井屋〉の屋号で鉢植えを出展する。片桐主膳はそのことを嘉津次たちから聞き、〈富井屋〉に会いたいと告げた。

〝無駄足に終わるような気がしますが〟

喜内の、なにもかも知っていると言いたげな微笑の意味が、はっきりわかったように思えた。

お頭をここに誘き出すための策であるならば。

なにを言っても、それこそ無駄であろう。喜内たちは肚をくくっている。光徳院や百合も

覚悟を決めているに違いない。

あのとき。

数之進は先刻、百合が見つめていた相手のことを考える。

〝相愛での。殿が元服なされた折に、ご結納をかわされたのじゃ。似合いの夫婦になられるであろうさ〟

村井嘉津次は、今も志摩守が存命しているかのような言い方をした。あれは百合と、百合が見つめていた相手のことを言っていたのではないのか。

『変化朝顔』か。

次から次へと、さまざまな事柄が浮かんでくる。嘉津次は柳生派の者から見ると、裏切り者なのかもしれない。柳生派の情報を喜内に流し、助けるような真似をしたため、刺客に命を狙われるはめになった。なにが彼の者を『変化朝顔』にさせたのかはわからない。が、殉死という、信じがたい凄絶な出来事が、少なからず関係しているのではないのだろうか。

「おい、数之進」

一角に呼びかけられて、はっとする。

「な、なにか？」

「光徳院様が、先程からお声をお掛けになられておる」

「これはご無礼つかまつりました」
居住まいを正したが、さて、なんの話だったのか。
「申し訳ありませぬ。お言葉を聞きのがしてしまいました」
平伏した数之進に、すかさず一角が助け船を出した。
「千両智恵でござる。閃けば人助けとなるありがたい智恵でござるが、今のように虜(とりこ)になることも珍しくありませぬ。我が友にとりましては、女子と同じほどに魅力があるようでございまして、どうかお許しいただきたく思いまする」
「さようか、千両智恵か。我が藩のためにも、是非、役立ててほしいものじゃ」
「光徳院様」
数之進は、じりっと膝で前に出る。
「胡乱な輩がうろついているという話でございます。早くここをお出になられて、藩邸にお戻りあそばされるのが宜しかろうと思います次第」
「どこにいても同じじゃ」
光徳院の声は、落ち着いていた。諦めなのか、悟りなのか。淡々と続けた。
「花を踏み荒らす不埒者(ふらちもの)は、どこに逃げても現れる。それならば、この屋敷と思うたのじゃ。大殿が最期を迎えられたこの屋敷で、と」

昨年は大殿、今年の三月に志摩守。相次ぐ死にも疑念がある。が、今は生きている者のことをまず考えなければならない。

「ひとつ、お訊ねいたしたき儀がございます」

遠慮がちに切り出した。話をしているうちに、光徳院の気持ちが変わるかもしれない。気は急くが、落ち着けと自分に言い聞かせている。

「言うてみるがよい」

「は。変化朝顔のことにござります。大殿も亡き志摩守様も、花作りに心血を注いでおられた由。腕前も職人はだしであられたとか」

「さよう。特に大殿の育てられた朝顔は、盆の挨拶に贈ると、先様にもとても喜ばれての。毎年、楽しみにしていると伺えば、ますます力が入るというものじゃ。わらわも花見が楽しみであった」

「それを近江商人は、自分よし、相手よし、世間よしの『三方よし』と申します」

「ほう、『三方よし』か」

「は。もうひとつ、『金がなければ智恵を出せ、智恵がなければ汗を出せ』というものもございまして」

「なるほど。それで、そのほうは智恵を出すというわけじゃな」

「御意」

小さな笑いが起きた。場がなごんだのを読み、数之進は一歩、踏みこんだ問いかけを発する。

「幻の花について、お訊ねいたしたく思います。もしや、大殿はその花を生み出されたのでしょうか。花が桔梗のような形をした幻の花を」

勘定方の同役は『朝顔合せ』のとき、嘉津次に言っていた。

〝そら、あれは花が桔梗のような形をしていたではないか〟

と。そして、その花色は、世にも珍しい色ではなかったのか。

一瞬、黙りこんだ後、

「いかにも大殿は幻の花をお作りになられた」

光徳院は答えた。

「淡い、淡い黄色、いや、黄色と言えるほど濃い色ではない、鳥の子紙の色じゃ。さよう、鳥の子色よ。大殿は『月の雫』と名付けられての。たいそう愛でられたが……思えば、あれが騒動の始まりだったのやもしれぬ」

しみじみとした呟きだった。昨年、今年と、たて続けに起きた前藩主と現藩主の死。決して作り出せないと言われた幻の花は、人見藩に騒動を運んできた。世にも珍しい花、黄色い

朝顔となれば、その親株の種には、どれほどの値がつくだろう。

「そういえば」

と、光徳院が思いついたように言った。

「『月の雫』をお披露目した折、鳥海殿もおいでなされた。聞いておらぬか」

「存じませぬ」

数之進は慎重に答える。手札を見せたことにより、互いにある程度の信頼感は抱いているが、最後の部分には踏みこんでいない。左門の話を口にした真意を、今ひとつ、つかみかねていた。そんな雰囲気を読み取ったのかもしれない。

「鳥海殿は、片桐家と昵懇（じっこん）の間柄なのじゃ」

のう、と、光徳院は百合に話を振る。

「はい。父と鳥海様は、若い頃、同じ道場で稽古をした間柄だったとか。鳥海様は新陰流でございますが、タイ捨流にも興味をお持ちになられて、町道場に通われたそうにございます。父もその道場に出入りしておりまして、盟友となりました」

「盟友、でございますか」

数之進は、一角と顔を見合わせた。知り合いであるのは知っていたが、まさか盟友とは、と驚いている。

なるほど。姉上の勘働きも、なかなかどうして、たいしたものよ。

冨美は左門の様子がおかしいことに気づいていた。三紗に『男心と梅雨の空』などと言われて、心変わりしたのではと案じていたが、左門の憂悶は他のことにあったのだ。盟友が勘定頭を務める人見藩。殉死という血の訴えに出た四天王を思えば、引くわけにはいかない。にもかかわらず、此度は引くと左門は即座に言い切った。その胸の裡はいかばかりであったろう。

友がいる藩を救うことよりも、わたしを救う道をお選びくだされた。

あらためて、左門の気持ちを感じている。こたえたい、上役の心に、四天王をはじめとする若い藩士の心に。

「お逃げいただきたく思います」

数之進は強く訴えた。

「狼の群れが、現れるやもしれませぬ。幻の花を求めて、激しい戦いになるのは必至。どうか百合様とこの屋敷をお離れいただきたく思います次第。それとも」

目をあげて、訊いた。

「『月の雫』を生み出した親株の種を、狼どもにお渡しになられまするか」

「種は、ここにはない」

「彼の者たちが、それを信じると……」

訴えの途中で、鋭い指笛が鳴った。外を見張っていた左門からの知らせであるのは言うまでもない。

「光徳院様」

女中のひとりが、不粋な客の訪れを告げる。

「片桐様がおいでになりました」

「会いとうない。帰るように伝えよ。この屋敷に入れてはならぬ」

「これは冷たいお言葉。殿のご葬儀以来、お目通りをお許しにならぬのは、なにゆえにござりまするか」

## 五

片桐主膳が姿を現した。

武者のような顔立ちに、凄みのようなものが加わり、殺気立っている。田辺新九郎だろうか、四十前後の陰気な昏い目をした男を従えていた。襲撃されたときは夜だったため、数之進は顔をはっきり見ていない。他にも刀を腰に携えたままの四人の供がいた。

「無礼であろう、刀を外さぬか」

喜内が廊下に出て、叫んだ。その声を聞きつけて、若い藩士が駆けつけて来る。穏やかな朝顔屋敷は、嵐が訪れたかのごとく、悽愴な気に覆われた。庭にも柳生派らしき者と、喜内派の若い藩士が集まって来る。

一触即発、険悪な空気が高まった。手札を出して、左門を呼ぶか。しかし、その前に死人が出てしまうかもしれない。

「しばらく、しばらく、お待ちくだされ」

数之進は廊下で睨み合う者たちの間に割って入る。まずは平伏して、田辺新九郎らしき男を見あげた。

「それがしは勘定方の生田数之進でござる。過日、存じよりの者より、この書物を賜りましてござる」

懐から柳生宗矩の『兵法家伝書』を取り出した。

「この中に記されている無刀取りに、いたく興味をそそられ申した。ちょうど光徳院様もおいであそばされまする。いかがでござろうか。御前にて、無刀取りをご披露なさるというのは」

大殿や志摩守が愛した朝顔屋敷で、血飛沫が飛び散るような戦いは避けたい。数之進は祈りにも似た気持ちを目にこめた。それが通じたのか、あるいは『兵法家伝書』を出されて心

が動いたのか。

「それがしは田辺新九郎」

新九郎が答えた。

「不束ながら、ご披露いたしたく思います」

庭に駆け降りると、集まっていた藩士が、素早く後ろにさがる。それだけの動きの中にも、危険な対立が見え隠れしていた。藩士の何人かは、刀の鯉口を切り、柄を握りしめている。新九郎はちらりと目をくれて、襷掛けをし、袴の裾をまくりあげた。

「早乙女一角がお相手つかまつる」

背後であがった声に、数之進は目を見開いた。すでに襷掛けをした一角が、裸足で庭に飛び降りる。よもや友が名乗りをあげるとは思わず、狼狽えかけたが、おろおろしていられない。

「余興じゃ」

主膳が大声をはりあげる。

「他の者は手を出すでない、光徳院様の御前ぞ」

その言葉を聞いて、数之進は少なからず安堵した。主膳の目的は、藩の宝である朝顔の種や苗の行方を知ることに違いない。この余興で血気に逸った若い藩士の気持ちを鎮め、おも

むろに話し合いの場へと臨むつもりなのだろう。もっとも逆に若い血が燃えあがってしまう懸念もある。

一角。うまくやり過ごしてくれ。

数之進は廊下で、友の立ち会いを見守る。

「さあ、どこからでも参られよ」

新九郎は、特に構えることなく、身体の力を抜いて立っていた。対する一角は刀を抜くのを躊躇する。竹刀か木刀がないか、目で探していた。

「かまわぬ」

再度、新九郎が促した。

「真剣だからこそ、こちらも気合いが入るのじゃ。思いきりかかって来るがよい」

「では」

一角は一度、深呼吸する。次の瞬間、抜く手も見せず、斬りかかった。真っ向斬りが決まったかのように見えたが、新九郎は難なく両手で刃を摑み取っている。はぁっと短く気合いをあげた刹那、一角の手にあった刀を奪い取っていた。すかさず新九郎は踏みこみ、一角の喉に手刀を突きつける。

「う」

先刻の数之進同様、声を詰まらせた。わざと反撃しなかったように思えなくもないが、新九郎は勝ち誇ったような笑みを滲ませる。

「無刀取りは、真剣白刃取りと混同されがちだが、今の動きを見ればわかるように、白刃取りとは違う。まずは斬りつけられた刃を手で捕らえる」

目で促されて、一角はふたたび軽く斬りつける真似をした。それを両手で捕らえた新九郎は、居並ぶ者たちを見まわして、続ける。

「この手で捕らえるのが、手縛と呼ばれる技じゃ。次に刀を奪い取る。これは奪刀、そして、最後に組うち、相手を制圧するまでの術技を、柳生新陰流では無刀取りと呼んでおるのよ。無刀勢、手刀勢、無手勢という三種の技から成る無刀取りを完成させたのは、宗厳殿じゃ」

「それがしも、一手、お願いいたしまする」

ひとりの藩士が進み出た。脳天を叩き割らんばかりの勢いで、刀を振り降ろしたが、たやすく捕らえられて、奪い取られる。別の藩士が斬りつけたが、これもあえなく奪い取られた。

「それがしも」

「お願いいたしまする」

藩士たちはいやでも熱くなる。柳生派にとっては、それが狙いかもしれないが、ここは血を流さずに終わらせたい。

「素晴らしい技を拝見いたしまして、それがし、感服つかまつりました」
数之進は庭に降りて、新九郎に歩み寄る。さあ、ここからが正念場だ。震えそうになる足を叱りつけ、今度は地面に平伏した。
「普通の剣法では、ただ一心に打ちこめば勝つと言われておりますが、柳生新陰流においては、我が心ばかりで打つことを僻事（ひがごと）とするとか。こちらが勝つところはすなわち敵にあるのだから、こちらは構えずに敵に従って、敵が打つように仕向ける。そこに生まれる隙を見極めて勝つことが柳生新陰流の極意である由。いかがでござりましょうや」
「さよう。それこそが極意じゃ」
「この極意をもとに、宗矩様は、人を殺す殺人剣を、人を活かす活人剣にまで高められました。活人剣の理想は相手の脅威となる剣を持たない、真の意味での『無刀』でなければならないと、この書に記してございます」
宗矩の『兵法家伝書』を掲げる。数之進の意図がわからなかったに違いない。新九郎は怪訝そうに頷き返した。
「うむ、確かに記されておる」
「宗矩様は、父君――宗厳様から受け継がれた『無刀』の精神と、自分の方からは決して攻撃を仕掛けず、相手の動きを見てから受けて立つ家康公の尊い精神を一体化して、泰平の世

の武士の作法としての剣術を確立なされました。争いは『あってはならないもの』であるとも記されておりまする」

数之進はいったん言葉を切り、力をこめて言った。

「侍の刀は、敵を攻撃するためのものではない、泰平の世の秩序を守る『護国の剣』であると、宗矩様は説いておられます」

掲げた『兵法家伝書』に、身体の震えが伝わらぬよう、左手で右手を必死に押さえつけている。無意味な争いはしたくない。宗矩もそれを説いている。その教えに逆らってでも、今、戦うつもりなのか。なにを言わんとしているか、ようやくわかったのだろう。

「それで」

新九郎は唇をゆがめた。

「どうしろと言うのじゃ」

「新藩主、長良頼之様の御前で、試合を行うのが宜しかろうと思います次第」

「御前試合か」

ちらりと、主膳を見やった。だれも顔を見たことがない新藩主、その御前となれば、藩主の顔もわかる。うまくいけば仕留めることも、とまで思ったかどうかはわからない。

「ただし」

と、数之進は声を張りあげた。

「水剣においての五番勝負はいかがかと思う次第にござります」

戦わなければ決着がつかないことは、だれの目にもあきらか。柳生派と肥後派、いや、喜内派の間には、たやすく取り除けない対立の根がある。それならば御前試合と思ったのだが、意外な申し出だったのかもしれない。

「なに？」

新九郎の頬が強張る。

「泳ぎで勝負をつけろと申すか」

「はい」

それぐらいの差をつけなければ、死人が出ることもまた、わかりすぎるほどわかっていた。数之進は肩越しに、喜内を振り返る。

「光徳院様と喜内様におかれましては、いかがでございましょうか」

「異存はない」

御簾の中から凛とした声が響いた。

「わらわの言葉は、亡き大殿と殿のお言葉じゃ。泳ぎで決着をつけるというのは、まさに妙案。時節にも合うておる。わらわも頼之殿と一緒に、みなの働きを見守ろうではありません

か」

「それがしも異存はござらぬ。田辺殿も家老格として、我が藩にご奉公なさるからには、泳ぎの心得も充分、おありになろう。いかがでござるか」

喜内が廊下まで進み出る。新九郎は突っ立ったまま、臣下の礼を取ろうとはしない。

「ひとつ申しあげたき儀がござる」

鋭く睨みつけた。

「承ります」

喜内も真っ直ぐに見据える。

「われらが勝利した場合には、おとなしく従うのであろうな。負けても退かぬというのでは話にならぬ」

「むろん退く覚悟でござる」

「あてにならぬゆえ、念書をいただきたい」

「なんと!?」

「ふざけるな」

色めきたった藩士を、喜内が視線で止めた。

「念書を渡します。されど、そちらの念書もいただきたい。あてになりませぬゆえ」

ちくりとやり返したのを聞き、藩士の表情がやわらぐ。新九郎は不満げだったが、異は唱えなかった。

「五番勝負は承知したが、いつ、勝負をつけるのか。今更、水練や剣術の稽古をしたところで間に合うまい。明日に決めたいが、いかがでござるか」

明日。

数之進は内心、舌打ちする。何日間か稼げれば、その間に状況が変わるかもしれないと思ったのだが……淡い望みを打ち砕かれて、喜内に託す結果となっていた。

「承知いたしました」

その答えが、緊迫した対峙を終わらせる。今日はどうにか凌げた。しかし、明日はどうなるかわからない。立とうとしてよろめいた数之進に、一角が手を差し伸べる。

「大丈夫か」

「こ、腰が抜けてしもうた」

大役を果たしたのも束の間、明日には、藩邸の池が血に染まるかもしれない。柳生派と喜内派は、最後まで睨み合っていた。

# 第七章　善く游ぐ者は

## 一

その夜。

「志摩守様の密命というのは、朝顔屋敷から藩の宝、つまり、親株の種を奪い取れということだったのであろうか」

一角の言葉に、数之進は同意する。

「おそらくは、そうであろうな」

時刻は四つ（午後十時）になる頃であろう。三紗から至急の文を受け取った数之進は、やむなく一角と藩邸を出たのだった。闇に沈んだ日本橋の大通りを、かなりの早足で進んでいる。早く騒動を片づけて、藩邸に戻らなければならない。気が急いていた。

「それにしても、喜内様はようわからぬお方じゃ。結局、頼之様であることを打ち明けては

くださらなんだ。われらは手札を見せたというに」

さも恨めしげな一角の言葉を、穏やかに継いだ。

「仕方あるまい。どこに狼の目が光っているかわからぬ。若い藩士の中にも、喜内派を装っている者がおるやもしれぬ。用心の上にも用心を、と、考えるのは当然であるように思うがな」

「もしや」

一角はあたりを見まわした後、

「だれが頼之様であるか、すでにわかっておるのか」

小声で訊いた。後ろにいるのは、左門の配下のみ。花火が終われば夕涼みの客も消えて、道を歩く人影も見あたらない。それでも壁に耳あり障子に目ありと、あたりに気を配ることを忘れていなかった。

「まだわからぬ」

「されど、新藩主の候補が、四人に増えたと言うていたではないか。喜内様と奥御殿に籠もりきりの『頼之様』で、二人しかおらぬと、おれは思うのだがな」

「喜内様のことを悪し様に言うた者はひとりしかおらぬ。それに、昨日、百合様はそのお方に熱い眼差しを注いでおられた。人見藩の中で、百合様が一番信用できると言うたのは、お

ぬしではなかったか」

「言うた、それは間違いない。おれは今でも百合様こそが、と、待てよ、喜内様のことを悪し様に言うた者か」

思い出しかけたようだが、「まさか」と思ったに違いない。

「朝顔の種についてはどうじゃ」

一角は話を変えた。

「お助け侍はご親切にも、朝顔の種を守るために、あらたな策を喜内様に授けた。しかも無料でな」

「誘い出されて狼が動くやもしれぬ。無事にお戻りなされればよいのだが」

「鳥海様たちが護衛役になるであろうさ。そんなことよりも、千両智恵じゃ。かねてより、おれは安売りしてはならぬと言うているではないか」

「仕方あるまい。喜内派が負けたときには、藩の宝を渡すと念書に記した由。今宵のうちに運んでおかねばならぬ。敵もそれを考えて、申し入れたのであろう。いずれにしても、今夜から明日にかけてが山場だ」

「だからこそではないか。われらにだけは、在処(ありか)をそっと耳打ちするべきだと思うがな。さすれば、鳥海様たちが、命を懸けてお守りするものを」

「目立ちすぎる。ここにありますと教えているようなものではないか。隠密裡に動いてこそよ」

「宝の在処は気にならぬと言うのか」

「気にならぬことはない、が」

数之進は、角を曲がったところで立ち止まる。日本橋を渡って、通(とおり)一丁目に着いていた。大通りの両側に建ち並ぶ見世は、提灯や暖簾を仕舞い、くろぐろとした闇に覆われている。昼間は人通りの絶えない区域だが、角を曲がった路地の奥は、いっそう深い闇に染まっていた。

「正直なところ、今は、姉上たちの方が気になる」

「と呟きながら、一晩中、そこにおるつもりか」

一角は相変わらずの早足で、傍らを通り過ぎて行く。苦労性と貧乏性の業を無理に押さえつけ、数之進も後に続いた。木戸のところまで進み、顔だけ突き出して奥の様子を見る。

「姉君たちの家は暗いが、鳥海様の家に、明かりが点いておるぞ」

一角の言葉で、思わず胸を撫でおろした。

「おいでになっておられるのやもしれぬ」

待っているのは左門に違いない。三紗からの文ということで緊張したが、そうではなかっ

たのだ。数之進は左門の家の戸を叩いた。
「遅くなりました」
「待っていたのですよ」
すぐさま戸を開けたのは、三紗である。
「そなた、具合はどうですか。危うく死にかけたと聞きました。姉上は待ちくたびれて、先に寝(やす)んでしまいましたが、わたくしは、もう、心配で、心配で」
なぜか異様に頭を近づけて来る。話しながらも、目はあらぬ方を見やり、頭を数之進の眼前に突き出していた。首でもひねったのだろうか。
「はあ。どうにかこうにか冥土の入り口から戻って参りました」
「とにかく、おあがりなされ。お腹は空いておりませぬか、素麺(そうめん)でも茹(ゆ)でましょうか。まだ竈(かまど)の火は落としておりませぬ。簡単なものなら作れますよ」
「い、いえ、腹は空いておりませぬ」
「喉が渇いておりましてな。茶を一服、いただければと思いまする」
「畏まりました」
身体をどけた隙に、二人は中に入った。この間以上に機嫌のよい姉を見て、数之進は震えあがる。

「おかしい」
「わかっておる。まずは落ち着け」
友に宥められて、汗を拭った。三紗は湯を沸かしながら、明るく告げる。
「文には記しませんでしたが、お世津さんのことなのです。ここしばらく思い詰めた様子で、何度も訪ねて来ましたのに、そなたは忙しくて話ができませんでした。代わりに話を聞いたところ、どうも『見世を閉めようか』などと考えている様子」
「えっ、お世津さんが？」
奉公に気を取られてしまい、世津のもとを訪ねていなかったことを思い出していた。三紗はいつになく親身になっている。
「そうなのです。これはまずいと思いまして、あと四、五日、待つように言いました。そうすれば、そなたも相談に乗ることができるのではないかと思いまして……あら、いけない。お茶葉を持って来るのを忘れていました」
と、向かいの家に戻って行った。
「……」
数之進は茫然自失、声も出ない。機嫌がよいどころではなかった。今までの三紗であれば、待ってましたとばかりに世津の見世の乗っ取りを企んだであろう。居抜きで手に入るのだ。

伊兵衛に金を出させて、いよいよ自分の見世をと考えて当然の流れである。ところが、三紗は世津の身を本気で案じていた。あれでは、まるで……。

「姉様が善人になってしもうた」

ようやく掠れ声の呟きが出た。

「うむ。おれも背筋が寒うなったわ。機嫌のよい三紗殿も怖いが、善人の三紗殿は、限りなくおそろしい」

ぶるるっと一角は身震いして、続ける。

「されど、理由はわかっておるゆえ、案ずるな」

「理由とは？」

「簪よ。挿していたではないか、新しい銀の簪を」

「言われてみればだが、ああ、なるほど。簪を見せたくて、あのように頭を押しつけて来たというわけか」

「さよう。おそらく杉崎春馬にもろうたのであろうな。当分の間、三紗殿は善人に化け続けるであろうさ。カラタチバナではないが、『七化の三紗』よ。うまくいかなかったときは、どうなることやら、じゃ」

「……おそろしいことだ。考えたくもない」

「お待たせいたしました」
三紗が戻って来る。
「は、はいっ」
背筋を伸ばした数之進を見て、花がほころぶような微笑を返した。
「そのように緊張することはありませぬ。ここはそなたの家も同然ではありませんか。ゆるりとなされませ」
「は」
と、数之進はますます緊張する。額に浮かぶ冷や汗を、一角が自分の手拭いで拭いてくれた。拷問で石を抱かされた罪人のごとく、無意識のうちに歯を食いしばっている。次になにがくるのかと、冷やひやしていた。
「こう暑いと、すぐに湯が沸きますね。そうそう、そなたにこれを渡してほしいという言伝もあったのですよ。午頃に若いお侍が、持って来たのですけれど」
三紗は、抱えていた細長い箱を上がり框に置いた。
「若い侍」
数之進が訊き返す前に、一角が問いかける。
「顔見知りの者でござったか」

「いえ、このあたりでは、お見かけしたことのないお顔でございました。年は、そう、二十二、三。浅黒い肌をした立派な身なりの若侍でしたよ。だれかに追われてでもいたのか、しきりに周囲を気にしておられました。必ず今夜中に渡してほしいと、何度も念を押されましたので、急ぎ文を送ったのです」

「もしや、此度の御用とはこれでございますか」

「はい。それと、お世津さんのことです」

三紗の答えに、身体中の力が抜けた。騙りに遭ったのでもなければ、また厄介事に巻きこまれたわけでもない。安堵とともに、どっと疲れを覚えている。

「なんにしても人騒がせなことよ」

一角の呟きが聞こえたに違いない。ぴくりと三紗の眉が動いた。きつい悪態返しがあるかと思いきや、鼻歌まじりに茶を淹れている。

「不気味だ」

「同感だが、今はそれを見てみるとしようではないか」

「うむ」

数之進は箱から掛け軸らしきものを出した。一角が行灯の側に立ち、掛け軸を下に落とすようにして広げる。現れた絵を見て、息を呑んだ。

「これは」
行灯の明かりに照らされて浮かびあがったのは……。
血にまみれた達磨の絵だった。
まさか。
おそろしい想像が湧いた。もしや、そうなのだろうか。これを言付けた者は、盟友にそんな残虐な真似をしたのだろうか。
「血達磨ではないか」
一角も驚きに目を見開いている。
「なんだ、これは。だれが、このようなものを」
「答えだ」
数之進は言った。
「おそらくは喜内様のな」
薄明かりの中に浮かびあがる血達磨の掛け軸。凄惨な死に様を想起させるそれは、明日の戦いを暗示しているようでもあった。
それでも逃げることはできない。
気持ちを引き締めて、二人は藩邸に戻る。

# 二

嵐の前の宴か。

藩邸では、ささやかな宴が催されていた。御前試合の折、光徳院と長良頼之も見物するとあって、池を見渡せる場所に、仮の見物席が造られている。その労をねぎらうためと、鼓舞するためだろう。若い藩士たちは仮屋を造りながら、焼酎を飲んでいた。

「おお、戻られたか」

嘉津次が立ちあがり、数之進たちを出迎えた。

「遅いので、案じておったところよ。ささ、こちらへお座りなされ。喜内様もそろそろお戻りになられる頃じゃ」

なにかが吹っ切れたのか、いや、好きな焼酎のお陰で気分が高揚しているだけかもしれない。やけに、にこやかだった。柳生派でここにいるのは嘉津次だけだが、喜内派の者たちは特に気にするふうもなく、なごやかに談笑している。

「お二人に会わせたいお方がおるのじゃ」

嘉津次は、他の輪にいた若者を連れて来る。年は二十二、三、浅黒い肌とがっちりとした体軀の持ち主だ。眉毛が濃く、見るからに『肥後もっこす』という感じがする。

「中林勝矢殿よ。お二人も噂は耳にしたことがあろう。さよう、あの『人見の四天王』のおひとりじゃ」

「お初にお目にかかりまする。それがしも、お噂はかねがね耳にしており申した。こうやってお目にかかれましたこと、ありがたく思います次第」

勝矢は真っ直ぐ目を見つめていた。だれから噂話を聞いたのか。もしかすると、杉崎春馬たちではないのか。仲間が殉死した夜、朝顔の種を奪ったときに、春馬たちに助けられたのではないか。そして、過日、偽の『長良頼之』として、藩邸入りしたのではないのか。

あふれ出そうになる疑問を胸に挨拶を返した。

「ご丁寧なご挨拶、いたみいります。それがしは生田数之進、こちらは盟友の早乙女一角でござる」

「行方知れずになったと聞き、案じており申した。ご無事でなによりでござる。中林殿も御前試合に、出場なさるのでござるか」

一角の問いかけに、勝矢は小さく首を振る。

「それがしの出番などありませぬ。殿(しんがり)を務めますのは、我が友、喜内。早乙女殿は四番手をお務めなされると聞きましたが」

家老の嫡男を呼び捨てにできるそれが、盟友の証。一角は笑顔を返した。

「新参者ゆえ、他の方にとお願いしたのでござるが、喜内様にどうしてもと。いつでも代わりまするぞ。中林殿こそが適任者、喜内様がお戻りなされた折に、今一度、進言させていただきまする」

「いえ、早乙女殿の方が、宜しかろうと存じます。それがし、剣術はともかくも、水練をちと怠けており申した。水の神にきらわれるやもしれませぬ」

「今宵の御役目は……無事、果たされたのでございまするか」

数之進は小声で探りを入れた。喜内がもっとも信頼を寄せているのは、言うまでもなく勝矢であろう。姉の家に行ったのは、彼の者ではないかと考えていた。血達磨の掛け軸を届けたその足で、別の場所にも足を向けたのではないか。おそらくは……本物の朝顔の種を隠してある場所に。

「は。ひさかたぶりに和尚を訪ね申した」

勝矢は謎めいた言葉を返した。間違いない、掛け軸を届けたのはこの者だ。数之進が喜内に〈富井屋〉と片桐主膳が会う段取りの話をしたとき、

〝無駄足に終わるような気がしますが〟

と喜内は答えた。それらの事柄から、種は盗まれたのではなく、四天王が奪ったのだろうと数之進は推測している。御前試合にそなえるとともに、左門に藩の宝を託すべく、隠して

おいた種を勝矢が取りに行ったのは、ほぼ確かであろうと思われた。

今の口ぶりからすると、その宝は菩提寺の和尚の手にあるのやもしれぬ。

亡き大殿の形見とも言える親株の種。『月の雫』と名付けられた鳥の子色の朝顔は、皮肉にも争いの火種となった。しかし、その騒動も御前試合が終われば終わる、いや、なんとしても終わらせなければならない。

「勝矢殿」

「こちらにもおいでなされよ」

あちこちから声が掛かる。寅田藤之助も上機嫌といった様子で、焼酎を飲んでいた。勝矢の生還を藩士たちは心から喜んでいる。士気がいっそうあがるのは確かだろう。

「われらも少しだけお相伴に与ることにいたします」

数之進が歩きかけた瞬間、鋭い笛の音が夜気を切り裂いた。左門の配下に違いない。二度、三度と響いた笛の音に、一角は早くも走り出していた。

「表門の方じゃ」

「待て」

数之進も慌てて追いかける。喜内ではないだろうか。彼の者は自ら囮役を買って出ていた。昼間のあわやの騒ぎの後、数之進の助言に従い、清治郎と一緒に〈岩田屋〉に向かっている。

この笛はおそらく喜内の帰着を知らせるものに違いない。鳴り続ける笛の音に導かれるように、喜内派の者たちも中庭を突っ切って行った。

「早く門を開け」

一角が門番に向かって叫んだ。数之進は横の潜り戸から外に出る。刃鳴りの音が、響きわたっていた。居待ちの月の下、激しい斬り合いが起きている。鳥目の数之進は、人影はわかるものの、顔を判別できない。

「おまえは喜内様を」

一角が背中を軽く押した。ほとんど同時に大声をあげて、友は賊のひとりに躍りかかる。数之進は喜内の腕を摑み、開かれた門の中に走った。ぬるりとした血の感触に、肝が冷えかけたが、・

「お待ちくだされ、〈岩田屋〉が」

喜内の言葉で、いっそう凍りついた。

「清治郎さんもいるのですか」

「はい」

「数之進、清治郎じゃ」

ふたたび一角の大声が響いた。倒れるようにして、清治郎が駆けこんで来る。数之進は清

治郎の腕を摑んだ。
「早くこっちへ」
庇うように抱えこんだとき、二人の背後から賊のひとりが襲いかかる。
「危ない！」
間一髪、嘉津次が刀で一撃を受け止めた。門から中に入ろうとした敵を、藤之助や若い藩士とともに外へ追いやる。喜内一行が逃げこんだのを見届けるや、素早く門を閉め始めた。今までは勘定方としてしか見ていなかったが、機敏な動きと剣捌きに、江戸柳生だったことが表れている。
「お怪我をなさいましたか」
数之進は喜内の傷を見る。肩口から胸にかけて斬られていた。その血が腕を伝い、数之進の着物の袖までもが赤く染まっている。
「掠り傷でござる」
「医師が来るまでご辛抱を」
手拭いを傷口にあて、一時的ではあるが出血を抑えた。金瘡医に縫ってもらわなければこの血は止まらないかもしれない。門前ではまだ騒ぎが続いている。が、次第に刃鳴りの音が聞こえなくなっていった。

「清治郎さんは大丈夫か」
数之進はただひとりの町人に訊ねる。月明かりを受けているからなのか、怖ろしさのためなのか。清治郎の顔は青白く見えた。
「は、はい」
「なぜ、付いて来たのだ」
問いかけながら、何度目かの「もしや」が湧いていた。清治郎は大殿の庶子であり、弟君の頼之なのではないか。あるいは敵を攪乱するための策だろうか。背後に見え隠れする人見藩との強い絆、清治郎はなにも答えない。
「賊は逃げたが」
一角が「来い」と目で呼んだ。嘉津次に喜内をまかせて、数之進は、ふたたび門の外に出る。左門が待っていた。
「喜内殿が持っていた木箱を盗まれた」
「藩の宝でございます」
わざと大きな声をあげた。残っているのは、左門の配下と喜内派の藩士だけだったが、数之進は気を抜かない。左門ともども門から離れた場所に移動する。一角が注意深く周囲の気配を探り、ここなら大丈夫というように頷き返した。

「血達磨の掛け軸が、姉上の家に届けられました」
囁き声で告げる。それだけで充分だった。
「なるほど、そういうことか」
「鳥海様におかれましては、速やかに、そして、密やかに、長良家の菩提寺の和尚を訪ねていただきたく思います」
「わかった。それにしても、〈岩田屋〉は、なにゆえ付いて来たのであろうな。杢兵衛に調べさせておるが、どうも合点がゆかぬ」
上役も同じ疑問を抱いていた。中林勝矢が姿を現したことによって、数之進の中では、藩主候補は三人に減っている。が、ここでそれを口にするわけにはいかない。
「一角とともに、最後まで見届ける覚悟でございます」
深々と頭をさげて、友と一緒に藩邸の中に戻った。喜内のまわりには、藩士たちが集まっている。口々に報復を訴えていた。
「柳生派の者に制裁を」
「われらはこれから参ります」
「ならぬ」
喜内は鋭く制した。

「夜明けを迎えれば、いやでも勝負の時が訪れる。相手がどのような策を用いようとも、われらは正々堂々と戦うのだ。肥後もっこすの気骨を忘れてはならぬ」

「五番手はいかがなさるおつもりか」

藤之助が訊ねる。大将である喜内が、傷を負ってしまった以上、だれかがその代わりを務めなければならない。

「勝矢」

喜内は躊躇うことなく指名する。

「頼む」

「承知した」

と、勝矢は緊張した面持ちで答えた。五番勝負は粛々と執り行われるだろうが、それでおとなしく引きさがる相手とは思えない。姿を現すであろう長良頼之を仕留めるべく、狼の群れが牙を剝くのは必至。その牙は容赦なく御算用者にも向けられる。

「柳生派の間には、われらほど強い絆がありませぬ。ひとり、ひとりがばらばらであるため、孤独な戦いを強いられます」

数之進は遠慮がちに意見を述べた。

「たとえ仲間が負けても、絶対に責めてはなりませぬ。ようやったと手を叩き、気持ちを盛

りあげるのが大事でございます」
「我が命、天に在り」
嘉津次が大声を張りあげた。
わたしの運命を定めるのは天です。
そう告げたうえで、宣言する。
「正々堂々と戦うのじゃ」
「おう！」
藩士たちの声が重なる。
勝負のときが、刻一刻と迫っていた。

三

早朝から始まった泳ぎの御前試合は、一戦目が喜内派の勝利、二戦目、三戦目と柳生派の勝利が続いた。二対一で喜内派は押されている。
「気にするでない。おぬしはよう頑張った」
藤之助が、戻って来た三戦目の藩士に労いの言葉を掛けた。数之進の助言を生真面目に実行しているように見えたが、ちらりと一角に目をくれる。

「あとは早乙女殿次第よ。万が一にも負けられぬな。負ければそこで勝負は終わりじゃ。五番手に繋げるためにも、死に物狂いで戦うてもらわねば」
「こやつ、二度も負けを口にしおって」
拳を握りしめた一角を、数之進は宥めた。
「寅田殿なりの応援よ。おぬしの気質をよく知るがゆえだ。そら、武者震いがおさまったではないか」
「お」
一角は自分の手をしみじみ見る。
「まことじゃ」
「わざと怒りを煽って、気持ちを落ち着かせる。寅田殿はなかなかの策士よ。ふだんどおりにやれば大丈夫だ、一角。わたしも他の者たちも、おぬしを信じておる」
「まかせておけ」
下帯を締め直して、友は、池に身を沈めた。相手も飛びこみ、少しの間、身体を水に馴らすための泳ぎが行われる。数之進は昨夜、設けられた仮屋を見やった。にわか仕立てではあるものの、屋根もちゃんと板で覆われている。壁は葦簀と簾だが、通り抜ける風がさぞ爽やかだろう。見るからに涼しげだった。

勝負が終わった後、あの場所に座した者こそが次期藩主ということか。

光徳院の隣席――長良頼之の席は空いたままである。視線を転じれば、池のまわりには藩邸中の藩士が集まっていた。柳生派はざっと七十人、喜内派も若い藩士を中心にして同じぐらいの数がいる。さらに中立派とでも言えばいいだろうか。片桐主膳、伊沢仁左衛門といった上級藩士も顔を揃えていた。流石に百合をはじめとする女子たちは同席していない。気温があがるとともに、藩士たちの気持ちも高まっていた。

田辺殿は五番手ではないのだろうか。

黒い着流し姿の田辺新九郎に、いやでも目が留まる。大将役を務めるのは、彼の者だと思っていたのだが、支度をしていなかった。蹲踞（そんきょ）したまま動かない姿は、うずくまる黒い狼のよう。不気味なことこのうえない。

敗北が決まったとたん、斬りつけるつもりではあるまいな。

不穏な気配を感じていたが、ひとりだけ見物人に加わっている町人、〈岩田屋〉の清治郎にも疑問の目が向いた。同席を許したのはすなわち、数之進が考えるとおりの身分だからなのだろうか。清治郎は仮屋の傍らで、事の成り行きを見守っている。

「早乙女殿。気持ちを楽にして、参られよ」

喜内が池の畔に屈みこんだ。縫うほどではなかったようだが、あの出血からして、軽傷と

は言えないだろう。冴えない顔色をしていた。それでも大将役として、負けた藩士にもあたたかい言葉を掛けている。

「ありがたきお言葉を賜り恐悦至極、早乙女一角、命を懸ける覚悟でござる」

一角が答えるのと同時に、

「四戦目じゃ」

審判役のひとりが声をあげた。喜内派と柳生派からそれぞれ二名ずつ、合計四名が目を光らせている。一角の付き添い役は、もちろん数之進だ。用意しておいた竹刀を渡して、言った。

「平常心だ、忘れるな」

「わかっておる」

一角は竹刀を掲げながら、池の真ん中まで泳いで行く。数之進を守るために泳げないふりをしたが、今は地面を歩くかのような動きだった。が、相手も負けず劣らず、なめらかな泳ぎを見せている。

「柳生家の門弟が、泳ぎにも長けているとは、いささか驚きました」

数之進は嘉津次に囁いた。

「武術はなんでもござれじゃ。此度は特に泳ぎが達者な者を選んでおる。早乙女殿も苦戦を

強いられるやもしれぬぞ」

「始まります」

我知らず、ぐっと手に力が入る。戦いは三本勝負、はじめに二本、取った方が勝ちとなるのは言うまでもない。合図を受けて、四戦目が始まった。

「はぁっ」

一角は気合いをこめて、竹刀を叩きつける。相手はいち早く横に泳いで避けたが、動いた先に一角はふたたび竹刀を振り降ろした。

「一本」

審判役が手をあげて、まずは一本目を先取する。わあっという歓声が、喜内派からあがった。一角と敵は、もとの場所に戻る間も睨み合っている。立ち泳ぎをしながらなので、悠長なように見えるが、水面には凄まじい殺気が迸っていた。

「今の調子でいけ」

周囲の歓声に負けじと、数之進も声を張りあげた。今度は相手の方が先に動いたが、一角は宙でそれを受け、弾き返した。その勢いが強かったのだろう、相手の手から竹刀が飛んで、水に沈む。

「一本」

二本、取って、呆気ないほど簡単に勝負がついた。とはいえ、五分に戻したにすぎない。勝敗は最後の一戦にかかっている。

「見事であったぞ。流石は一角、わたしも誇らしい」

数之進は友に手を差し伸べて、池からあがるのを助けた。手拭いで身体を拭き、とりあえず浴衣を肩に掛けてやる。喜内派は興奮を抑えきれず、躍りあがって喜んでいた。対する柳生派は、新九郎が一喝している。

「なさけないやつめ、それでも江戸柳生の門弟か。おまえは今日限り破門じゃ。どこへなと行くがよいわ」

一戦目のときもそうだったが、厳しい言葉を浴びせかけられて、門弟たちは逆に奮起した部分もある。だが、その後、二戦目、三戦目と勝ちを取ったにもかかわらず、新九郎は労いの言葉ひとつ掛けなかった。四戦目が終わった今は、陰鬱な空気が満ち、門弟たちは押し黙っている。

「冷たい男よ」

嘉津次が吐き捨てるように言った。

「あんな大将のもとでは、だれも命を懸けぬ。五番手を務めるのはだれなのじゃ、田辺殿ではないのか。怪我をしたのであればともかくも、なぜ、支度をしておられぬのか。大将が出

て来ぬのでは話にならぬわ。今からでも遅うない。おぬしたちもこちらへ来ぬか」
「村井、きさま」
新九郎がじりっと前に出る。喜内派は色めき立った。
「やるか」
「受けて立つぞ」
「待ちや」
仮屋にいた光徳院が割って入る。姿は見せないが、中で立ちあがった気配がした。続いて声を発する。
「勝負は水剣でと、申し合わせたではないか。互いに念書も記した。残るはあと一戦、その勝負に懸けよ」
「そのことでござるが、最後の勝負は池ではなく、御前にて行いたいと思う次第。小堀流踏水術が盛んな人見藩を立てて、四戦は約定どおりに行い申した。最後の一戦ぐらいは、われらのやり方でも宜しいのではござらぬか」
新九郎がいきなり話し掛けた。色男は唇をゆがめ、嘲るように嗤っている。あきらかに挑発していた。
「無礼であろう」

喜内がさっと顔色を変える。
「直答は許さぬ、後ろに退がらぬか。お答えがほしいときは、それがしを通して話せ」
「勝負は五分と五分」
新九郎は引きさがらない。
「いかがでござろうか。水剣など、しょせんは子供騙しよ。まともな勝負では負けるとわかっているゆえ、四の五の理屈をこねたにすぎぬ」
と、数之進を一瞥した。
「『護国の剣』を持ち出して、煙にまいたつもりらしいがな。ここぞというときに戦わぬ者を侍とは呼べぬ。肥後もっこすが聞いて呆れるわ。人見藩は揃いも揃って腰ぬけばかりではないか」
「……」
喜内は脇差の柄を握りしめようとしたが、その手を寅田藤之助が摑んだ。
「それがしがお相手つかまつる」
「な、なに？」
目を剝いたのは、一角だけではない、藩士もざわめいた。意外な流れに面くらっている。
新九郎も怪訝な目を投げていたが、目顔で合図し、門弟や藩士を退けた。仮屋の周囲は一瞬

のうちに人がいなくなる。

## 四

「止めろ、数之進。手札を出せ」

一角はそう囁いたが、数之進は躊躇していた。

「されど」

「早うせぬか。腹の傷もまだ癒えておるまい。あやつは間違いなく死ぬぞ」

「戦ってみなければわからぬ。それに、認めさせるには戦うしかない」

「わけのわからぬことを言うでない、相手は名を知られた……」

会話は戦いによって遮られる。対峙したと思った瞬間、藤之助は抜刀して、突き進んでいた。低く腰を落とした新九郎はまだ抜かない。ぎりぎりまで引きつけて、一撃を叩きつけるつもりなのだろう。藤之助は猪のように迫り、そのまま行くように見えたが、

「え？」

数之進の視野から突如、藤之助が消えた。新九郎は刀を抜いていたが、やはり、目標を見失ったに違いない。素早く後ろを振り向きざま、逆袈裟斬りを放った。驚いたことに藤之助は、ほとんど垂直に跳び、新九郎の頭上を軽々と飛び越えていたのである。天狗のような若

者は、放たれた逆袈裟斬りを難なく弾き返した。

「おおっ」

と、これまた驚愕したのは一角だけではない。居並ぶ者たちは、またたきするのも忘れて二人の立ち会いを見つめている。抜かせてしまえば居合など恐るるに足りぬとばかりに、藤之助は激しく斬りこんで行った。新九郎は距離を取ろうとして退がるのだが、そうはさせじと攻め続ける。

タイ捨流の戦い方だ。

数之進はごくりと唾を呑む。江戸柳生はもちろんのこと、藩士たちもうつけの藤之助がと目を瞠っていた。伊達男は外見どおり、どちらかと言えば美しい剣技という印象を受ける。居合に磨きをかけたのは、年とともに体力の衰えを感じていたからかもしれない。酒と女でなまった身体での長丁場は避けたいというのが本音だろう、押され気味だった。

「くっ」

新九郎がふたたび後ろにさがったとき、凄まじい一撃が襲いかかった。藤之助は三間ほど空いた距離を一気に縮め、刀を振り降ろしたのである。新九郎は摺りあげる剣で襲いかかる剣をはねあげようとしたが、がつっと鈍い音が響きわたった。藤之助の力に負けて、刀が折れていた。

「田辺様」

近習らしい男が、すかさず自分の刀を投げる。新九郎が受け取るやいなや、藤之助は鋭く斬りつけた。怒濤のような攻めに、色男は呼吸があがり始めている。それでも苛烈な斬撃は一瞬たりとも止まらない。振り降ろしながら、途中で摺りあげる剣に変化させたりもする。まさに刀は藤之助の一部と化していた。

「今のうちに光徳院様と清治郎を」

一角の言葉で、数之進は我に返った。押され気味の柳生派は、あきらかに殺気立っている。隙あらばと狙っているのが、数之進にも感じられた。

「ご無礼つかまつります」

仮屋の光徳院に声を掛ける。

「奥御殿の方に、お戻りあそばされるのが宜しかろうと存じまする。不束ながら、それがしが案内役を務めますゆえ」

「生田殿」

藩士を掻き分けるようにして、百合が走って来た。女剣士の姿をしているのは、ともに戦おうという気持ちの表れかもしれない。

「光徳院様は、わたくしが」

「お願いいたします」

数之進は頭をさげ、清治郎の方に向かった。ほとんど同時にどよめきが湧き起こる。刀を叩き落とされた新九郎が、脇差を抜き、投げたのだった。藤之助は難なくそれを弾き返して、深く踏みこんだが、

「そこまで」

片桐主膳の声で、摺りあげる剣がぴたりと止まる。見事な自制心だった。己を失っていないのは、鍛錬の賜物であろう。数之進は素早く手札を出した。

「両目付鳥海左門景近様が配下、幕府御算用者、生田数之進である」

「同じく早乙女一角」

友が傍らに張りつき、呼子を鳴らした。二人に対しては「もしや」という疑問を持っていたのかもしれない。藩士の顔に動揺はなかった。数之進は真っ直ぐ、藤之助のもとに駆け寄る。

「ご無礼つかまつります。亡き志摩守様の弟君、長良頼之様とお見受けいたしましたが」

その言葉に、一瞬、場が静まり返った。驚愕と当惑、そして、狼狽。慌てていないのは、伊沢喜内と中林勝矢と百合だけだったかもしれない。主膳と家老の伊沢仁左衛門ですら茫然自失という様子だった。

「まさか」
これまた一角が、驚愕の代弁者となる。御算用者の手札を出したときには、平然と受け止めた者たちの間にも混乱が広がった。
「まことなのか」
「信じられぬ」
不審の目と囁きに、藤之助は刀を収め、毅然と顎をあげて、答える。
「余は、亡き志摩守の弟、長良頼之である。長い間、そのほうらを欺いたことに関しては、ただただ詫びるしかない。許せ」
両足を軽く開き、深々と頭をさげた。混乱が喜びに変わるのにさほど時はかからない。手を取り合ってとなりかけた刹那、
「死ね！」
藩士のひとりが刀を突き出した。喜内派に潜りこんでいた『交ざり者』であろう。藤之助は抜く手も見せず弾き返すと、深く踏みこんで、逆袈裟斬りを叩きつける。のけぞった刺客の血飛沫が、次の戦いの呼び水になった。
「あやつを殺せ」
新九郎の叫びに、柳生派が刀を抜く。左門が駆けつける前に始末するつもりなのはあきら

か、目が血走っていた。
「ならぬ、刀を収めよ」
数之進も声を張りあげたが、返って来たのは鋭い斬撃。
「無駄じゃ、だれも聞かぬ」
一角に背中を押されて、仮屋の方に戻る。藤之助は、喜内と勝矢に守られながら、柳生派を次々に斬り捨てていた。鬼神のごとき戦いぶりに思うところがあったのか。主膳と仁左衛門も喜内派となって、剣を振るっている。光徳院は百合に導かれて、奥御殿の方に向かっていた。
「清治郎さん」
数之進は清治郎の腕を摑み、百合たちの後を追いかける。背後を守っていた一角は、三人に斬りつけられていたが、
「早う行け、おれにかまうな。じきに鳥海様がおいでになる」
大声で告げた。下手に手助けする方が危ないと、数之進は判断する。あとわずか、左門が来るまでの間だ。一角の腕があればしのげる。時折、伸びて来る刃を、数之進は死に物狂いで弾き返した。
「わたしから離れるな」

「は、はい」

答える清治郎は、藤之助たちのことが気になるのかもしれない。しきりに背後を気にしている。ただひとり、危険を察しつつも、藩邸に留まった植木職人。清治郎に対する疑問は消えていないが、今は安全な場所に逃げることを優先させた。

「ここを抜ければ、武道場がある」

思わず安堵したが、先まわりしていたに違いない。

「貴様だけでも仕留める」

新九郎が木陰から姿を現した。刀は抜いていない、ふたたび腰を深く沈めて居合の姿勢を取っている。地を摺るようにして、じりじりと迫って来た。数之進は清治郎を追いやり、自分だけに引きつける。いちおう青眼に構えていたが、居合の達人を相手にするのは初めて。押されるようにさがって行ったが、怖ろしさで足がもつれる。

「うわっ」

と思ったとたん、転んでいた。尻持ちをついた反動で、握りしめていた刀が前に出る。それは間近に迫っていた新九郎の腹を刺しつらぬいた。

「ぐぅ」

呻きつつも刀を抜こうとしたが、いち早く一角が駆けつける。擦れ違いざま新九郎の喉に

一撃を送ろうとしたが、

「やめろ」

数之進の制止で、間一髪、刃を止めた。腹から鮮血を迸らせて、新九郎はくずれるようにその場に斃れる。

「無事か、怪我は？」

一角の問いかけに、声を震わせて答えた。

「け、怪我の功名というやつかもしれぬ。転んだお陰で助かった」

「それを言うなら『善く游ぐ者は溺る』であろう。こやつは己の技に溺れすぎたのじゃ。初手からなめてかかっていたに相違ない。されど、剣術には疎いおまえが見せた予期せぬ動きに、応じることができなんだ」

友は顔をあげ、彼方を見やる。

「鳥海様がおいでなされたようじゃ」

「戻ろう」

「わたしも参ります」

隠れていた清治郎とともに、池の方へ駆け戻る。両目付が現れたのを見て、諦めたのかもしれない。柳生派はすみやかに姿を消していた。藤之助たちは刀を収めて、その場に跪いた。

百合と光徳院も戻って来る。
「鳥海様」
数之進も跪き、頭を垂れた。
「怪我はないか」
「は。そちらに畏まっておられますのが、人見藩の新しい藩主、長良頼之様にござります。刺客の目をかわすため、亡き志摩守様の小姓として、ご奉公しておられました」
「長良頼之にござります」
「両目付様に申しあげます。殉死のことに関しましては……」
喜内の訴えは、野太い声に遮られる。
「過日の騒ぎにつきましては、すべて、それがしの一存にて行ったことでござる。介錯つかまつりましたのも、この片桐主膳。止めるべき立場のそれがしが、みすみす若い命を散らしてしもうたことに関しましては、いかようなお裁きであろうとも受ける覚悟。両目付様におかれましては、厳しいご裁断を賜りたく思い、お願い申しあげる次第にござる」
主膳はよどみなく訴えた。覚悟のうえだったのか、晴れやかな顔をしている。盟友を見おろす左門の方が辛そうだった。
「仔細は評定所にて、今一度、申し述べるがよい」

それでも声を乱さなかったのは、しっかり見届けてやりたいという気持ちの表れだろうか。

「ははっ」

主膳の答えが、騒動の終結を告げる。

人見藩の長い戦いが、ようやく終わろうとしていた。

## 五

「大殿は、二男の頼之様こそが、藩主の器であると常々、仰せになられておりました」

喜内は語った。生まれつき身体の弱かった長男に比べて、頼之は風邪ひとつひかない頑強な身体の持ち主。加えて、利発でおおらか。悪戯がすぎて怒られることもあったが、それさえも愛すべき資質のひとつとして、大殿は頼之を溺愛した。

「されど、用心のうえにも用心を。それが大殿のお考えでござった」

もしかすると、長男は長く生きられないのではないか。万が一のために、頼之はなんとしても守らなければならぬ。

「殿が跡目をお継ぎあそばされたのを機に、寅田藤之助として、小姓役に奉公させたのも大殿でござる」

寅田藤之助の正体を知っているのは、四天王と片桐百合のみ。長男に目が向いている隙に、

大殿は、幼い頃から頼之を藩主として徹底的に鍛えた。下屋敷における剣術指南、水練、弓や乗馬といった武道はもとより、華道や香道、歌に雅楽、そして、花を育てる技までをも、文字通り、手を取るようにして教えた。

「頼之様も、ようこたえられました」

天衣無縫なところもあるが、それが頼之の長所でもある。それならば突っ走らないよう、抑える術を身につけさせればいい。小姓として奉公させた裏には、子を愛するがゆえの深い親心があったのだ。

「我が藩に不穏な空気が漂い始めたのも、ちょうど同じ頃でござる。殿が跡目を継いだあたり、さよう、二年ほど前から陪臣として、柳生家の者が入りこむようになり申した」

はじめは剣術指南役として、江戸柳生の門弟を招き入れた。なんと言っても将軍家の指南役、また他の流派を学ぶことも、藩士にとっては必要なこと。しかし、知らぬ間に狼の数が増えていた。

「気づいたときには」

喜内は、きりっと下唇を噛みしめた。すでに後の祭り、狼たちは上級藩士と組み、御家乗っ取りを画策し始める。

〝藩主がお国入りしている隙に実権を我が手に〟

不穏な気配を察した大殿は、お国入りしていた藩主の見舞いと称して、二男も国許に行くという届けを出した。むろん偽りの見舞い行列である。国許に向かったのは、頼之の影武者だった。

それを見て、ますます逆意方は動きが派手になる。藩の大掃除をするためには、手荒な策も致し方なきこと。

「密命を受け申した」

それは、国許の志摩守から発せられたものではない、小姓方として奉公していた寅田藤之助――頼之が発したものだった。思いのほか深く入りこんでしまった狼たち。彼の者たちを片づけるには、鳥海左門の力を借りるしかない。

殉死。

これには四つの理由があった。ひとつは、幕府に血の訴えを発するため。ひとつは、藩士を鼓舞して、蜂起を促すため。ひとつは、殉死に目を引きつけておき、朝顔屋敷に隠されている親株の種を取り返すため。さらに、もうひとつ、頼之はおそろしいことを考えた。

「『人見の血達磨』でござる」

淡々とした喜内の口調が、いっそう凄惨さを感じさせる。血達磨物として、世に伝わる話は幾つかあるが、知られているのは『細川の血達磨』と呼ばれる話であろう。

細川幽斎（一五三四～一六一〇）のもとに、浪人の兄弟が仕官を求めてきた。いずれも器量充分の人物。幽斎は兄を四百石、弟を三百石で召し抱える。

江戸の大火の折、細川家の屋敷にも火が燃え移る。人々は避難し、大事な道具も安全な場所に移されたが、幽斎秘蔵の達磨の掛け軸が、御殿の床に掛けたまま取り残されてしまう。幽斎から「危ないときは逃げるように」と言われて、屋敷に駆けつけた兄弟。炎と煙をくぐり抜けて、なんとか掛け軸を外したものの、時すでに遅し。火に覆われてしまい、逃げ道を断たれた。

〝召し抱えていただいた御恩を返すのは今しかない〟

兄は弟の首を切り、切り口から内臓を抜いたうえで、空ろになった弟の体内に、羽織に包んだ掛け軸を入れる。そのうえで兄は自分の腹を十文字に切り、腹の切り口に弟の亡骸を押しこみ、しっかり弟に抱きついたまま絶命した。

「おおよそのことについては、生田殿のお考えどおりでござる」

喜内は言った。親株の種を奪い返した折、四天王のひとりは死んだが、中林勝矢は、杉崎春馬たちに助けられた。春馬によって密かに届けられた親株の種を、喜内は盟友の腹に隠したのである。

絶対に見つけられない場所。

「それがしは、十文字に切られた盟友の腹に、油紙で二重に包んだ朝顔の種を入れたのでござる。素知らぬ顔でその亡骸を菩提寺に納め申した」

三分の一ほどは〈岩田屋〉に渡して、肥後の小鉢本葊作りに仕立てさせた。『朝顔合せ』を行い、連中を誘き出して、最後の決着をつけるためであるのは言うまでもない。

「もしや、清治郎さんは」

非礼を承知で数之進が発した問いかけに、喜内たちは苦笑いを返した。

「大殿の忘れ形見でござる」

愛妾（あいしょう）が生んだ子を、大殿は、子がいなかった出入りの植木屋に託した。実の母は出産時に死亡、光徳院は自分が育てたいと申し出たが、聞き入れなかったようだ。あるいは清治郎に夢を託したのかもしれない。自由のきかない我が身を思い、清治郎にだけは自分が愛した花の道をとでも思ったのか。

「大殿は清治郎殿を養子に出した時点で、〈岩田屋〉とは縁を切り申した。されど、清治郎殿だけは、密かに出入りなされていた次第。むろん出自もあきらかに告げており申す。此度の騒動を知り、われらとともに、人見藩の行く末を見届けたいと」

それゆえ清治郎は、危険を承知で喜内に同道したのだ。だれの胸にも、死んだ二人のことがある。殉死は、柳生派に押されて、上級藩士の言いなりになるしかないと、なかば諦めて

いた若い藩士をも奮起させた。

「犬死にではござらぬ」

振り絞るように喜内は言った。

「我が友は、立派に役目を果たし申した」

涙をこらえて、さらに続ける。

「はじめは、『人見の血達磨』などと、頼之様に対して、いささか疑念が湧いたのでござる。亡骸にそんな真似をと」

ほどなく喜内は、頼之の考えが正しかったことを知る。柳生派だけでなく、主膳や父である仁左衛門までもが、血眼になって種を探し始めたからだ。

「下屋敷はむろんのこと、奥御殿にまで盗人が入るにいたっては、頼之様のご慧眼に感服するしかござりませぬ。父があそこまで、愚かだとは思いませなんだ」

脅したり、宥めたりと、懸命に種の在処を聞き出そうとしたのはあきらか。父子は日に日に、対立の度合いを深めていった。喜内と仁左衛門、百合と主膳。二組の父子の対立が、そのまま人見藩の対立を示している。柳生派を攪乱するため、頼之のふりをして藩邸入りした中林勝矢は、血達磨の掛け軸を姉の家に届け、種の在処を数之進に伝えた。

「寅田殿、いえ、頼之様は、なぜ、殉死の真似事をなされたのですか」

数之進は素朴な問いかけを発した。狂言であるのは確かだが、それを行った理由がわからない。

「怪しまれぬためでござる」

喜内が答えた。

「父と片桐殿が、探るような素振りを見せまして。頼之様は、豪胆なご気質や、お顔立ちが亡き大殿に似ておられまする。それに気づいたような気配があったため、頼之様は、それならばと、うつけに徹することにした次第。いや、むろん、われらはお止めいたしました。仮にも次の藩主でござる。なにも腹を切るようなことまではしなくてもいいのではないかと」

〝死んだ二人の痛みに比べれば、なにほどのこともない〟

頼之はさらりと言い、一角や藩士が騙されるほどの『うつけ』になりきった。主膳は芸目付として、頼之の傷口まで確かめている。それが功を奏したのだろう、向けられた疑惑の目が、頼之から完全に逸れた。

「頼之様のお姿が人目にふれぬよう、慎重にお育てあさばされたのは、大殿の智恵。されど、そこから先は、頼之様のお考えにござります。われらはよき主に仕えられることを心から幸せに思います次第。生田殿。最後にひとつだけ、それがしもお訊ねいたしたき儀がござる」

「なんなりと」

「早乙女殿は気づくのが遅れたようでございまするが、生田殿は頼之様の正体を見抜いておられたご様子。いつ、寅田藤之助が頼之様であるとお分かりになられたのでござるか」

「幾つかの事柄が、積み重なりまして、『もしや』と思うにいたりました。ひとつは、喜内様のことを悪し様に言うたのは、寅田殿のみ。これがまず引っかかりました」

「もうひとつは、我が上役に会うたときのことでござる」

一角が言葉を継いだ。

「頼之様と喜内様は、浪人姿の鳥海様を見たとき、驚いておられましたゆえ、鳥海様のことを知っていたのではないかと。われらの身辺をあらかじめ調べていたのではないかと思うた次第。もっとも、それがしは『寅田藤之助は、いつもああいう顔をする男なのじゃ。阿呆面が得意でな』と一蹴いたしましたが」

小さな笑いを受けて、数之進が続ける。

「さらに、もうひとつ。百合様と申せば、おわかりになりますか」

朝顔屋敷において、百合が見つめていた先にいたのは、そう、寅田藤之助だった。詳しい説明は必要ない。

「なるほど、さようでござったか」

同席していた頼之は、わずかに頬を赤らめる。すべての責(せき)を負った片桐主膳の娘、百合と

のこれからが気にならなくもない。しかし、主膳は昨年末、妻に離縁状を渡していたと聞いている。おそらく左門はうまく取り計らってくれるだろう、いや、取り計らってほしかった。

「争いは『あってはならないもの』、侍の刀は、敵を攻撃するためのものではない、泰平の世の秩序を守る『護国の剣』であると、生田殿は、柳生宗矩殿の『兵法家伝書』を引用して仰せになられました。あのお言葉を、われらは終生、心に焼きつけまする」

頼之と喜内たちが、深々と頭をさげる。腹に深傷を負いながらも、藩士の前で見事、新藩主の実力を見せつけた頼之。もはや異を唱える者はいまい。

今日が人見藩のあらたな船出の日だった。

## 六

五日後。

数之進と一角は、大川に面した浅草の料理屋に来ていた。慰労を兼ねた花火見物を、左門が手配してくれたのである。大川に張り出した川床は、もちろん花火を眺めるのにもいいが、なにより涼しい風が極上の贈り物といえた。そろそろ六つ（午後六時）の鐘が鳴る頃であるにもかかわらず、江戸の町には昼の暑さが残っている。

「われらが一番乗りか」

一角は、川床に腰を落ち着けて、周囲を見まわした。左門や姉たちは、まだ姿を見せていない。二人は湯屋に行き、その足でここに来たため、上役たちとは別行動になっていた。

「ここは涼しいな。極楽だ」

数之進は目を細める。試し上げのような花火が、時折、暮れかけた空に小さな花を咲かせていた。

「鳥海様は殊の外、お疲れのご様子であった。今宵は、ゆるりと寛いでいただきたいものよ。適当なところで、われらは姿を消そうではないか」

一角の粋な提案に異論を唱えるつもりはない。

「姉上も楽しみにしておられるであろう。されど、姉様は帰らぬのではあるまいか」

「杉崎春馬を誘えばよかったか」

「よせ。せっかくの宴が、殴り合いの場になるのは困る」

「然り」

笑って、一角は続けた。

「村上様に伺うたのだが、片桐様が鳥海様にしみじみ申されたそうじゃ。『よい配下を持ったな』と」

それに対して左門はこう答えた。

〝配下ではない、二人とも、わしの倅よ〟

「ありがたいことよ」

数之進は左門が座るであろう場所に頭をさげる。片桐主膳の詮議は、今少しかかるとのことだった。とうの昔に覚悟を決めていたのか、

〝時期外れの大掃除が、これでようやく終わった〟

と安堵した様子だったらしい。もしかすると、主膳は大掃除を実行するために、敢えて憎まれ役を引き受けたのではないのだろうか。だれかが詰め腹を切らなければ、騒動はおさまらない。

〝殉死の場を見たとき、身体が震え申した〟

数之進の頭には、『変化朝顔』となった村井嘉津次のことが浮かんでいた。

〝四天王は真の侍でござる〟

己が感じたままを告げると、信じられないことに、喜内は快く仲間として受け入れたのである。流石に寅田藤之助が長良頼之であることまでは教えてもらえなかったようだが、藩主と百合のことについて、数之進にさりげなく知らせるという重要な役目を仰せつかった。見事、大役を終えて、嘉津次は人見藩に骨を埋める覚悟を決めている。

「田辺新九郎はどうなるであろうか」

次に浮かんだのは、家老格として人見藩に入るはずだった男のこと。数之進の刃を受けたにもかかわらず、一命を取り留めている。彼の者にとっては厳しい明日が待っているように思えた。

「柳生家にはいられまいな」

一角はあっさりと言った。

「新九郎は、今の江戸柳生を現しているような男じゃ。腕前も評判倒れであったのはあきらか。鍛錬を怠り、口先だけで世を渡っていたのであろうさ。居合の達人というのも、自分で流した噂やもしれぬ。まあ、抜かずに気迫だけで相手を封じるのが居合の極意ゆえ、そういう意味では『抜かずの達人』だったのやもしれぬが」

皮肉まじりの言葉は、あながち的外れとは言えないだろう。すでに江戸柳生は将軍家の剣術指南役としての力を失っている。田辺新九郎は最後の徒花だったのかもしれない。

「あの、失礼ですが、生田様でございますか」

不意に仲居が来た。

「いかにも、生田だが」

「こちらにおられることを、どなたかに聞いたと仰って、訪ねていらした方がいるのですが、

ご案内しても宜しいでしょうか」
「通せ。ついでに酒を頼む、冷えているやつをな」
一角の言葉に、仲居が答える。
「畏まりました」
「だれであろうな」
数之進は、戻って行く仲居を目で追った。左門と姉たちであれば、今のようなやりとりは不要なはず。仲居が案内して来た男を見て、二人は笑みを浮かべる。
「清治郎さんではないか」
「よい時に訪ねて来たものよ。今宵は慰労の宴じゃ。色々とご苦労であった。おまえもここに座って飲め」
友が座るよう示したが、清治郎は小さく首を振る。
「いえ、すぐにお暇いたします。今日は生田様にお見せしたいものがありまして」
と、抱えていた細長い抽斗箱（ひきだしばこ）を座敷に置いた。小間物屋が持ち歩くような品で、幾つも引き出しがついている。真新しいそれは、数之進の助言に従って、急ぎ造らせたものに違いなかった。
「朝顔の花の見本箱でございます」

「おお、これか。実際に見ると感無量だ。わくわくするな」

数之進は座り直して、清治郎の手元を見る。引き出された一番上の中には……今朝、咲いたばかりの朝顔の花が入っていた。

見本の花を萎れさせない法はないものか。

清治郎から持ちかけられた相談事、心太を食べたとき、数之進は閃いた。

そうだ、寒天を使えばなんとかなるのではないか、と。

「萎れておらぬ」

一角が次々に引き出しを引いた。冷ました寒天が固まらぬうちに、摘んだ花を入れた引き出しに流しこむ。そうすれば、夕方ぐらいまでは保つかもしれない。思惑は見事にあたり、どの引き出しの朝顔も摘んだときの美しさを保っている。

「千両智恵のお陰でございます」

清治郎はにこやかに頭をさげた。

「引き出しは、仰せのとおり、黒っぽい木や白っぽい木で作りました。白い花のときは、黒っぽい木の引き出し、赤い花のときなどは、白っぽい木の引き出しに入れてあります。これもよい考えだと思いました。花の色が映えるのですね」

「うむ。花をより鮮やかに見せるには、引き出しの木の色を微妙に変えるのがよかろうと思

うてな。わずかなことで差が出るゆえ」
「はい。本当にありがとうございました。明日から苗木を売る際、この抽斗箱も持ち歩くようにいたします。どんな色の花が咲くのかわかった方が、客の財布もゆるむでしょう。変化朝顔であれば、いっそう興味が湧くと思います」
「清治郎さんのお陰で、わたしもよいことを学ばせてもろうた。朝顔にも、さまざまな物語があるらしい」
「さよう。花の数だけ、な」
一角が言葉を継ぎ、目で母屋の方を指した。仲居に案内されて、世津と女友達の美也が、こちらに近づいて来る。照れ隠しだろうか、一角が大きな声で言った。
「鳥海様は、気を利かせすぎじゃ。よけいなおまけまで付いてきおったわ。美也、おれとおまえは邪魔者じゃ。馬に蹴られるぞ」
「まあ、ご挨拶ですこと」
「気にするな、美也さん。一角は嬉しいと悪態をつく癖があるのだ」
「ちっ、よけいなことを言うでない。調子に乗るではないか」
やりとりを笑顔で見ていた清治郎が、暇を申し出た。
「では、生田様、早乙女様。わたしはこのあたりで失礼いたします」

「あら、これは？」

世津が、引き出しの朝顔に目を留める。数之進は手短に説明した。萎れさせない法が、女子にもあればいいのにと、一角がまた要らぬひと言を口にする。

「朝顔も花火も、一瞬の美しさだからこそ、よけいに愛おしく思えるのではないでしょうか」

世津がしみじみ呟いた。

「うむ。『幻の花』も幻だからこそ、よけいに愛おしく思えるのやもしれぬな」

「え？」

「いや、なんでもない」

数之進は、夜空に開いた華を見あげた。暦の上では秋が近づいている。しかし、梅雨が終わった六月の江戸は、これからが夏本番だった。

〈参考文献〉

「江戸の数学教科書」桜井進　集英社インターナショナル
「江戸の病」氏家幹人　講談社選書メチエ
「大江戸残酷物語」氏家幹人　洋泉社
「金貸しの日本史」水上宏明　新潮新書
「江戸時代　人づくり風土記29（奈良）」農文協
「江戸時代　人づくり風土記23（愛知）」農文協
「江戸時代　人づくり風土記43（熊本）」農文協
「現代農業（２００９年４月号）」農文協
「現代農業（２００９年５月号）」農文協
「享保改革の経済政策」大石慎三郎　御茶の水書房
「江戸の名奉行」丹野顯　新人物往来社
「徳川将軍と柳生新陰流」赤羽根龍夫　南窓社
「別冊歴史読本・柳生一族（新陰流の剣豪たち）」新人物往来社
「徳川将軍家十五代のカルテ」篠田達明　新潮新書
「（ものと人間の文化史10）竹」室井綽　法政大学出版局
「江戸の花競べ（園芸文化の到来）」小笠原左衛門尉亮軒　青幻社

# 解説

細谷正充（ほそやまさみつ）
（文芸評論家）

六道慧の「御算用日記」シリーズが、本書『護国の剣』で、ついに二桁の大台に乗った。めでたいことである。昨今の文庫書下ろし時代小説界を眺めれば、たしかに十冊以上のシリーズは多い。だが一方で、そこまで行くことなく終了するシリーズも、少なからずあるのだ。作者のモチベーション。長期シリーズを支えるだけの、作品世界の作り込み。読者の人気。この三点を満たさなければ、とてもではないが二桁の大台は望めない。それを「御算用日記」シリーズが、見事にクリアしていることを、本書は証明したのである。

さて、シリーズに解説が付くのは初めてとのことなので、作者の経歴やシリーズの軌跡を踏まえながら、じっくりと作品の内容を語ることにしよう。まずは経歴。六道慧は、東京の両国生まれ。持ちこみという、今ではあまり考えられないやり方で作品を売りこみ、一九八八年一月、朝日ソノラマ文庫より『ムーの大神』を刊行して、デビューを果たした。なお、この作品は「大神伝」シリーズとして、全九巻で完結。外伝に、飛鳥時代を舞台にした時代

物『小角伝説　飛鳥霊異記』がある。

以後、ジュブナイルの世界で活躍し、作家としての地位を築いた作者だが、一九九二年五月に光文社文庫から書下ろしで出版した『聖母烈伝1　こちらトライアングル』で、最初の転機を迎える。役に立たない超能力を持つ三人の美女のドタバタ騒ぎを描いたこの作品は、積極的にお色気シーンを盛り込んだ大人のエンタテインメントとして、従来のジュブナイルとは一線を画した世界を確立したのである。

さらに二〇〇〇年八月に光文社文庫から刊行した『おぼろ隠密記』で、本格的に時代小説に進出。すぐさまシリーズ化された。その他に「くノ一元禄帖」「十手小町事件帳」シリーズが執筆されている。どれも魅力的なヒロインが活躍する、痛快作であった。また、濃厚なお色気シーンも多く、こちらもお楽しみである。

これだけでも変転極まりないが、まだまだ作者は止まらない。二〇〇四年六月に双葉文庫から刊行した『花も花なれ』から、江戸の空の下に生きる人々を、情感たっぷりに描いた作風へとチェンジ。その後は、この路線に専念し「御算用日記」「いろは双六屋」「深川日向ごよみ」「御家人風来抄」等のシリーズを書き継ぎ、現在に至るのである。

かなり作風の変化の激しい作者だが、これには理由がある。一九九四年八月に出した同人誌『聖母㊙烈伝』の「あとがき」で作者は、

「この本はあちこちから、さまざまな反応をいただきました。本編の『あとがき』などにも書いたので、細かい点は省きますが、なにしろ、男性編集者の反発がすごくってねえ。苦笑いしながら『読めなかった』と率直におっしゃる方、いちおう読んではくださったものの『やはり従来のようなものを書き続けてほしい』と、もはやできもしないことを望む方など。まあ、あまり歓迎されなかったわけです。

でもさあ（いきなり、くだける）、無理なんだよね、そんなこと言われたって。物書きだって多少なりとも成長しているわけだし。『聖母』なんか、勝手にあふれ出してきちゃったんだもの。理屈や理論なる文字は、はっきり言ってわたしの辞書にない」

といっている。そうなのだ。作風の変化は、作者の成長の証しなのである。作家として成長しようとする内的必然が、作者を新しい世界へと向かわせるのである。だから作風が、変わらざるを得ない。実に作家として、誠実な姿勢といえよう。

経歴はこれぐらいにして、次は「御算用日記」シリーズを俯瞰してみたい。シリーズ第一弾『青嵐（あおあらし）吹く』が、光文社文庫で書下ろし出版されたのは、二〇〇五年三月のことであった。刊行されるや、私の周囲の時代小説ファンの間で、ユニークな内容が話題になったもの

である。何がユニークか。主人公のキャラクターや設定、何もかもがユニークであった。

主人公の生田数之進は、元加賀藩士だ。風体は冴えないが、勘定方としての能力は抜群。おまけに記憶力も凄まじく、蘊蓄の塊のような人物である。だが彼の心は鬱々としていた。本来は加賀藩士として平穏な毎日を送るはずが、姉ふたりの借金を背負い、幕府御算用者を務めるはめになったのだ。

数之進は、四人姉弟の末っ子。上に三人の姉がいる。長女の伊智はしっかり者だが、問題は着道楽の二女・冨美と、食い道楽の三女・三紗。ふたりの作った借金が、なんと三百五両である。借金返済のため、泣く泣く、幕府御算用者になったが、この役目、どうも怪しい。上役となる両目付の命により、七日市藩の江戸藩邸に勘定方として潜り込んだものの、幕府の狙いが藩の傷を見つけて取り潰すことかもしれないと思えば、いまひとつやる気が出ないのだった。おまけに数之進の後を追って、冨美と三紗も江戸にやってきて、彼の暮らす長屋に居座った。しかも到着早々、詐欺に引っ掛かるなど、頭痛の種は絶えない。

そんな数之進を気に入ったのが、七日市藩の小姓・早乙女一角だ。美男で武芸十八般を豪語する一角と、いつの間にか親友になった数之進は、やがて藩に隠された秘密に気づく。さらに両目付の鳥海左門の目的が、幕府の命に秘かに逆らい、狙われた藩を救うことだということも判明。勇躍、数之進は智恵を絞り、七日市藩の危機を救うのだった。

以後、やはり御算用者になった一角とコンビを組んだ数之進は、さまざまな藩の江戸藩邸に潜入。藩の秘密を暴くと同時に、一件を丸く収めるために、千両智恵を発揮する。これがシリーズの基本パターンだ。チャンバラがまったく駄目で、智恵だけで勝負をする主人公のキャラクターや、ひねりを加えた御算用者の設定がユニークである。さらに各巻で描かれる、諸藩の騒動も興味深いものばかりだ。藩の内情に絡んで、一作ごとに新たな知識（本書でいえば朝顔）が得られて、ちょっと得した気分になれるのである。

また、シリーズ第六弾『月を流さず』では、長姉の伊智が江戸に来臨。第七弾『一鳳を得る』では、数之進がお姫様との身分違いの恋に身を焦がす。第九弾『星星の火』では、藩取り潰しを狙う諸悪の根源である老中・松平信明と直接対決をするなど、一冊ごとの読みどころがあり、シリーズの読者を摑んで離さない。さらに第八弾『径に由らず』から、総菜屋の世津が登場。数之進の新たな恋の相手となりそうである。このふたりの、じれったい恋愛も、現在のシリーズの注目どころといえよう。

そしてシリーズのもうひとつのポイントが、冨美と三紗の巻き起こす騒動だ。江戸に出てきてすぐに富士講詐欺に引っ掛かったのをはじめ、拐かし、怪しげな宗教、捨て子と、次から次に問題に巻き込まれては（自ら進んで巻き込まれているような気もするが）、数之進を悩ませる。さらにふたりの恋模様も賑やか。冨美は鳥海左門と相思相愛になるが、何かと

気を揉んでいる。三紗はといえば、どうも問題のある相手ばかりに惚れてしまうようだ。現在は、シリーズ第五弾『春風を斬る』から登場し、数之進や一角とは微妙な関係にある「柳生五人組」のひとり、杉崎春馬に夢中なのである。

いや、それにしてもだ。とにかくこの姉妹は強烈。自分たちの尻拭いを弟に押しつけながら、数之進に対してはいいたい放題。反省という言葉も知らないのか、江戸に着いたそうそう、町に繰り出す。どちらも美人ではあるが、こんな女性は願い下げ。シリーズ第一巻を読みだしたときは、とにかくマイナスのイメージしかなかった。

だが、これこそが作者の〝手〟であったのだ。シリーズを読み続けている読者なら理解していただけようが、要所要所に、彼女たちの魅力をアップさせる言動やエピソードが挟み込まれているのだ。おまけに、冨美は前掛作り、三紗は総菜売りと、意外な商才を発揮する。出発点がマイナスだけに、それが引き立つこと！　これはあれだ。不良がちょっとした善行をすると、異様に株が上がるのと一緒である。そんな言動やエピソードが積み重なり、いつの間にか彼女たちを苦笑と共に受け入れてしまう。まさに六道マジックである。

本書『護国の剣』は、そんなお騒がせシスターズが、またまた無理難題を言い出すところから始まる。ふたりは見世を構えたいというのだ。まだ借金が百二十五両もあるのに、さらに借金をして見世を出すなど言語道断。なんとか姉たちをなだめる数之進だが、その間にも、

彼の千両智恵を借りようと、長屋の前に行列ができる有り様。朝顔を萎ませない方法といった難問は、さすがの数之進も即答できず、まずは竹林になっている場所を畑に変えたいという訴えに応えるべく、親友の早乙女一角と共に竹林に赴く。ところが、そこでふたりは、謎の刺客に襲われる。どうやら次に潜入する藩が送り込んだらしい。また、鳥海左門の屋敷にも「お助け侍の善意につけこみ、始末しようとする輩あり。此度の潜入は危険。待ち受けるのは虎と狼なり」という投げ文があった。今回、彼らが潜入するのは、人見藩の江戸藩邸。大きな陰謀を予感しながら、数之進と一角は、騒動の渦中に飛び込むのだった。

姿を見せない次期藩主。過去に起きた殉死。藩を侵食する老中の魔の手。幾つもの謎と思惑が錯綜しながら、物語は進行する。冒頭に登場したある人物が、後半になり、人見藩に絡んでくる構成も鮮やか。頼之の正体や、殉死に隠された秘密も面白い。複雑なストーリーを捌き、かっちりと纏め上げる、作者の手腕に脱帽だ。

そして人見藩のために命がけで働く姿から、生田数之進という男の魅力が、くっきりと立ち上がってくる。たしかに数之進の千両智恵は素晴らしい。だが、本当に素晴らしいのは、彼の信念だ。自らを商人侍と思い定め、自分よし、相手よし、世間よしの〝三方よし〟の精神で、救うべき相手に疑われながらも、危機に陥った藩を助けるのである。作者は「週刊読書人」二〇〇九年八月七日号の「夏の文庫大特集!!」に、本書についての一文を寄せている。

その中で、

「愚直に生きる数之進が、私は愛おしくてなりません。不器用でもいい。こつこつと地道に努力することこそが大切であると、私は数之進に教えられたような気がします」

と述べている。作者自身に、ここまでいわせるほど、生田数之進の生き方は、人々を惹きつけるのだ。それこそが彼の最大の魅力であり、シリーズの最大の魅力となっているのである。

最後に、数之進のいう〝三方よし〟は、このシリーズにも当てはまることを指摘しておきたい。だって、作家よし、出版社よし、読者よし、ではないか。〝三方よし〟で、誰もがニコニコと幸せになれる「御算用日記」シリーズ。これから二十冊、三十冊と続くことを、期待せずにはいられないのである。




光文社文庫

文庫書下ろし／長編時代小説
護国の剣　御算用日記
著者　六道慧

2009年9月20日　初版1刷発行

発行者　駒井稔
印刷　堀内印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社 光文社
〒112-8011　東京都文京区音羽1-16-6
電話（03）5395-8149　編集部
8113　書籍販売部
8125　業務部

© Kei Rikudō 2009
落丁本・乱丁本は業務部にご連絡くだされば、お取替えいたします。
ISBN978-4-334-74652-0　Printed in Japan

Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（03-3401-2382）にご連絡ください。

組版　萩原印刷

**お願い**　光文社文庫をお読みになって、いかがでございましたか。「読後の感想」を編集部あてに、ぜひお送りください。

このほか光文社文庫では、どんな本をお読みになりましたか。これから、どういう本をご希望ですか。

どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。当社の規定により本来の目的以外に使用せず、大切に扱わせていただきます。

光文社文庫編集部

お助け侍・数之進の千両智恵が冴え渡る！

# 六道慧

時代人情小説に新風を吹き込む
大好評「御算用日記」シリーズ

青嵐吹く
天地に愧じず
まことの花
流星のごとく
春風を斬る

月を流さず
一鳳を得る
径に由らず
星星の火
護国の剣

三国志傑物伝　三好　徹
史伝　新選組　三好　徹
仇花　諸田玲子
善知鳥伝説闇小町　山内美樹子
だいこん　山本一力
人形佐七捕物帳（新装版）　横溝正史
修羅裁き　吉田雄亮
夜叉裁き　吉田雄亮
龍神裁き　吉田雄亮
鬼道裁き　吉田雄亮
閻魔裁き　吉田雄亮
観音裁き　吉田雄亮
火怨裁き　吉田雄亮
転生裁き　吉田雄亮
陽炎裁き　吉田雄亮
十手小町事件帳　六道　慧
まろばし牡丹　六道　慧

ひよりみ法師　六道　慧
いざよい変化　六道　慧
青嵐吹く　六道　慧
天地に愧じず　六道　慧
まことの花　六道　慧
流星のごとく　六道　慧
春風を斬る　六道　慧
月を流さず　六道　慧
一鳳を得る　六道　慧
径に由らず　六道　慧
星の火　六道　慧
駆込寺蔭始末　隆慶一郎
レイチェル・ヘイズの火影　ダグ・アリン　木下　晋也
夜明けのフロスト　R・D・ウィングフィールド　芹澤恵　訳
零下51度からの生還　ベン・ウィリアムズ　山本光伸　訳
ホームズ対フロイト　キース・オートリー　小林司　東山あかね　監修　熊谷千寿　訳
サラマンダーは炎のなかに（上・下）　ジョン・カレ　加賀山卓朗　訳

ISBN978-4-334-74652-0

C0193 ¥629E





定価（本体629円＋税）

**護国の剣** 御算用日記　六道慧

尚武の気風を誇る肥後国人見藩では、急逝した前藩主の近習二人が、御法度の殉死を犯したとの疑惑が持たれていた。友の早乙女一角とともに潜入した幕府御算用者の生田数之進は、御家乗っ取りを狙う老中首座・松平信明と「交ざり者」の企てを阻止できるのか。姿を見せぬ前藩主の弟。そして、人見藩の至宝、幻の花とは何か。人気絶頂の大好評シリーズ、待望の第十弾！